
END OF THE WORLD

ゼロ&インフィニティ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

END OF THE WORLD

【Nコード】

N6295N

【作者名】

ゼロ&インフィニティ

【あらすじ】

ごく普通の少年、逢海寛人^{おつみひろと}はある日、非日常と遭遇する。それは謎のウイルスに感染した者が死者として歩き回り、生存者を喰い殺していく。そして奴らに噛まれた人間も”奴ら”の仲間となる。死んだ世界で主人公達は死という運命から逃れるため、生きるために戦う。彼らに未来はあるのか？それとも・・・？

生存者名簿（順次追加）（前書き）

ようやく作れたキャラ紹介です。今後、増えれば更新していきます。

生存者名簿（順次追加）

逢海 寛人
おつみ ひろと

年齢：15歳 特技：近接戦闘

詳細：成績はパツとせず、ルックスも悪くない程度の中学生。基本的にあまり優れた面は無いが、いざとなるとリーダーシップを発揮したり、愛用の金属バットで先頭にたって応戦する。実は鈴に好意を抱いていたりする。

三笠 雅人
みかさ まさと

年齢：15歳 特技：パソコン

詳細：成績優秀で物静かな中学生。寛人の親友。性格は悪くないが、何時もパソコンをいじっていて、オタクチックなところがあるので、あまり女子からの評価は高くない。一言で言うところヘタレ。

佐倉 鈴
さくら りん

年齢：15歳 特技：剣道

詳細：活発で明るい体育会系の少女。顔は申し分の無い美少女で生徒会長も務めているアイドル。その性格の良さから、男子生徒から絶大な人気を誇っている。寛人に好意を抱かれているが、全く気付いていない。

鷹見 真一
たかみ しんいち

年齢：32歳 特技：コーヒーを入れるのが得意

詳細：何処にでもいるごく普通の男で、警察官。退屈な日常に不満を抱いていたりした。性格は可もなく不可もなくといった感じで、ルックスも普通。彼女いない歴三十二年。

佐伯 卓
さえき すくも

年齢：29歳 特技：主にデスクワーク
詳細：内気で気弱な警察官。真一の同僚でもある。とても仲間思いで、殉職した同僚のことで悲しんでいる。真一とは中々いいペアで、普段から一緒に行動することが多い。

矢島 健 やしま けん

年齢：32歳 特技：格闘技
詳細：自由奔放、豪快な警察官で、真一の同僚。トラブルを楽しんだり、調子に乗る面がある。しかしやる時はやる男で、正義感がとても強い。

橘 響夜 たちばな きょうや

年齢：33歳 特技：色々、数え切れない
詳細：クールなイケメン。対特殊災害先行部隊「翡翠隊」隊長で、類まれな運動神経と頭脳で部隊を指揮する。昔は重度のスコンで、友達からもからかわれていた。実は心に色々と闇を抱えている。

伊東 準一 いとう じゅんいち

年齢：33歳 特技：射撃
詳細：翡翠隊副隊長を務める穏やかな男性。響夜とは同期。隊でのポジションは前衛で、響夜と一緒に前線で戦う。性格は非常に温厚で、優しい。結婚していて妻が居る。

白鳥 俊 しらいとり しゅん

年齢：28歳 特技：至って標準的
詳細：翡翠隊の隊員で、性格は大人しい。隊でのポジションは前衛の援護。能力は標準的だが、とても仲間意識が強い。結婚もしているが、式は挙げていない。

狼森 海斗 おいもり かいと

年齢：31歳 特技：重火器の扱い

詳細：翡翠隊の隊員。性格は冗談好きで、ひょうきん。隊でのポジションは重火器担当で、後方からの支援を担当する事が多い。

まつやま
松山 武敏

年齢：31歳 特技：通信系等

詳細：翡翠隊の隊員で、狼森とは同期。隊でのポジションは情報処理で、主に通信などを担当する。そのため手持ちの武器は小型の物が多い。

むらかみ
村上 圭一

年齢：30歳 特技：爆弾の設置、解除

詳細：翡翠隊の隊員。正義感がとても強く、手先が器用。隊でのポジションは主に爆破工作などを行う工兵で、爆弾やその手の物に詳しい。

やまがた
山縣 省吾

年齢：29歳 特技：狙撃

詳細：翡翠隊の隊員。隊で一番の狙撃の腕を持つ。隊でのポジションは後方からの狙撃。ちなみに狙撃の腕は五百メートル離れたところから林檎を正確に撃ち抜くほど。

あさひな
朝比奈 一

年齢：32歳 特技：車の運転

詳細：翡翠隊の隊員。車の運転テクニックは一流で、レーザーとしてもやっていけるほど。隊でのポジションは山縣と同じく狙撃。

しまはら
島原 和泉

年齢：15歳 特技：縫い物

詳細：渡良瀬在住の中学生女優。ほんわかした癒し系で、大人気の

アイドル。足が不自由で、松葉杖を手放さない。響夜の妹、麻里に生き写らしい。

はせがわ
長谷川 瑞穂

年齢：18歳 特技：歌

詳細：渡良瀬市のご当地アイドル。顔は和泉とはまた違った色気が出ていて、万人共通の美人。性格は結構、気性が荒い。若干、ツンデレ。

このの
今野 優香子

年齢：15歳 特技：水泳

詳細：水泳が得意。寛人達とはクラスが違うが、面識はある。いかにも最近の女、といった感じの性格をしていて、そこそこモテる。

さかい
堺 怜汰

年齢：15歳 特技：野球

詳細：野球部所属のゴツい男前。バットを握れば、百人力。寛人達とも優香子ともクラスが違うが、鈴と面識がある。鈴に惚れている。

まつした
松下 洋一

年齢：16歳 特技：喧嘩

詳細：律明学園の生徒で、金髪の不良。見かけによらず、根はいい人で友達思い。寛人達とは親友になる。戦闘力はかなり高めで、素手でも奴らに勝てる。

しもや
下谷 蓮

年齢：16歳 特技：地味に頭がいい

詳細：洋一の親友で、不良仲間。見た目はまんまがり勉で、不良には向いていない。もちろん喧嘩も弱い。洋一と同じで友達思い。

竹内 亮輔 たけうち りょうすけ

年齢：16歳 特技：サッカー

詳細：洋一の親友で、蓮と同じく不良仲間。彼女はいたが、この事件で死亡したため、鬱状態に陥っている。元はとても穏やか。

阿久津 風禰 あくつ かざね

年齢：18歳 特技：資料作成

詳細：律明学園の生徒会長。他校にも噂されるほどの美少女。生徒、教師からの信頼も大きく、事件が起こってから、リーダーシップを執っている。

刈谷 洪子 かりたに しぶこ

年齢：48歳 特技：弓道

詳細：律明学園の女教頭で、キツめの女性。生徒たちからは嫌われていて、何故か生徒会長と仲がいい。あまり悪い人ではないが、人からは好かれないタイプ。

浅代 華恋 あさしろ かれん

年齢：25歳 特技：色々

詳細：大製薬企業、御園製薬からの派遣員。かなりの美女。災害のためのボランティアと言っているが、裏がありそうな女性。

尾上 涼 おのがみ りょう

年齢：42歳 特技：料理

詳細：旭テレビ局の食堂のコックを務める男性。気さくで人柄のいい中年男性で料理の腕は一流。でも作者も存在を忘れてしまうほど、空気のキヤラでもある。

高野 康平 たかの こうへい

年齢：18歳 特技：喧嘩はそこそこ強い

詳細：私立律明学園に通う不良生徒。しょっちゅう他の生徒に絡んでは、暴力を振るっているので嫌われている。数人の不良仲間を連れている。

さいもと
道祖本 あやね
絢音

年齢：9歳 特技：英才教育を受けていたらしく、頭がいい

詳細：奴らに追い詰められているところを響夜と寛人に救助された少女。小学三年生。何処かのお金持ちの子供なのか、嫌味なほど頭がいい。ただし性格はいい。

ゝ序章ゝ（前書き）

まずはプロローグです。投稿は不定期になりますが、何卒ご理解ください。

〈序章〉

君は非現実を、非日常を信じる？信じない？

恐らく、大半の人間の答えは「信じない」だろう。

人は非日常を、スリルを求める生き物だ。

しかし、それが実現してしまった時、人は日常を、現実を求める。そして、人は後悔し、絶望する。

君は信じられる？

人だったもの、死者が歩き、生きとし生けるものを食い殺す光景を信じられるか？

そんなのゲームの中の話だ。って決め付ける人がほとんどだろうね。

でも、求めるよね？君はゲームや漫画、アニメを見てその世界に入りたいと思った事は無い？

ゾンビ系のゲームをやって主人公になりたい！なんて思った事は無いかい？

是非、やめておいた方がいい。現実で起こった時、君はきっと後悔するよ？

自分の運命に抗おうともがくはずだよ？

さあ、物語を始めようか。腐敗した死体が歩き回る、崩壊した世界の物語を……

ゝ序章ゝ（後書き）

次回から本編突入ですよ

逢海寛人 7月9日 午前11時27分 渡良瀬第三中学校 三年一組（前書き）

連投です。サブタイトルがサイレンぽいのは気のせいですよ

逢海寛人 7月9日 午前11時27分 渡良瀬第三中学校 三年一組

妙に眠い、それもそのはず。今は三時間目、一番僕が眠くなる時間帯だ。

今の授業は数学。教科担任は中村っていうゴツい中年教師だ。今も黒板をチョークで叩きながら、因数分解について、熱弁を振るっている。

「うるさいな……」

その大きな声に嫌気がさし、僕は窓の外に広がる市街地を眺めた。そして目を細める。

「何だ？」

何時も見ている市街地から、何本もの黒煙が立っているのを発見した。どうやら警察も出動しているようで、窓を少し開けてみると、サイレンの音が聞こえた。

その時には火事でも同時に起こっているのかな？家でも気をつけよう、位にしか思ってた。なかった。

次に僕は校門に目を降ろした。この教室は三階にあるので、ここから校門が良く見える。そして、校門を見て、目を凝らした。

「何してんだ？」

僕が目を凝らした理由、それは開け放たれた校門から数人の男性がよろよろと頼りなく歩いている光景が目に入ったからだ。

「酔っ払いかよ……よくまあ白昼から堂々と酔えるよな……」

僕が呟くと、その呟きが中村の耳に聞こえたらしく、大声で名前を呼ばれた。

「おい！逢海！」

「ふえ？は、はい！」

僕は咄嗟に気の抜けた返事を返した。中村はそんな僕を見て、教室に居る生徒全員に聞こえるように、わざと大きな声で言った。

「お前なあ。よくものんびりとしてられるよな？先月のテストの結果を見たのか？」

「見ましたです！はい！」

僕はまるで上官にでも返事をするかのごとく、キリツと言った。中村は僕を見て、溜息をついた。

「なら少しは勉強しろ！授業を真面目に受ける！いいな？」

「は、はいです！」

僕は敬礼をして、席に座った。

畜生、全員の前で大声で言いやがって、嫌がらせにも程があるぜ！僕は心の中で叫んでいた。言い返そうと思えば言い返せる。でも面倒だし、疲れるのでそれはしなかった。これが僕の処世術だ。

僕は再び、酔っ払い？に視線を戻した。丁度、数人の教師が校舎から出てきて、向かっていくところが見えた。

先頭の男性教師がそいつに近づき、話し掛けてるようだった。後

ろの教師はその様子を見守っている。

異変はその時起こった。突如、そいつが話し掛けていた男性教師の首に噛み付き、食い千切った。その男性教師は地面に倒れ、悲鳴をあげている様だった。そして、一瞬の硬直を見せ、動かなくなつた。死亡、僕にはそう見えた。

「おい！」

僕は遂、叫んで立ち上がってしまった。教室の視線が僕に集まる。中村が例によって例のごとく、何時もの感に障る声で怒鳴った。

「逢海！お前はどうすれば落ち着くんだった！五十分間位、静かに集中出来ないのか！」

「違いますよ！先生、校門で人が死んでいるんですよ！」

僕の一言でクラスの生徒全員が席を立ち、窓際に詰め寄った。僕は人に押されて、よろめいた。

続いて、中村も窓から外を見してみる。その途端に顔が強張った。

「全員、席につけ！自習をしている！先生が様子を見てくるから、教室から出ないように！」

そう言い、中村は教室のドアを勢いよく放ち、すっ飛んでいった。自習の一言で、教室は話し声に包まれた。皆がそれぞれ雑談を開始したようだ。

今だ窓の外を呆然と見つめていたら、後ろから声を掛けられた。

「なあ、寛人。説明してくれよ」

話し掛けてきたのは同じクラスの三笠雅人だ。みかさ まさと

雅人は眼鏡をかけた大人しい短髪の少年だ。その容貌通り、クラスでは大人しく、そして頭がいい。正に僕とは正反対という訳だ。何故、そんな雅人と僕が友達なのか、それはただ単に小学校一年の時からずっと同じクラスだったからだ。そんな訳で僕と雅人は一番の親友という訳だ。

とりあえず僕は雅人に説明を始めた。

「あの酔っ払いみたいな奴がいきなり話し掛けた先生を噛み殺したんだ。本当だぜ？僕は嘘は吐かないよ。まるで喰い殺されたみたいだった……」

僕がそう言うと、雅人は少し考え込むようにして、頭を垂れた。

雅人が顔を上げると、いきなり自分のバッグから携帯電話を取り出した。

「いいか寛人？今から教室を抜け出す。お前の話が本当なら相当ヤバイぜ」

「分かった」

僕は短く返事をして、自分のバッグから携帯電話とカッターを取り出した。役に立つかは分からないがあつて損はしないだろう。

それらを学生服のズボンのポケットに入れ、教室のドアに手を掛けた。

「待ちなさい」

静かな声が後ろから飛んできた。

僕と雅人が振り返る。そこに居たのは予想通りの人物であった。

「何処に行く気？教えて？」

それは生徒会長の佐倉鈴さくらりんであつた。黒の長髪のストレート、整つた顔立ち、普通の美少女だ。

鈴はそのまま僕たちに近づいてきた。正義感の強い彼女は自分達の行動が気になるらしい。

「何処に行くの？言つて」

観念した様に雅人が説明した。

「逃げるんだ。寛人の話が本当なら相当危険な状況だ。混乱が起くる前に安全な場所に閉じこもる」

「閉じこもる？外に逃げた方が安全じゃ？」

僕の質問に雅人が落ち着いた調子で答えた。

「いいか？奴らは校門から入ってきた。なら外の様子が確認出来るまで中に隠れた方が安全だ」

雅人の答えに僕は頷き、ドアを開け放つた。雅人が廊下を確認する。

「よし、行くぞ！」

「待つて！」

鈴が後ろで叫んだ。

僕が尋ねる。

「何？」

鈴は自分のバッグから木刀を取り出した。鈴は剣道部なのだ。鈴は僕たちの横を通り、廊下に出た。

「私も連れてって。お願い。ダメ？」

ほんの少し色気を含んだ声に僕らは戸惑った。雅人が頷いた。

「人は多い方がいい。一緒に行こう」

鈴が嬉しそうに頷く。教室の窓から様子を眺めていた生徒が声を上げた。

「何だ！英語の芳川が体育の山田を喰い殺したぞ！」

「殺人よ！」

その声に三人は顔を見合わせた。雅人が二人に僕と鈴にむかって言った。

「時間が無い！急ぐぞ！」

僕は頷いた。鈴も同じように頷く。ここに三人のトリオが結成されたのだ。僕たちは廊下をなるべく静かに走りだしていった。地獄へと向けて……

逢海寛人 7月9日 午前11時27分 渡良瀬第三中学校 三年一組（後書き）

いきなりキャラが二人増えましたね。

メンバー構成が学園黙示録と同じなのは気のせいです。

ご意見、ご感想、アイデアなどお願いします。

誤字・脱字のご報告もお願いしますね。

逢海寛人 7月9日 午前11時41分 渡良瀬第三中学校 校舎内（前書き）

前回の続き、視点は同じく寛人君たちです。

ちなみに寛人君たちの学校があるのは、渡良瀬市という太平洋側に面した架空の市です。

逢海寛人 7月9日 午前11時41分 渡良瀬第三中学校 校舎内

僕たち三人は教室を出て、隣の東校舎に走り出した。幸い、まだ混乱は起きていないようだ。

渡り廊下を通り、東校舎の三階へとたどり着くと、雅人は急に立ち止まり、一番奥の部屋に向かって走り出した。

「何処行くんだよ？」

「野球部の部室だ！金属バットか何かあるだろう！」

雅人は普段とは違って、汗を流しながら必死に走っている。滅多に見れない雅人の運動する姿を見て、僕は少し笑いがこみ上げてくるのを感じた。

「何笑ってるのよ！」

鈴に後ろから思い切り引つ叩かれる。僕は突然、後頭部に走った衝撃に驚き、叫び声を上げた。

「あいたああ！何で叩くんだよ！」

「貴方がニヤニヤ笑ってるからよ！」

確かにこの切羽詰った時に笑うのは、少々不謹慎だろう。

そんなやり取りをしている間に雅人は部室にたどり着いたようだ。

「おい鈴！木刀で鍵をぶっ壊してくれ！」

「分かったわ！」

雅人の依頼に答え、鈴は容赦なく部室のドアノブに木刀を振り下ろした。バキツという音がして、ドアノブが吹っ飛んだ。

「寛人、次はお前がドアを蹴破ってくれ」

「僕が？雅人がやればいいだろ？」

雅人は気まずそうに咳払いをした。

「俺の脚力では無理そうだ。だからお前がやれ」

「は？」

「いいから黙ってやりなさいよ！」

ひでえ、なんて野郎共だ。面倒な力仕事は最終的に僕かよ……。僕は心の中で散々に二人を罵った。

そして、渾身の力を込めてドアに蹴りを叩き込んだ。一発目では壊れない。続いて、助走をつけて二発目を叩き込んだ。ドアは情けない音を立てて蝶番がはずれ、部室の中へ吹っ飛んだ。

「ナイス！」

雅人が嬉しそうに叫ぶ。鈴が先陣を切って部室に入っていた。続いて雅人、僕は見張りだ。

「どうだ？何かあったか？」

僕が廊下から話し掛けると、中の雅人が歓喜の叫びを上げた。

「金属バットが二本あった。これは俺と鈴が持つ」

「は？俺の武器は？」

僕は半ば怒り気味に叫んで、部屋に入った。中では雅人が二本の金属バットを持ち、鈴はロッカーを物色している最中だった。僕は雅人に詰め寄り、胸倉を掴んだ。

「僕を散々使つといて武器もなしかよ！誰のお陰で部屋に入れたと思つてんだよ！」

怒鳴り散らす僕を雅人は必死に説得した。

「待て！落ち着け！よく考えてみる！」

「そうよ！手を離して！」

二人から言われて、僕は漸く平静を取り戻した。仕方なく雅人の胸倉を掴んでいた手を離れた。

「で、理由を言ってみろ」

「いいか、俺はまず貧弱だ。自分で言うのもなんだけどな。だから護身のためにも武器が必要だ。鈴は元々女だし武器が要るだろう」

「そいつなら木刀があるじゃねえか」

「残念、さっきので折れちゃったわ」

僕は納得がいかかったが、無理やり自分に言い聞かせた。確かに雅人の言っていることは正論だ。弱い者に優先的に武器が居るのは必然だろう。

「じゃあ僕の武器は無しかよ」

「そうだな……いや、鈴の折れた木刀でいいならあるぞ」

折れた木刀……もし先端が尖っていれば武器としては十分だ。相手の腹に突き刺せば致命傷を負わせることが出来るだろう。それに無いよりはマシだ。ただし折れた木刀となればリーチが短いことは覚悟しなくてはいけない。

「分かった。無いよりはマシだから貰っておくよ」

「そうか。分かってくれてありがとう」

僕は別に納得した訳ではないが、正論に従うのは当然だろう。折れた六十センチほどの木刀を受け取り、部室から出た。

その時だった。僕の背後から呻き声が聞こえたのだ。僕は咄嗟に折れた木刀を構えた。

振り返った途端、僕は腰が抜けかけた。そこにいたのは全身から血を流し、あちこちが喰い千切られ、内臓が飛び出している男性だった。体は腐敗しはじめ酷い悪臭を放っている。

虚ろな目は光を宿しておらず、まるで僕たちの体温を感じ取っている様に見えた。

「おい！どうするー！」

僕は叫んだ。

「倒すしかないぞ。油断するな」

「分かってるよ……でりゃああああ！」

僕は叫びながら、化け物の腹に木刀を衝きたてた。間違いなく致命傷だろう。木刀から貫通した手ごたえが伝わってきたからだ。しかし、そいつは全く動じずに僕を床に押し倒した。

「うわ！やめろ！」

僕は必死に抵抗したが、そいつの力は恐るべき怪力だった。あつという間に組み伏せられて、僕は抵抗出来なくなった。

そいつは遠慮無く僕の喉笛に噛み付こうとした。喰い千切る気だ。

「寛人！」

雅人が金属バッドでそいつの背中を殴った。しかし、それにも全く動じない。

寛人の中である推測が浮かんだ。

「退きなさい！」

鈴が金属バットをそいつの脇腹に叩き付けた。そいつは少し怯んで、脇にすっ飛んだ。

その隙に僕は必死に起き上がり、態勢を立て直す。

「うおおおおお！」

雅人が叫びながら、そいつの鳩尾にバットを食い込ませた。全体重をかけた攻撃なら、もたえ苦しむはずだ。しかし、そいつは今だに活動していた。

雅人がそいつと距離をとる。

「こいつらは不死身なのか？」

雅人がもう一度、バットを構える。僕はゆっくりと鈴の手から金属バットをとった。そして自分の推測を呟く。

「違うな……こいつらはもう死んでいるんだよ……だったら！」

僕はバットを構え、思い切り振り上げ、そいつの頭に振り下ろした。

ぐしゃっと頭蓋骨の潰れる音が響き、そいつは床に倒れこんだ。もう動く事は無かった。

「やっぱりな……頭を潰せば活動出来ない訳か……」

「のようだな……」

雅人がそいつの残骸に目をやり、呟いた。僕は腰を抜かしている鈴の手を握り、起こした。

「ほら立て。早く行くぞ」

「……うん……」

鈴は目の前の状況が理解出来ていないようだ。無理も無い、いきなり人の頭を同級生が叩き潰したら、そりゃあ動揺するだろう。

「で、何処行くんだよ。これから」

「考えてある。コンピューター室だ。あの部屋のドアはそう簡単には壊されないし、中にはパソコンもある。情報収集も出来る最高の要塞だ。現時点ではな」

「……現時点？」

「そうだ。どちらにしろ食料が必要だ。まあ一時的な隠れ家という訳だ」

雅人の推測に感服しながら、僕は鈴を抱き起こした。
そのままコンピューター室へと歩き出した。

コンピュータ室の扉の鍵は開いていた。幸い、授業で使用するクラスが無い様だ。中は蛻の殻だった。

雅人が扉を閉め、机をドアの方に動かした。
その時、校内放送のスイッチが入った。

「全校生徒の皆さん、只今校内に不審者が侵入しております。生徒は先生の指示に従い・・・うわあ！後ろに！助けて！ひゃあああああ！」

声が途切れた。スピーカーからは何かを貪るような音が聞こえてくる。それと同時に西校舎の方から悲鳴が上がり、いきなり騒がしくなった。

雅人が舌打ちをし、バリケードを急いで作り始めた。

「急げ！生徒がここに来る前に作るんだ！」

僕は頷き、扉の脇にあった机を扉の前に置いた。雅人もその上に机を重ねていく。

悲鳴や怒号が段々と近づいてくる。もう時間が無い。急がなくては。

僕は必死に机を積み重ねた。

「寛人！そっちのでかい棚だ！」

雅人の叫び声で僕は窓際の大きな棚に手を掛けた。そして力を込める。

「畜生！手伝ってくれ！一人じゃ無理だ！」

雅人が手に持っていた椅子を放り投げ、こちらにやってきた。

「いいか！一、二の三で持ち上げるぞ！いくぞ！」

「ああ！」

「一……二……三！それっ！」

僕と雅人は渾身の力を込めて、棚を持ち上げた。それから棚を思い切り扉の前に放り投げた。

鈍い音を立てて、棚は丁度、今まで作ったバリケードを支えるような形で扉の前に置かれた。

その数秒後に扉を激しく叩く音が聞こえた。後、数秒遅れていたら……。

そう思うと鳥肌が立った。恐らく、中に生徒が雪崩れ込んで来ただろう。

「ギリギリセーフ……ってやつだな……」

僕はその言葉を喉から絞り出し、腰が抜けた様に床に倒れこんだ。雅人は教師用のパソコンを起動させた。

「俺が今の状況をネットで調べる。寛人達は休んでていいぞ。後ろの生徒会長はとっくの昔に気絶しているみたいだけどな」

僕は鈴の方を見た。確かに床にだらしなく横たわっているのが見えた。余程怖かったのだろう。

「どっちにしろ、しばらくの間はここに缶詰だ。今の内に寝ておけ」

僕は力なく頷き、頭を床につけた。そして目を閉じた。緊張のためか、直ぐに意識は暗闇に吸い込まれていった。

逢海寛人 7月9日 午前11時41分 渡良瀬第三中学校 校舎内（後書き）

ご意見・ご感想をお願いします。

鷹見真一 7月9日 午前9時34分 渡良瀬市 県警（前書き）

今回は別キャラでの視点です。
主人公は他にもいますよ。

鷹見真一 7月9日 午前9時34分 渡良瀬市 県警

何時もと変わらぬ仕事場。ここが俺の仕事場の渡良瀬県警、警備部公安第三課だ。

何時も変わらぬ退屈なデスクワークをこなして生きているしかない独身の男、それがこの俺、鷹見真一^{たかみしんいち}だ。

階級は巡査、仕事場での人間関係もまあまあ、彼女はナシ、収入もそこそこある方だ。

一言で言っちゃえば普通の男、って訳だな。

7月9日、この日もどうせ暇な一日として俺の脳内メモリーに記憶すらされない一日になるだろう。この時は俺もそう思っていた。

「鷹見さん、出勤命令です」

そう言われたのは今朝、出勤してきて直ぐの事だった。

俺は自分の椅子に腰掛けてから、部下である佐伯卓^{さへきたく}を見つめた。

「現状が把握出来ないな。まず筋道を立てて説明をして貰おうか」

俺は突然の出勤命令に動揺していた為、妙に上から目線で佐伯に尋ねた。

「ですから、出勤命令ですよ。先程、日暮商店街の方で暴動が発生しているって通報が入ったんです」

「暴動？この国も物騒になったな。で、それは機動隊や警ら隊の仕事じゃないのか？」

「まあそうですね。僕ら公安課には交通規制の出動命令が出てるんです。暴徒を取り押さえるとかの荒っぽい仕事は無いですからご安心を」

俺は当たり前のように頷いた。朝っぱらから手荒な仕事は避けたいものだ。出来るものならここでコーヒーでも飲んで一服したいが……そうゆう訳にもいかないだろう。

「分かった分かった。じゃあさっさと行ってさっさと終らせようじゃないか」

俺は鞆をデスクに置き、更衣室に向かった。
人でごった返している廊下を歩いて直ぐに更衣室はある。
更衣室に入ると、いきなりゴツイ男に肩を叩かれた。

「よお鷹見！随分とご無沙汰の出動だな！」

このひょうきんで画体のいい男は俺の同僚の矢島健^{やしまけん}だ。こいつはいい奴だが、力加減を知らないのだ。

「いいか、矢島。俺は何時もお前に言っているが、スキんシップはもつと優しく接するもんだぞ」

「なんだよ。連れねえ奴だな。出勤なんて久々じゃねえか」

確かに暴動やその手の理由で出勤なんてのは、三年ぶりかも知れない。

矢島はトラブルを楽しむ癖があるのだ。世の中にそういった奴は少なくないと思うが、時と場所を弁える。俺はそう思う。

「鷹見さん！急いでください！」

佐伯は真面目なので俺を急かしている。

「分かってるって。今すぐ準備するさ」

俺はそう言い、ワイシャツを脱いだ。そして出動時の制服に着替える。

ホルスターに入っている警棒と拳銃を確認し、俺は動きやすい靴に履き替えた。

「さあ行こうか」

俺が準備を終え、そう言った時には既に二人の準備は整っていた。

「行きましょう」

「行こうぜ」

二人が声をそろえて言う。俺も頷き、更衣室を出た。

俺たちは真っ直ぐ地獄へと向かうことになる。

俺は夢を見ていた。内容は他愛も無い内容だったが、悪い気分はしなかった。しかし、突然の急ブレーキで俺は現実に引き戻された。助手席に座っていた俺は思い切りダッシュボードに頭を打ち付けた。俺は安眠を妨害された事に腹を立て、怒鳴った。

「安全運転を心がけろ！俺たちは公安課だぞ！」

「前だ！」

俺の怒鳴り声に続くように矢島の怒鳴り声が聞こえた。

「何？」

俺が惚けたように、フロントガラスを見つめた。

「ひっ！」

俺は思わず、驚いてしまった。

フロントガラスには血まみれの男が張り付いていた。目は片方が挟られたようになっていた。それでも尚、その男はパトカーのフロントガラスでもがいていた。俺たちを探すかのように。

「お前！轢いたのかよ！」

「違う！いいから逃げるぞ！」

矢島はそう言い、パトカーから飛び出た。俺も勢いに押され、飛び出た。後部座席の佐伯もそれに続く。

パトカーから出た俺は目の前に広がる光景を目の当たりにした。

「嘘だろ……」

目の間の大通りでは大量の車が放置され、一部は炎を上げていた。そして、逃げ惑う生存者を全身から血を流して、腕がもげたような奴や目が挟まれた様な奴が喰い殺していた。

付近には無残に喰い散らかされた警官や民間人の死体が転がっている。中には奴らの様に動き出すものもいた。

「鷹見！逃げるぞ！」

矢島の声で俺は我に返った。

矢島と佐伯は周りの様子を見て、活路を見出そうとしている最中だ。

「奴ら……俺たちじゃなくて逃げ回っている奴を追いまわしてるな」

「恐らく匂いや音で居場所がわかるんじゃないでしょうかね？」

佐伯の言う事は最もだったようだ。奴らは確かに逃げ回って、喚いてる奴らばかりを追いまわしている。

ということは静かに行動すれば見つからずに切り抜けられるかもしれない。

「おい、矢島、佐伯。あそこの裏路地から逃げられるかもしれないぞ」

俺は二人に近づいて、耳打ちした。二人の視線が裏路地に移る。

「イケるかもしれないな。よし、佐伯が先に行け。俺と鷹見で援護する」

佐伯は黙って頷き、裏路地の入り口まで忍び足で近づいた。途中、奴らの真横を通ったが幸い気付かれる事無く、裏路地にたどり着いた。

「よし、次はお前が行け。俺も後ろに続く」

矢島がそう言い、俺の背中を押した。俺も佐伯を見習い、忍び足で裏路地の入り口に向かった。中間地点までたどり着いた時、俺の足に何かが当たった。下を見るとそれは人間の生首だった。妙に生活感溢れるそれは俺の脳を激しく刺激した。

「うっ！」

俺はつい呻き声を上げてしまった。奴らの視線がこちらを向く。

「走れ！」

俺は矢島の一言で走り出した。矢島は警棒を奴らに投げつけたが、あまり効果は無いようだ。

俺と矢島は奴らを何とか切り抜け、佐伯の下へたどり着いた。

「急いでください！」

佐伯が叫ぶ。後ろを振り返ると無数の奴らがこちらに向かってきているところだった。

「柵があるので閉めましょう！手伝ってください！」

佐伯はそう言い、裏路地に設置されていた柵を閉めはじめた。俺と矢島もそれを手伝う。

「急げ……奴らが来るぞ……」

奴らは後五メートルまで近づいていた。三メートル地点で漸く、柵は音を立てて閉まった。素早く矢島が

鍵を掛ける。

「これでしばらくは安心だな」

俺たちは休む間も無く、裏路地を走り始めた。

悲鳴と銃声が空に木霊している。俺たちはどうなるのだろうか？

鷹見真一 7月9日 午前9時34分 渡良瀬市 県警（後書き）

ご意見・ご感想をお願いします。

鷹見真一 7月9日 午前10時02分 渡良瀬市 裏路地

俺たちは裏路地をひたすら進んだ。もちろん何度も途中で後ろを振り返る。

「奴らは追って来てませんね！」

佐伯が息を上気させながら、叫んだ。

「頑丈な鉄柵だ！そう簡単には破られないさ！」

俺も息を上気させながら返した。

俺は中学時代は陸上部だったせいもあってか、体力は結構あるほうだ。佐伯も中々の体力らしく、しっかりと俺の横にいる。

矢島は……言うまでも無く体力馬鹿のようだ。ここまでノンストップで来たというのに息一つ切らしていない。

「なあ！あれって！」

矢島が前方を見て叫んだ。俺も前を見た。

前方には奴らが十数人、狭い路地に溢れかえっていた。こちらの足音に気付いたらしく、こちらによたよたと向かってきた。

「うわああ！どうするんですか！」

佐伯が慌てて叫んだ。俺と矢島も立ち止まり、二、三步下がった。

「おい！引き返すぞ！」

矢島が叫んで、来た道を引き返そうとした。俺はそれを急いで静止する。

「待て！落ち着けよ！ここまで一本道だったじゃねえか！」

「そうか！くそっ！」

俺たちはじりじりと後退し始めた。前は奴らに塞がれている。後ろは行き止まり、鉄柵を越えてもそこに居るのは……。

何てこった！

俺は舌打ちをした。この状況を一言で言うなら、前門の虎、後門の狼、と言ったところだ。

俺は辺りを見回す。何か活路がないかと。そしてある事に気付いた。

「おい！佐伯、矢島！その窓から中に入れば助かるぞ！」

矢島と佐伯が俺の向いている方を見る。そこには地面から二メートルほどの位置にある窓が見えた。大人一人なら何とか通れる幅だ。

「よし、佐伯が先に行け！矢島は佐伯を持ち上げろ！俺が援護する！」

俺はホルスターから拳銃を引き抜いた。今まで撃つたことは無かったが……やるしかない！

「掛かって来な！相手になってやるぜ！」

俺は拳銃を訓練の的と奴らを置き換えて、狙いを定めた。

「いざとなると怖いな……」

俺は慎重に狙いを奴らの集団の先頭の奴に合わせた。そして引き金に力を込める。鋭い発砲音と同時に小さな衝撃が腕を走る。

俺が狙いを定めた奴の頭に穴が開き、奴は地面に力を失うように倒れた。

「さあ、次は誰だ？」

俺は拳銃の狙いを次の奴に定めて、再び発砲。続けて発砲した。奴らの集団に続けて撃ち込んでいく。俺は知らずの内に自分が狂気に犯されていることに気付いた。顔には笑みすら浮かべている。でも撃ち続けた。何が何だか分からなくなっても、撃ち続けた。

「おい！鷹見！早く来い！」

ふと我に返ると、矢島が窓から上半身を出して俺を呼んでいた。俺は迷わず窓に近づき、窓によじ登ろうとした。その俺の手を矢島が掴み、引きずり上げる。

今日ほど矢島の怪力に感謝した日はないだろう。俺は窓から必死の思いで中に潜り込んだ。

窓の中は何処かの店のトイレのようだ。小便器が一行に並び、奥には個室がある。

佐伯が個室の中を全て調べ、何も居ない事を確認する。

「一先ず安心だな。これからどうする？」

俺は矢島に尋ねた。矢島は拳銃の整備をしながら、俺の問いかけに答えた。

「まずは署に戻ろう。そこで作戦を練り直そうじゃないか。お前のお陰で奴らの弱点は分かったんだ」

「俺が？俺が何か何かしたか？」

「ああ、お前が奴らを撃っているときに気付いたんだが、奴らは頭を撃ち抜けば活動を停止するんだ」

ああ道理で、と俺は思った。

足に撃ち込んで動きを止めようと思っても止める事は出来ない。頭を撃ちぬかない限りは。

「早く他のみんなに知らせよう。警察はいきなり民間人の頭を撃ちぬいたりしないだろう。そこが弱点だという事を教えないとな」

矢島は銃をホルスターにしまい、トイレのドアを開いて、外の様子を窺う。

「よし、誰もいない。行くぞお前等」

俺たちは頷き、警察署へと向かった。

鷹見真一 7月9日 午前10時02分 渡良瀬市 裏路地（後書き）

次回は新主人公を出したいと思っています。
ご意見・ご感想をお願いします。

島原和泉 7月9日 午前10時17分 渡良瀬市 旭TV局（前書き）

今回の主人公は女性です。後、後書きにキャラ紹介をつけます。今回の主人公は重要キャラです。後々活躍する予定です。

島原和泉 7月9日 午前10時17分 渡良瀬市 旭TV局

「和泉さんですね。楽屋にどうぞ」

私は島原和泉^{しまはらいずみ}。15才です。この市で働く見習歌手です。初めは全くウケなかったけど、最近は市内での仕事も増えて来て充実した毎日を過ごしています。

「分かりました。何時もありがとうございます」

そう言い、私は松葉杖について歩き出しました。私は足が小さい頃の事故で少し不自由で、松葉杖を使わないと転んでしまう事が多いんです。

楽屋に入ると、今日一緒に共演する女優の長谷川瑞穂^{はせがわ みずほ}さんが先に座って、寛いでいました。

「おはようございます。今日はよろしく願います」

「あら、こちらこそ。和泉さんですね。長谷川瑞穂です」

瑞穂さんは私に軽く挨拶をして下さいました。私も何時もの様に共演の方の向かいに座ります。

「まだ本番まで時間あるし、少し休んだら？」

瑞穂さんは私の体を気遣ってか、そう言って下さいました。私も今日は早起きだったので、その言葉に甘えて少しだけ仮眠をとらせて貰う事にします。

「ありがとうございます。瑞穂さんも私に気を遣わずに休んで下さいね」

「私は平気よ。さっき朝食取ったばかりだし、直ぐ寝ると太っちゃうのよ」

「そうなんですか？では私は失礼しますね」

私は近くの座布団を枕にして、横になりました。少しだけ・・・
少しだけ寝たら起きる事にします。

私の意識はすーっと闇へ包まれてしまいました。

「・・・さん！・・・和泉さん！」

瑞穂さんの声が聞こえます。どうやら叫んでいるようですが・・・
とにかく私は目を開けて、瑞穂さんの顔を見つめました。

「あれ・・・瑞穂さん？本番ですか？」

「違うわ！様子が変なのよ！」

私は寝起きの体に鞭打って起き上がりました。楽屋は煙で充満していて、瑞穂さんはハンカチで口元を押さえていました。

「どうしたんですか？」

思わず私はポケっとした声で尋ねてしまいました。瑞穂さんは必

死に叫んでいます。

「だから火事が起きているのよ！貴方も早く逃げて！」

瑞穂さんはそう言うと、荷物を持って楽屋から飛び出していきました。私は何が何だか分からないまま一人、火事が起きて煙が充満している楽屋に取り残されてしまいました。

「私の杖……」

私はとにかく杖を探そうと、室内を這いずり回って手で探ってみました。煙で目はしょぼつき、視界も悪いので中々見つかりません。

「どこ？私の杖……どこ？」

私の手が漸く、何か堅い棒に触れました。それは確かに私の杖でした。

「あつた……」

私はその杖で何とか立ち上がることが出来ました。その後、開きっぱなしのドアから廊下に出ます。廊下に人影は見当たりません。もう皆さんは脱出してしまったんでしょうか？

「とにかく……逃げないと……」

私は松葉杖を頼りに、廊下を階段に向かって歩き出しました。廊下の中盤に差し掛かった時、私は人が倒れているのを発見してしまいました。

「大丈夫ですか!？」

私は倒れている男性の傍らにしゃがみ込み、男性の顔を覗き込みました。

「!？」

私は男性の顔を見て、尻餅をついてしまいました。その男性の顔は歪み、首には大きな噛み傷があります。これが致命傷になったのでしょうか？眼球は顔の直ぐ脇に転がっています。

「いや……助けて……」

私は悲痛な擦れ声しか出す事が出来ませんでした。煙で霞む視界、人影が目に入りました。

「助けて……お願い……」

私の声が聞こえたのか、人影はこちらによるよと向かって来ました。しかし、その顔を見て私は気を失いかけました。

その男性の腹部は大きく抉り取られ、喰い散らかされた内臓が見えています。目は虚ろで、涎を垂らしながらこちらに向かってきます。

「逃げないと……」

私は床に落ちている杖を拾い、必死に立ち上がりました。

煙の立ち込める廊下は私の中の酸素を平気で奪い取り、私を苦しめます。でも私の不自由な足が止まることはありませんでした。追いつかれたら死ぬ。直感でそれを感じ取り、頭の中で警鐘の様に何

度も響き渡ります。

廊下の終わりも見えてきた頃、漸く開いているドアを見つけました。警備員室と書いてあるそのドアの中は煙もあまり入ってきていないようでした。

「逃げないと……」

直ぐ後ろまで迫った男性を振り切るように、最後の力を振り絞ってドアを潜り、閉めてから鍵を掛けました。

私は軽い酸欠に陥っていた様で、意識はどんどん遠のいていきます。

「私……死ぬのかな？」

私の意識は闇へと吸い込まれていきました。

島原和泉 7月9日 午前10時17分 渡良瀬市 旭TV局（後書き）

逢海寛人 おつみ ひろこ

十五才 特技：ゲーム

詳細：普通の中学生。成績は微妙だが、緊急事態やイレギュラーに強い特性を持つ。お気に入り武器は金属バット。ルックスは普通。

橘響夜 7月9日 午後9時39分 渡良瀬市 上空（前書き）

時間は飛んで、夜です。新しい主人公は不幸です。

橘響夜 7月9日 午後9時39分 渡良瀬市 上空

ヘリのローター音が俺の耳をしつこく責めている。俺の耳は今にも鼓膜ごと吹き飛びそうだ。

俺は橘響夜。たちばな とうや 対特殊災害部隊「翡翠隊」かわせみ たい隊長だ。

今回の任務は世界中で発生している暴徒事件。いや、大災害を鎮圧するため渡良瀬市とかいう中規模の町に派遣される事になった。

噂によれば暴徒は人を喰うらしい……。詳しいことは現地で現物を見れば分かるだろう。とにかく相当厄介な任務であることには変わりない。

何せ生きて還れるかどうかもはっきりしない任務だ。そりゃあ喜んで行きたくは無いさ。でも俺たちの作戦生還率は百パーセント、今回もそうであって欲しい。

「隊長、そろそろ目標地点上空です。降下準備を」

「分かった」

そう返事をし、装備の確認を開始した。八人の隊員もそれに習う。俺の隣にいる部隊の通信士、白鳥俊軍曹しろとり じゅんそうは一枚の写真を見て、ニヤついている。俺は白鳥を覗き込み、

「何の写真だ？白鳥」と尋ねた。

「いえ、俺のカミさんですよ」

「何？何時結婚したんだ？」

俺は少なくとも初耳だった。他の六人も驚きの表情を見せている。

「実は先週入籍したんですよ。式はまだですけど……この作戦が終ったら隊長たちにも招待状を出そうと思ってたんですけどね」

「そうか。めでたいな」

「白鳥、お前もやるじゃないか。おめでとっ」

俺の向かいに座っている副隊長、伊東準一小尉いとう じゅんいちも感じのいい笑みで祝った。

「隊長は結婚しないんですか？」

幸せ絶頂の白鳥が俺に尋ねる。俺はふっと笑い、胸から掛かっているロケットを見つめた。

「俺はいいんだ。結婚なんて・・・」

「もったいないですね。隊長はイケメンなのに・・・」

白鳥の言うように、確かに俺はモテる。学生時代からずっとだ。

何度も芸能界からスカウトされているし、高校ではファンクラブまで出来た。

でも、俺は女と付き合う気は無い。俺に女と付き合う資格なんてないのだ。

俺には妹がいた。歳は二才しか離れていないが、かなりの身長差があったし、何より俺とは違っておしとやかでその笑顔は何時でも俺を癒してくれた。俺がシスコンと呼ばれるようになったのはその事もあるのだが・・・。

でももう俺の妹は、アイツはいない。あの日、俺がもう少し早ければ……。

俺はその考えを頭から振り払った。今、ここで取り乱す訳にはいかない。俺の様子に気付いたのか、白鳥も俺のロケットを見つめている。

「おい、響夜。気まずいから何か喋ってくれ」

準一が俺の肩を銃口でつつく。準一は俺と同期なので、普段は敬語を使わない。使うのは一応、体裁を保たなくてはいけない時だけだ。

「すまん。では作戦を説明するぞ」

全員が俺を見つめた。

俺は市街地の地図を自分の膝に広げ、ライトで照らした。

「降下地点は商店街。ここの交差点だ。降下完了と同時に先発隊として降下部隊の降下地点を確保する。それが完了し次第、地元警察と共同で防衛線を展開、拡大しつつ、生存している民間人の保護だ。尚、感染者への発砲は許可されている。容赦なく撃て」

「日本も末ですね。感染している民間人を射殺とは……」

隊員の狼森海斗^{おいもり かいと}上等兵が呟く。

「そうだな。まあ、撃ちたくない奴は撃つな。但し、早死にするぞ」
しばしの沈黙。その静寂を破るようにヘリのパイロットの音が響いた。

「翡翠隊、降下地点に到着いたしました。降下開始してください」

俺は立ち上がり、ヘリから下の商店街を見下ろした。予想通り、廃棄車両が店のショーウィンドウを突き破っている。死体が無数に転がり、よろよろと暴徒が徘徊している様子が窺えた。

俺はロープを二本下に垂らし、準一を呼んだ。

「準一、俺とお前で先行する。他の奴も後に続け。降下し次第、戦闘を開始しろ。降りたときに尻を噛まれるなよ」

くすくすと笑いが漏れる。俺はロープを握り、降下を開始した。

俺たちは地獄に足を踏み入れた。戻れるかも分からない地獄に…

…。

橘響夜 7月9日 午後9時39分 渡良瀬市 上空（後書き）

ご意見・ご感想をお願いします。

橘響夜 7月9日 午後9時53分 渡良瀬市 市街地（前書き）

最近、ネタはあるけど時間がない状態が続いています。
でも頑張りますよ！

橘響夜 7月9日 午後9時53分 渡良瀬市 市街地

俺と準一はロープを片手に89式小銃を構え、暴徒の群れる商店街の中心へと降下した。着地と同時に奴らも俺と準一に気付いたように、ふらふらとこちらに近づいてくる。

「準一、戦闘開始だ。好きに撃て！」

「分かってるさ。お前も噛まれるなよ？」

「ああ」

俺は奴ら目掛けて、89式小銃を撃った。

奴らは胴体に被弾し、仰向けに倒れこんだ。しかし、後ろからも続々とやって来る。奴らは意外とタフなようで、倒れた奴も直ぐに起き上がり、こちらに向かって来る。

続いて白鳥と狼森も降りてきた。四人に戦力が増えたお陰で奴らはジリジリと死んでいく。正確にはもう死んでいるわけなのだが……。

「よし、降下地点を制圧！奴らを殲滅しろ！」

俺は叫んで、マガジンを交換した。

二番目のヘリが到着し、他の部隊も降下してくる。後ろからはパトカーや装甲車が現れ、警官や自衛隊が降りてくる。

五分後には完全に敵を撃退した。呆気ない展開に白鳥が小さな声で笑い出した。

「どうした？」

「いや、呆気ないな〜って。だってゾンビですよ？もっと死人とか出ると思っていましたよ」

「確かにな……」

俺は無線のスイッチを入れ、本部へと繋げた。

「こちら翡翠隊隊長、橘響夜。任務完了しましたが」

ミッションコンプー

間髪を入れずに野太い男の声が返ってくる。

「了解した。生存者の救助に向かえ。こちらでは警察署方面に生存者を確認している。無線によれば弾薬も尽きかけているようだ」

「了解。警察署へ向かいます」

俺は無線を切り、溜息をついた。

「よし、お前等。次の任務について説明する。集まってくれ」

七人の隊員が俺の周りに集まってくる。俺はパトカーのボンネットの上に地図を広げ、マーカーペンで印をつけた。

「警察署方面の生存者を保護する。この裏路地を通れば七分ほどで着くが、油断するなよ。長尾と村上で先行しろ。以上だ」

俺は地図をたたみ、会釈をした。隊員の朝比奈一と村上圭一が裏路地に入って行き、続いて俺と圭一が進む。

暗い裏路地は汚物が転がっていて、カラスの死体も落ちている。

あまりの匂いに準一が顔を顰めた。

「臭いな……鼻が潰れそうだよ」

「我慢しろ。俺も同じ気持ちだ」

「早く風呂にでも入りたいな。飛びつきり熱々の風呂によ」

「そうだな。この任務が終わったらみんなで行くか？白鳥の奴の新婚旅行について行くついでにな」

白鳥が顔を顰め、苦笑いをした。

「それだけは勘弁してください。俺の気が参っちゃいますよ」

俺も笑い飛ばし、他の隊員もつられてにやける。暗い任務だと言
うのに、部下の間には和やかな雰囲気があった。

そうこうしている内に、村上が路地の端までついた。そこから顔
だけを出し、大通りの様子を窺う。

「ひっ！」

村上がいきなり尻餅をついて倒れた。

「どうした！」

「ダメです！大きい声をだしちゃ……！」

俺が叫ぶと同時に村上と長尾がこちらに走ってきた。その後を追
うようにして大量の奴らが現れた。

「どうしたんだ？」

俺が尋ねると、二人は息を切らしながら、

「奴らですよ！この大通りに腐るほいです！」

と答えた。

俺も89式小銃を構え、奴らに撃ち込む。それと同時に反対側の大通りからも銃声が響いた。どうやら向こうも同じ状況らしい。

「全員、戦闘態勢！」

俺は怒鳴り、更に続けて撃ち込んだ。

村上也続いて発砲を始める。

「隊長！」

後ろで松山武敏まつやまたけとしが叫んでいる。

「何だ！」

「隊長、動体センサーに反応があります。四方から来ますよ！」

「何だと？」

俺は周りを見回したが、空には何も飛んでいないし、壁に何か張り付いていることもない。居るのは正面から迫る大量の奴らだけだ。

「いないぞ！」

「でも確かに反応が……！」

そう言いかけた松山の脇にあったビルの窓から奴らが飛び出してきた、松山を押し倒した。叫びながら松山は押しのけようとしているが、奴らも怪力なようでびくともしない。

俺は何も言わずに松山に組み付いている奴目掛けて、89式小銃を撃った。そいつは唸り声を上げて、地面に倒れた。松山が必死に起き上がる。

「大丈夫か？」

「何とか……噛まれなくて幸いでした……」

松山も気を取り直したようで、89式小銃を構えた。それと同時にビルの窓や裏口から奴らが大量に出て来た。

「やばいぞ！ 囲まれる！ 全員、全速力で引き返せ！」

先頭の村上と長尾も走ってこちらに引き返してくる。
俺も準一と一緒に走り出した。

「先に行け！」

俺は叫び、手榴弾を取り出し、奴ら目掛けて投げつけた。

「伏せろ！」

俺は近くの廃材を盾にして破片から身を守った。裏路地の奴らは

破片が全身に突き刺さり、もがき苦しんでいた。死んでいる奴もいる。主に爆発の爆心地辺りにいた奴らだ。

「走れ！」

俺は裏路地から何とか走り出た。

しかし、大通りの状況を目にして再び絶望に覆われた。

大通りには裏路地なんかとは比べ物にならない数の奴らがいた。警官隊や自衛隊が応戦しているが、ジリジリと押し戻されている。

「ぐわあああ！」

先頭の警官が喉を食いちぎられている。その光景を見た警察官が転んで、それにつまずいて転んだ自衛隊員もいる。

奴らの動きは思ったより速く、早くしないとこちらまでがやられてしまう。

「響夜！どうするんだ！」

「応戦するな！退却しろ！」

俺たちは落ち着いて、後退を開始した。既に先頭は突破され、次々と警察官や自衛隊員が食い殺されていく。辛うじて生きている人間が手榴弾などを使っているが、奴らの様子は衰える様子がない。逃げようにもヘリは俺たちを残して飛んでいってしまったようだ。遠ざかるヘリのローター音が聞こえている。

「響夜！この路地は化け物が居ないぞ！」

準一が叫んで、指差した裏路地には確かに奴らが居なかった。

「よし！全員続け！」

俺たち八人は急いで裏路地に入っていた。それと同時に生き残っていた自衛隊員の断末魔の叫びが聞こえた。

俺たちは更なる地獄に入り込もうとしていた。地獄絵巻のように異形の化け物が溢れる世界に。

橘響夜 7月9日 午後9時53分 渡良瀬市 市街地（後書き）

ご意見・ご感想をお願いします。
アイデアなどありましたらどうぞ。

橘響夜 7月9日 午後10時31分 渡良瀬市 旭TV局前（前書き）

やっとテストが終わりました。テストって誰が作ったんだろう？
そんなことを思う今日この頃です。

橘響夜 7月9日 午後10時31分 渡良瀬市 旭TV局前

俺たちは先ほどから駅へと続く大通りを延々と歩いている。

俺たちの目的は外部と連絡を取り、救助を要請して市から脱出する事だ。

まず手持ちの無線では電波が弱すぎて、本部とは現在連絡が取れなかった。外部に連絡を取り、救助を要請するには強い通信機器が無くてはいけない。

小さな電気店では販売していないだろう。そのことを踏まえて、俺たちはある場所に目をつけた。それがテレビ局だ。

「恐らく通信機器の類なら腐るほどあるだろうよ。持ち出されていなければ」

その準一の言葉でテレビ局へ向かうことが決定した。それで現在に至るわけだ。

「隊長、ここですね」

白鳥が十階建てのビルを見上げて言った。
俺も頷く。

「そうみたいだな。さっさと終らせるぞ。村上と白鳥は入り口を警戒しろ。俺と準一で先行していく。後の奴はゆっくりと各階を占領していけ。生存者が居たら保護しろよ」

「分かりました」

全員の返事で、俺は銃の点検を開始した。奴らが現れてから銃が

撃てなくては意味がない。

俺は準一に軽く会釈をし、テレビ局の入り口の前まで来た。お互いに確認し、俺は思い切りドアを蹴りつける。ドアはノブが壊れて吹っ飛び、内側に傾くように外れた。

「よし、行くぞ」

俺と準一で中に進入する。

ロビーの様なところは受付らしく、カウンターが並んでいる。死体も無く、奴らもない。天井の電球は線香花火のように火花を散らしていて、煙の匂いがあちこちに充満している。

「火事でもあったみたいですね……」

続いて入ってきた松山が呟く。

確かにあちこちから火が燻っている。匂いも火事で木材などが燃える匂いだ。

「まずいな。一酸化炭素中毒かなんかで死んでなきやいいが……」

もちろん生存者がいたらの話だが。

俺は奥に階段を見つけ、準一と共に接近した。

「どうした？何かいるか？」

「いや、大丈夫だ。行くぞ。後の奴らは下を占領してくれ」

俺は暗い階段を上り始めた。

足音が妙に響く。気のせいなのかも知れないが、俺の恐怖心を掻き立てているようにも感じる。このビルは十階建てだが、スタジオ

や楽屋があるのは九階までで、十階は食堂になっているはずだ。先ほど案内図で確認したので間違いない。

「響夜、二階だ。俺が先に行く」

準一が二階のホールに足を踏み入れた。
ライトで周りを照らし、安全を確認する。

「どうやら何も居ないみたいだな」

「ああ、火事があつたならもう居ないだろうな」

俺も相槌を打ち、ホールに入った。

準一は生存者を捜す様に歩き始めた。ホールの右脇には掃除用具のロッカーが並んでいる。左にはなにやら器具らしき物がたくさん積み上げてある。

準一は右脇のロッカーの前を歩きながら辺りを見回した。

「おい、あれ通信機じゃないか？」

準一が指差した先には黒い箱状の物が置いてあつた。

俺はそれに近づき、ライトで調べてみた。それは古いテレビで、通信機ではなかった。

「違ふみたいだな。ここには無いだろう」

俺は呟き、手持ちの無線機のスイッチを入れた。

「村上、何かあつたか？」

「いえ、何も。特に異常は無いです」

「分かった。何かあったら直ぐに連絡しろ」

俺は首を上下左右に回し、背伸びをした。

この銃を背負っていると、とても肩が凝るのだ。

「うわぁ！」

後ろで突然、叫び声が上がった。

俺が咄嗟に振り返ると、ロッカーから出て来た奴が準一に組み付いて、押し倒していた。

俺が銃を構える。準一はそいつを渾身の力で押しのけた。

「伏せろ！」

俺は叫び、引き金を引いた。

短い音と同時にそいつは地面に力なく倒れた。準一は起き上がり、埃を払った。

「大丈夫か？」

「ああ、噛まれなかった」

噛まれたら終わり。

全員がそれを気にしているようだ。噛まれた奴は殺すしかないし、殺されたくもないからみんなが必死になっているようだ。

「隊長、何かあったんですか？もしかして女優のゾンビが居たとか？」

「残念ながら違うな。もし見つけたら殺さないで捕まえておくか？
添い寝でもしてやれ。俺は遠慮しておくよ」

通信機の方こうから村上の笑い声が聞こえた。

「俺もです。永遠の眠りになりますよ」

「そうだな。でも今死んでおいたほうが後から楽かも知れないぞ」

「ご冗談を。じゃあ」

俺は笑いの余韻を残しながら、銃をリロードした。その時、突然女性の悲鳴がホールに響き渡った。この階ではないようだ。

「準一！」

「分かってる！」

俺と準一は駆け足で階段を駆け上った。今の悲鳴は恐らく一個上の三階からだ。

「いや！離してください！」

女性の叫び声ともみ合う音が再び聞こえた。

相手は気が狂った人間かも知れない。俺はふとそう思った。三階の廊下はほとんどドアが閉まっていたが、奥のドアが僅かに開いていた。そこから争うような物音が聞こえている。

俺は持ち前の俊足で三秒ほどでたどり着いた。中では一人の中学生くらいの少女が奴らに襲われていた。

「離して！きゃああああ！」

そいつは少女の腕に噛み付いた。血が吹き出て、更に少女が悲鳴を上げる。

「畜生！」

俺は89式小銃をそいつの脳天にぶち込んだ。反動余って、そいつは少女の向こう側に吹っ飛んだ。そして痙攣し、動かなくなった。

「大丈夫か？どうしてここに……！」

俺はその少女の顔をライトで照らして、腰を抜かしそうになった。何故ならその少女は……。

「麻里！どうしてここに！」

俺はそう叫んで、少女の肩を掴み、揺さぶった。信じられない。俺の妹が生きている。目の前にいる！少女はその手を押しのけた。そして戸惑いながら言った。

「私は麻里じゃありません。島原和泉です」

俺は我に返り、沈んだ声で呟いた。

「すまない……遂、似ていたから……」

そつだ、麻里が生きているわけがない。麻里はあの時……。俺は過去を振り払い、少女に声を掛けた。

「怪我はしていないか？俺たちが来たからもう大丈夫だ」

和泉は気まずそうに呟いた。

「あの……これは……」

俺は和泉が差し出した右手を見た。

「……………」

和泉の右手はかなり出血していた。噛み傷らしい。どうやら既に噛まれてしまったようだ。

「……とにかく手当だ。何処か安全な場所があるといいんだけど……」

「それなら十階の社員食堂があります。あそこならシャッターもありますし、多分ゾンビも居ないと思います」

「ゾンビね……ピッタリだな」

ゾンビか。映画だけだと思っていたが、今考えれば実在したという事になる。認めざるを得ない。

「分かった。行ってみよう。準一、六人を無線で呼んでくれ。十階に向かうぞ」

俺は和泉を背負い、階段へと歩き出した。

橘響夜 7月9日 午後10時31分 渡良瀬市 旭TV局前（後書き）

ご意見・ご感想をお願いします。

逢海寛人 7月9日 午後10時28分 渡良瀬第三中学校 校舎内（前書き）

前回の不完全燃焼で終わってしまいましたが、次にやりますのでご心配なく。

久々のメイン主人公です。まあ響夜もそうですが。

逢海寛人 7月9日 午後10時28分 渡良瀬第三中学校 校舎内

「……ん……？」

僕は夢の中から眼を覚ました。
暗い天井が広がっている。確かここは……。

「目え覚ましたか？」

雅人の声が唐突に聞こえた。

「あれ……ここは？」

「寝惚けるなよ。それとも遂にボケたか？」

僕は状況を整理する事にした。

今ここはコンピューター室。何故ここにいるのかは、ゾンビが現れて、逃げて、立て籠もって……。

状況は実に単純だった。要するに閉じこめられて居るのだ。

「あれ？鈴は？」

「ああ、鈴さんならトイレだ。直ぐに戻るって言ってたぞ」

「一人で行かせたのか？」

雅人は頷いた。僕は不安の色を顔に浮かべた。僕の表情を見た雅人はなにやら勘違いをしたらしい。とても嫌らしい笑顔を見せた。

「どうした？彼女が心配なのかな？まあ魅力的なもの……」

「うるさい！でも……ちょっと見てくるかな」

「行つて来いよ。覗くんじゃねえぞ？」

「……………」

僕は黙ってコンピューター室を後にした。

廊下は静まり返っていて、奴らゾンビは居ないようだ……と思つたらいた。女子トイレに入っていくゾンビを僕は確認した。

鈴が危ない。咄嗟にそう思った僕は走り出した。その間にもゾンビは中に入っていた。続いて悲鳴。

「鈴！！」

僕は叫んでトイレに押し入った。鈴の第一声は、

「変態！何、女子トイレに入ってるのよ！」

「うるさいー！」

僕は怒鳴り、そいつの頭を金属バットで殴ろうとした。そこで気付く。

「ヤベ、バット忘れた……」

そいつは唸りながら、ターゲット標的を僕に変えたようだ。よろめきながらこつちに向かってくる。僕はゴミ箱を拾い上げ、そいつに投げつけた。

しかし所詮はプラスチック。期待した僕がバカだった。ゴミ箱はそいつの頭にヒットしたが、そいつも無反応だった。

「わああ！」

飛び掛ってきたそいつは僕を押し倒して、喉笛に喰らいつこうとした。口が寸前まで迫り、死を覚悟する。その時、そいつの後頭部に箒の柄が食い込む。勢いでそいつはコンクリートの壁に頭がめり込み、砕けた。

ぐったりしたそいつの体の下からどうにか抜け出す。

「助かった……」

鈴は僕を立たせるかと思いきや、突然、

「何やってるのよ！情けない男ね！」

「ごめん……申し訳ありません……」

「まあ、いいわ。大目に見てあげる」

何様のつもりだ？

そう思いながら、僕はコンピューター室へと戻った。

「お前等、トイレに何処まで行ってたんだ？」

「いや、ちょっと……」

「何でもないわよ」

二人が同時に答える。

雅人も真剣な顔で頷き、

「まあ、個人のプライバシーだからな。俺はお似合いだと思うぜ」

「何言ってるの！？こんな情けない奴、御免よ！」

「ま、落ち着け。いいか？今からこのカーテンを使ってロープを作る。手伝ってくれ」

僕と鈴は頷いた。

「分かった。でもどうやって？」

「そうだな。まずカーテンを全部外して、結ぶんだ。ここは三階だが、何とか怪我をしない高さまで降りられるだろう」

鈴は黙ってカーテンを引き剥がし、僕を睨んだ。

「あんたも早くしなさいよ！」

それと同時にドアを叩く音と唸り声が聞こえた。

「時間が無いぞ！急げ！」

雅人が叫び、作業に取り掛かった。僕もカーテンを引き剥がし、鈴の持っていたものと結ぶ。

数分で六メートルほどのカーテンが出来上がった。雅人はそれを窓枠に結びつけ、下に反対側を垂らす。

「さあ、早く行くぞ！」

ドアが破られ、奴らが入って来た。僕は雅人を先に行かせ、鈴に向かつて叫んだ。

「行け！僕が時間を稼ぐ！」

僕はバットを先頭の奴の脳天に振り下ろした。リーチの長い武器は便利だという事が実感出来た一瞬だ。僕は次の奴の顔面に叩き込んだ。いやな音と共に顔面は潰れ、壁にぶつかる。

「どうした？手ごたえがねえぞ？」

僕は次々に入ってくる生徒のゾンビを潰していく。生々しい感触がバットから腕に伝わる。僕は寒気を感じ、少し下がった。

「寛人！早く！」

鈴の叫びで僕は窓際に向かって走った。そして刹那のスピードでカーテンを掴み、窓から身を乗り出す。子供の頃、よく遊んだ公園の遊具を思い出し、その要領で下に降りる。

僕が降りきった時には既に二人は走る準備をしていた。

「行くぞ！奴らも降りてくるかも知れない！」

「行くって何処に？」

「ああ、^{りつめい}律明学園を知っているか？あの名門私立だ。あそこなら敷地も広いし、防犯システムもしっかりしているから中に生存者がいるはずだ」

「私も賛成。行きましょう」

「でも……その前に一ついいかな？」

雅人と鈴が僕を見る。僕はおずおずと切り出した。

「腹減ったんだ……」

二人の冷たい視線。

どうやら僕はKYのようだ。

逢海寛人 7月9日 午後10時28分 渡良瀬第三中学校 校舎内（後書き）

ご意見・ご感想、お願いします。
誤字などもありましたらどうぞ。

橘響夜 7月9日 午後11時01分 渡良瀬市 旭TV局（前書き）

やっぱりちゃんとキャラ紹介は作ったほうがいいですかね？
出来ればご意見をもらえるとありがたいです。

橘響夜 7月9日 午後11時01分 渡良瀬市 旭TV局

俺は和泉を背負い、十階へと続く階段の前に立っていた。

「ここですかね？」

白鳥が呟く。準一がドアノブに手を掛け、回した。しかしノブはガチャガチャと音を立てるだけで、開く気配もしない。

「鍵が掛かっているな……」

「退け。俺が壊す」

俺は腰からH & amp; K 2000を引き抜き、ドアノブに銃口をつけた。そして引き金を引く。鋭い音と共に、ノブが吹っ飛び、鍵が壊れた。

「よし、行こう」

準一と松山が先行して階段を上り、その後に俺たちが続く。十階に到着し、食堂に足を踏み入れると、突然、叫び声が聞こえた。

「来るな！」

準一がライトで声の方向を照らす。そこには白い白衣を着た男がいた。かなり怯えている様だ。

「安心しろ。俺たちは味方だ」

「軍隊か？」

「まあ、そうだ」

男は安心したように、こちらに近づいてきた。俺の背中にいる和泉が声を上げる。

「尾上さん！」

和泉の声に反応した男が和泉を見て、同じく驚きの声を上げる。

「和泉ちゃんか？良かった……無事で……」

「尾上さんはここの食堂のコックなんです。よくお世話になってます」

俺は男を舐めるように見た。普通の男で、特に危険性は無さそうだ。

「名前は？」

「俺は尾上涼だ。おのがみりょう只のしがないコックさ」

俺は頷き、テーブルが何かを探した。

食堂は周りの壁がガラス張りで、十階から見える市の風景が全て見渡せる。展望台としても利用出来そうだ。きつと従業員達にとつても最高の休憩場所だったに違いない。

「尾上さん、テーブルが何か無いか？この娘の手当てをしたい」

「テーブルならそこら辺のを使えばいい。待ってる」

尾上は横長のテーブルを引きずってきた。俺もその上にテーブルクロスを敷いて、和泉を寝かせた。

「和泉ちゃん、怪我したのかよ？」

「ええ……少し……」

和泉は腕を見せた。その傷を見て、尾上があとずさる。

「噛まれたのか？ヤバイよ！噛まれたら奴らみたいに……」

「え？」

和泉が驚きの声を上げる。その後、響夜を見つめる。

「本当なんですか？」

俺も暗い顔で頷いた。ここで嘘を吐いても仕方ないだろう。

「噛まれた奴はそうなる。時間はわからないが、個人差があるだろう。平均して一時間前後つてとこだ。お前は陽の光を見る事は出来ないだろうな……」

「いやです！奴らみたいになるのなら、今撃ち殺してください！」

俺はその言葉を遮り、バックから小さなケースを出した。準一がそれを見て、呟く。

「響夜、それは……」

「いいんだ。背に腹は代えられない」

和泉は俺が取り出した物を見て、首を傾げる仕草を見せた。

「それは？」

「お前は運がいい。ここに抗ウイルス薬があるのだからな」

俺は青い液体の入った注射器を用意し、縄で和泉の腕も縛り、動脈を探した。動脈の青い線に注射器の先端を刺し、液体を注入した。

「これで大丈夫だ。お前は本当に運がいい」

俺は腕の手当てを始めた。手持ちの消毒薬で消毒する。

「ん！」

「少し凍みるかもしれないが、我慢してくれ」

俺は包帯を和泉の右腕に巻き、しっかりと固定した。これで応急処置は完了だ。準一がふと厨房を見た。

「尾上さん、食料なんかはあるのか？」

「ああ、今朝にストックが来たから一週間分はある。飲み物はジュースやお茶が冷蔵庫に沢山入ってる。後はポリタンク三つに水が満タンだ」

俺は準一と顔を見合わせ、頷いた。

「丁度いい。尾上さんもここから出たいだろう?。」

「そりゃそうだ。ここに居ても助けは来ないだろうしな」

俺は立ち上がり、村上に向かって、

「村上、白鳥と一緒に下でケーブルを掻き集めて来い。全部だ。他はここで荷物を纏める。俺と準一でトラックが何かを調達してくる」

「分かりました」

村上が返事をし、白鳥と一緒にしたにむかっていった。他の面々も準備を始めたようだ。

「隊長、何処に行くんですか? 警察署はもう駄目みたいですけど…」

松山が尋ねる。

俺は地図を近くのテーブルに広げ、あるところを指差した。大きな敷地がある。

「私立律明学園。ここに向かう」

橘響夜 7月9日 午後11時01分 渡良瀬市 旭TV局（後書き）

ご意見・ご感想をお願いします。
誤字などのご報告もどうぞ。

今野優香子 7月9日 午後11時39分 渡良瀬市 渡良瀬第三中学校（前書

大体一週間ぶりの更新です。

ネタを考えていたのですよ。色々と。

今野優香子 7月9日 午後11時39分 渡良瀬市 渡良瀬第三中学校

「何なのよ！もう！」

暗い校舎を二人の男女が走っている。一人は私、今野優香子^{このゆかこ}。もう一人の男子は堺^{さかい}怜汰^{れいた}。

「退け！」

怜汰が鉄パイプを振るい、前のゾンビをなぎ払う。続いて、鉄パイプを前方の男子生徒の頭に振り下ろす。頭蓋骨が陥没し、肉片が飛び散った。

「優香子！行くぞ！」

「待ってよ！」

私は先に行く怜汰に着いていく。離れる事は死を意味するからだ。

「どうして……こんなことに！」

事は午前中に遡る。

「ゆかりん、次は体育よ。急いでよ」

親友の美智子が更衣室のドアから出て行くついでに私を急かす。

「分かってるわよ。それでも急いでるんだから」

私は疲れた首を回しながらロッカーを開け、ジャージを取り出した。体育なんてダルいだけの科目だと私は思うのだけど、皆は何故か楽しみにしてる。理解しがたいが、この世界では多数派が常識となる決まりだから文句は言えない、

「さあて、行きますかな？」

私は自分を励ますように声を出し、更衣室を出ようと部屋の扉に手を掛けた。

「……………全校生徒の皆さんに……………現在不審者が……………皆さんは……………落ち着いて……………うわっ！止める！離してくれ！死んじまう！噛み付くな！うわああああああ……………」

突然の放送に私は尻餅をついて、床に座り込んだ。

「何よ……………悪戯？」

次の瞬間、廊下から叫び声が上がった。

悲鳴と怒号。恐ろしい叫び声が廊下に木霊し、足音が近づいてくる。

私は刹那の反応で、扉に鍵をかけてロッカーを倒した。これで入ってこれないはずだ。でも何が？

「助けて！ゆかりん！中にいるんでしょ！開けてよ！」

「いや！こないで！」

美智子は必死にドアを叩いて、私に助けを求める。しかし私には分かっていた。今、ここを開ければ間違いなく私は死ぬ。その予感だけが胸の中で渦巻いていた。

「いやあああああ！」

美智子の悲鳴が上がり、更衣室のドアの小窓に血がべつとりと飛び散った。美智子の手がガラスを掴む様に叩くが、その腕も次第に力を無くして私の視界から消えた。

「あああああ……………」

私は声にならない声を上げ、地面に崩れ落ちた。美智子は死んだ。私には分かる。だって血が……。そうか……。これは夢なんだ……。全部悪い夢……。寝よう。寝れば目が覚めるかもしれない。私は意識を手放し、暗闇の世界へ旅立っていった。

「……………」

私が目を覚ました時、既に外は暗くなっていた。悲鳴も聞こえない。

「何だ。夢だったんだ。寝すぎちゃったかな？さあ帰……………」

私は血で赤く染まったドアの小窓を見つめ、絶句した。夢ではなかったのだ。そして・・・。

「開けてくれ！」

男の声だ。ドンドンとドアを叩いて、私に助けを求める。
美智子と同じだ。彼も死んでしまっただろうか？

私の脳裏に美智子の笑顔が浮かんだ。

「……分かりました」

私はロッカーを退かし、部屋の鍵を開けた。
それと同時に青年が部屋に飛び込んできた。私は素早くドアを閉め、鍵を掛けた。青年は床に座り込み、ふうと大きく深呼吸をした。

「あの？貴方は？」

「俺？俺は堺怜汰。よろしくな」

「私は今野優香子です。よろしくね。で、何が起こったの？」

怜汰は簡単に説明を始めた。信じられない話だが、信じるしかない話でもあった。ゾンビの類はゲームや映画、漫画だけの話だと思っていたのに。

「……分かりました。これからどうします？」

怜汰は飛び切りの笑顔を見せた。この状況で見せられるこの笑顔はとても心強かった。

私も笑顔で返す。

「決まってるだろ！強行突破だ！」

こうして私と怜汰は協力して学校から脱出することにした。
本当に……逃げられるのか？

今野優香子 7月9日 午後11時39分 渡良瀬市 渡良瀬第三中学校（後書

ご意見・ご感想お願いします。

あと、誤字などのご報告もお願いします。

逢海寛人 7月9日 午後11時46分 渡良瀬第三中学校 敷地内（前書き）

更新が大分遅れました。これから毎日更新はキツイかもしれませ
んの、まあ何とか生暖かい視線で見守ってやって下さい。

逢海寛人 7月9日 午後11時46分 渡良瀬第三中学校 敷地内

「腹減ったよ……」

僕は呟いた。鈴と雅人は無視して歩いていく。先ほどのKY発言のお陰で二人は僕を無視するようになった。今と同じように話し掛けても応えてくれない。相槌を打ってくれればいいほうだ。

「雅人君、律明学園まではどう行く？」

鈴が歩きながら、雅人に尋ねる。雅人は少し立ち止まった。

「そうだな。まずは学校から出よう。話はそれからだ」

鈴が頷き、歩き出す。僕など居ないように物事が進んでいき、僕は寂しくなった。せめて相手にしてほしい。僕はおずおずと話しかけた。

「そうだ。近くにコンビニがあった。よって何か食べ物を……」

二人が同時にこちらを向く。その視線には敵意が籠っていた。

「何でも無いです……」

「そうか。じゃあ行くぞ」

漸く相槌を打ってくれた。でも積極的に話し掛けては来ない。何故か胸が締め付けられる思いがする。僕はそこまで空気を読んでいなかったのか？僕は溜息をついて、俯いた。

「きゃあああああ！」

突然の悲鳴。

僕は金属バットを構え、走り出した。雅人と鈴も数秒遅れで走り出す。悲鳴は校門の方から聞こえた。

「急げ！」

この中で一番足が速いのは鈴だ。鈴は僕と雅人を抜いて、どんどん走っていく。雅人は……言うまでもなく鈍足だ。

校門が見えるところまで来ると、二人の男女を確認した。奴らに取り囲まれている。万事休すだ。

「うおおおおお！」

僕は叫びながら、敵に突進した。奴らの一人の脳天にバットを振り下ろし、叩き割る。それに続いて、鈴がもう一本のバットで二匹を吹き飛ばした。僕が敵をなぎ払い、鈴がその隙に二人の救助に向かった。雅人は近づいて来た奴をシャベルで殴るので精一杯だ。

「大丈夫？」

鈴が二人を立たせた。二人のうちの男の方がバットを構え、鈴に加勢する。女の方は二人の後ろでバックアップを行っていた。

「よし！行くぞ！」

雅人が叫んだ。

奴らの数が減ったため、こちらの方が有利になった。僕が鈴と二

人の道を作り、鈴が二人を先導する。僕も小走りで奴らの群れから逃げ出した。

「走れ！」

僕たちは勢い良く走り、奴等の群れを抜けた。そのまま校門までノンストップで走り、校門から外へ出る。僕と鈴で柵を閉め、溜息を吐く。それは安堵の溜息だった。

危険を切り抜けた五人は皆が揃って座り込んだ。助けられた男が僕たちに礼を言う。

「助かったぜ……俺は堺怜汰。こっちは今野優香子だ。よろしくな」

「ええ、こちらこそ」

二人と僕らは挨拶を交わした。雅人は冷静に辺りを見回し、脱出手段を探し始めた。そしてあるものを見つける。それは放置された大型トラックだった。

「使えるぞ。皆、乗り込め」

雅人が一番に運転席に乗り込む。助手席に僕が乗り、荷台に鈴と優香子、怜汰が乗った。

「よし、キーが差しっ放しだ。しっかり掴まれよ」

雅人がキーを捻り、エンジンを点ける。僕は雅人の非力な腕を見て、ハンドルを操作出来るかという疑問が浮かんた。しかしそんな僕の心配を他所に雅人は容赦なく、アクセルを踏んだ。トラックが

走り出す。

「おい！曲がれよ！」

僕が叫ぶ。雅人は目の前の角を曲がろうと、必死にハンドルを操作するが虚しくも全く動かなかった。

「退け！僕が代わる！」

僕は雅人から車の操縦権を奪い取った。渾身の力を込めてハンドルを左に向ける。トラックも遅れて左に方向転換し、角を曲がりきった。

そのままトラックは直進し、大通りの奴らを跳ね飛ばしながら進んでいく。奴らがボンネットに当たり、血が飛び散る。グシャグシャと肉片を踏み潰す音が運転席まで聞こえ、荷台では三人の悲鳴が聞こえる。外の様子は……想像したくも無い。

「律明学園は直ぐそこだ！」

僕は前方の大きな門を指差した。

巨大な鉄製の門があるのが確認出来る。その向こうには何棟もの建物があり、明かりも見える。

「雅人！ブレーキ！」

僕は雅人に向かって叫んだ。

僕は今、助手席から運転席に身を乗り出すようにハンドルを握っている。足は当然、助手席にあるので、ブレーキを踏むことは出来ない。

しかし雅人は動かなかった。

「雅人？」

僕は雅人の膝を叩いた。しかし反応が無い。恐る恐る雅人の顔を見る。

「もしや……感染？」

最悪の事態が頭を過ぎる。しかし状況は別の意味で最悪だった。雅人は気絶していた。恐らく先ほどの急カーブの衝撃のせいだろう。

「このヘタレの役立たずが！」

僕は雅人を抱え、ドアを開けた。

「おい、鈴！飛び降りろ！」

声は何とか鈴に届き、鈴が頷くのが確認出来た。最初に怜汰が優香子を抱えて飛び降りた。幸いにも奴らは周辺にいない。鈴もそれに続くようにして飛び降りた。僕も雅人を抱え、それに続く。

空中で受身の姿勢をとり、地面に転がる。雅人の頭が何かにぶつかる音が聞こえたが無視した。今は気絶しているヘタレの心配をしている場合ではない。

「鈴、生きてるか？」

霞む視界の中で鈴がゆっくりと立ち上がった。他の二人も立ち上がる。

怜汰が僕に向かって叫んだ。

「どうして飛び降りたんだよ！」

僕は無言で、地面に転がっているヘタレを指差した。怜汰も何かを察したようで、文句を言うのを止めた。代わりに雅人に恨みの籠った視線をぶつける。

「まあいいぜ。早く中に」

怜汰が辺りを見回す。奴らが周辺に集まって来るのが確認できた。時間はあまり無さそうだ。

「行くぞ。ヘタレは……一応連れて行け」

僕と怜汰は雅人を掴み、持ち上げた。優香子と鈴が鉄柵を乗り越える。

僕ら四人＋ヘタレは何とか目的地の律明学園に辿りつく事が出来た。

果たして生存者はいるのだろうか？

逢海寛人 7月9日 午後11時46分 渡良瀬第三中学校 敷地内（後書き）

ご意見・ご感想をお願いします。

誤字などのご報告もお願いしますね。

橘響夜 7月9日 午後11時47分 渡良瀬市 市街地（前書き）

今回は響夜編です。これからメンバーが合流していきます。

橘響夜 7月9日 午後11時47分 渡良瀬市 市街地

「いい眺めですね。俺の相棒も調子がいいみたいです」

そう言って白鳥は銃を撫でる。

「そうだな」

白鳥の呟きに俺は軽く相槌を打った。

俺の部隊＋尾上というコック、そして俺の妹、麻里に生き写しの和泉の計十人は大きめの観光バスで市街を移動していた。

俺と白鳥は今、バスの上に出て、銃で奴らを蹴散らしている。運転は準一に任せ、後のメンバーは車内で雑談でもしているのだろう。バスの上に置かれたCDプレイヤーからはテンポの良い洋楽が大量で流されている。全て白鳥の趣味らしい。

「いや、隊長。こうしていると地獄も天国と変わらないですね。今までの作戦では音楽なんて聞いている余裕が無かったですし……」

「そうかもな……まあ状況は最悪だがな」

俺は苦笑し、周りに目を配らせた。前方にコンビニが見える。

俺は運転席の準一に向かって叫んだ。

「おい！前方にコンビニだ。俺と白鳥で中を偵察する」

「分かった。コンビニの前に止める」

バスのスピードが少し上がった。

コンビニはまだ薄く非常灯が灯っていた。俺はバスの屋根から飛び降り、コンビニの中を窓越しに覗き込んだ。人影は見当たらないが、奴らが通路で蹲っている可能性もある。

俺は89式小銃を構え、扉を叩き割った。素早く銃を構え、店内を警戒する。白鳥も俺の後ろから店内に入ってきた。俺がまず通路を全て確認したが、奴らの姿は見当たらない。

「クリアだ。物資を補給しろ」

「はい」

白鳥が一番、入り口側の棚から乾電池などを漁る。俺はコンビニには必ずあるトイレに向かった。別に用を足したい訳ではない。奴らが潜んでいるかも知れないからだ。

俺はトイレのノブに手を掛け、開いた。中は真っ暗で、何がいるか分からない。俺が手持ちのライトで明かりを点けると、そいつはいた。

口から血を流したそいつは急な明かりに反応し、俺の方を睨んだ。その目は人間ではなかった。

そいつが飛び掛るのと、俺が89式小銃をぶっ放すのは同時だった。銃口が火を噴き、そいつは壁際まで吹っ飛んだ。

「隊長！どうかしました！？」

白鳥の声が聞こえる。俺は白鳥に向かって叫んだ。

「一匹始末した。物資の補給を続けろ」

「分かりました」

俺は撃ち殺したそいつを見下ろし、唾を吐いた。そのままドアを閉め、トイレを後にする。

俺は近くのレジの脇の棚からタバコを取り出した。一箱の包装を破り、取り出したタバコに火を点ける。煙を吐き出し、俺はレジの目の前にあった花火コーナーに目をやった。

「花火か……使えるかもな……」

俺は花火を全てバスに積み込んだ。火薬はあるに越した事はない。こんな状況なので何時、弾薬が尽きてもおかしくはないのだ。その時、火器を作る位の火薬は持っていたほうが得策だ。

それにこれから向かうのは学校だ。そんじょそこらの市立学校ならともかく、名門私立学園だとしたら、理科室には普通の学校には無いような薬品があるかもしれない。それらは全て爆薬や火器の作成に使えるものだ。

俺は花火を積み込んだ後、コンビニの中の雑誌コーナーに目をやった。

「暇つぶしにはなるな」

雑誌も買い物カゴに入れ、バスに持っていった。

雑誌などは隊員の暇つぶしになるだろう。こんな状況だからこそ、暇つぶしは必要なのだ。残念ながら大人のお楽しみ、十八禁の雑誌などは無かった。あったなら皆、飛び上がって喜んだだろう。

「後は……食料だな」

俺は一通り作業が終わった白鳥を呼び、カップ麺やスナック菓子などを袋に詰めさせた。俺はその間にタバコを集め、バスに積み込む。もちろん酒も忘れずにだ。コンビニには他にも隊員達が喜びそうな

ものが沢山あった。

例えばこの暑い季節に欲しいもの、アイスや氷などだ。しかしこれらは途中で溶けてしまいそうなので、今は回収を諦めた。しかしまだ冷凍庫は動いていたため、そのうちに回収出来るかも知れない。コンビニ弁当やパンはあまり日持ちしないので、一先ず今、隊員が食べる分だけを回収した。

娯楽用のカードゲームなどもあったが、これは俺の趣味で回収した。俺はこの手のトレーディングカードに昔、ハマっていて、今でも集めているのだ。この際、持っていてても文句はないだろう。必要ないだろうが、レジの現金も回収した。この事態で現金は意味を成さないだろうが、事態がもし治まったら……強い味方になってくれるだろう。

「そろそろ行くか。白鳥、残りの物資を積み込め。行くぞ」

俺は白鳥を急かし、コンビニを出た。白鳥がコンビニから出てくると俺は近くの販売機を倒し、入り口を塞いだ。

「何してるんですか？」

俺は誰も入れないようにしてから、白鳥の質問に答えた。

「後から取りに来る時、荒らされないようにするためだ。どんな輩がいるか分からないからな」

危険なのは奴らだけではないだろう。この事態で本性を表している人間もさぞ多い事だろう。俺が心配なのはそこだった。人間は奴らと違って、頭で考えて行動する。故に恐ろしい。

「そうですね。人間のほうが厄介かもしれませんね」

「そっだ。お前も新しい嫁さんには気をつける。何時、本性を表すか分からないぞ」

白鳥が苦笑する。俺たちは再び、律明学園へと向かってバスを進ませた。

橘響夜 7月9日 午後11時47分 渡良瀬市 市街地（後書き）

次回は久しぶりの鷹見真一編をやる予定です。

ご意見・ご感想をお願いします。

あと、誤字などのご報告もどうぞ。

物音はしない。奴らの呻き声も今は止まっている。

今、俺と矢島、佐伯は警察署の最上階にある会議室に籠っている。俺たち三人が警察に到着したのと同時に暴徒は警察署を襲った。

警察はバリケードを張り、必死の抵抗をしたが、三十分で外のバリケードは破られ、中も奴らに占領された。俺の同僚も数え切れないほど死んだ。

もっと酷いのは、警察の上層部が暴徒の署内侵入と同時にヘリでさっさと逃げてしまったことだ。所詮、俺たちの命など自分の命や社会的な地位と比べたら、小さいもの。俺たちは完全に見捨てられ、一人、また一人と死んでいった。

俺たち三人は何とか逃げて、ここまでたどり着いたのだった。

「鷹見さん。そろそろ移動しません？」

佐伯が小さな声で俺に言った。俺も頷く。

「確かに。ここで籠っていてもあまり状況は変わらないかもしれないな」

俺は呟き、会議室の扉をそつと開けた。廊下に人影は存在しない。もう奴らも別の場所に移動したのだろうか？どちらにせよ脱出しなくてはいけない。

俺はドアを閉め、室内を見渡した。佐伯は会議室の椅子に座っていて、俺の指示を待っている。矢島は奥の署長室で仮眠中だ。

俺は拳銃の残弾数を確認した。後、三発残っている。マガジンは後一つだ。佐伯や矢島の銃はもう撃ち尽くしてしまった。

「そうだな。佐伯、矢島を起こしてくれ。これからのことについて説明する」

「はい」

佐伯は素直に頷き、署長室へ入っていった。しかし矢島の寝起きの悪さはお墨付きだ。佐伯がどう対応するのか、見ものだ。

案の定、直ぐにドタバタと騒ぐ物音が聞こえた。矢島の唸り声も聞こえる。どうやら相当、熟睡していたようだ。少し悪い事をしてしまったかも知れない。

数分ほど経って、かなり不機嫌そうな顔をした矢島とげっそりとした佐伯が現れた。佐伯の顔に痣があることから、やはり殴られたようだ。

矢島が椅子にどっかりと座り、口を開いた。

「で、脱出経路が決まったのか？」

「ああ、この階の非常階段を使って一階まで降りる。その後は運次第だ」

矢島が俯いた。しばらくして顔を上げたかと思うと、満面の笑みを浮かべた。

「気に入ったぜ。こうなったら俺たちの運に賭けてみよう」

俺も真顔で頷いた。佐伯は不安の色を顔に浮かべていたが、矢島の強い言葉に押されたのか、勢い良く頷いた。生きたいのは皆、同じなのだ。

「そうと決まったら行こう。時間が惜しい」

矢島の言葉に俺と佐伯も頷いた。

まず俺がドアを開けて、廊下を制圧した。幸い、廊下には敵が居らず、難なく進むことが出来た。俺は銃を持っているので、先頭を務める。佐伯はあまり力も強くなり、図体も小さいので真ん中だ。ゴツイ矢島はもちろん殿を務める。

非常階段は会議室から一番遠い場所にあるので、危険が伴うが、この様子なら奴らはもういないようだ俺たちは何の障害もなく、非常階段までたどり着いた。

俺がドアを開けると、生暖かい風が吹き込んでくる。非常階段は外にあるので、階段の手すりなどは鳥の糞だらけだ。凄まじい臭気が漂って、胃の内容物がこみ上げてきたが、何とか抑えた。

「早く行こう。鼻がもげる」

「同感です……」

俺たちは早足で階段を下りた。なるべくスピードを出して、尚且つ慎重にだ。階段を下りて、大通りに出た時には思い切り深呼吸をした。

「酷かったな……一体、どこの腐海だ？」

「さあ、でも約一名平気な人もいますけど？」

佐伯の言葉どおり、矢島は気にしてもない様子だった。矢島曰く、下水道の修理のバイトをしていた時はもっと酷かったらしい。

俺たちは人気のない大通りを歩き始めた。人の気配すらしない大通りは不気味以外の何者でもない。

店のショーウィンドウは割れ、車があちこちに放棄されている。人の死体は……あまり見当たらぬ。既に蘇って奴らの仲間になったのだろうか？

俺がぶつぶつと呟いていると、矢島が俺の口を塞いだ。

「何だ？」

「静かに！物音が聞こえる」

俺も耳を澄ませると、確かにエンジン音が聞こえた。この大通りを走っているようだ。しばらくして道路の向こうに一台のバスが見えてきた。こちらに向かって走ってきている。

「丁度いい。乗せて貰おうぜ」

矢島が呟いて、足を前方に進めた。俺がそれを止める。

「どうした？行かないのか？」

「待て、バスの上に銃を構えた兵士が乗っている。もしかしたら部隊から離脱した賊かもしれない。この状況で統率の執れている部隊などいないだろう？」

「でも僕たち食料なんて持ってないですから、別に取られるものはないですよ？」

確かにそうだ。

しかし俺は拳銃を持っている。もし奪われたら、それこそ護身の

術がなくなってしまう。

バスはゆつくりとこちらに向かってきていた。バスの上には二人の兵士が座っている。一人がこちらに気付いたようだ。手を振っている。

「危険……は無さそうですよ」

「そうだいいが……」

バスはやがて、俺たちの前で止まった。上に座っている兵士の一人が上から呼びかける。

「大丈夫か？良かつたら乗れ。但し、噛まれている奴は御免だ」

その兵士はかなりの美青年だった。もうひとり音楽を大音量で流している。聞いたことのない洋楽が先ほどからこの大通りに木霊していた。

「乗せてくれると助かります。俺は鷹見真一、警察官です。こちらは矢島健、こっちの小さいのは佐伯卓」

「そうか。俺は橘響夜。隣のは白鳥だ。よろしく」

「ええ、こちらこそ。で、何処へ向かっているんですか？」

俺は響夜というリーダー格の人物に聞いた。

「律明学園だ。立て籠もるのに最適な場所なんだ。中には民間人二人と他の隊員がいるから、寛いでくれ」

俺もはにかんだ笑みで返す。どうやら心強い仲間になってくれそう
だ。

鷹見真一 7月9日 午後11時02分 渡良瀬市 県警 会議室（後書き）

ご意見・ご感想などお願いします。
あと、誤字などのご報告もどうぞ。

逢海寛人 7月10日 午前00時27分 渡良瀬市 私立律明学園（前書き）

漸く一日目が終了です。

久々にアクセス数を確認してみると、何と何と12000アクセスジャストでした。これも皆さんのお陰です！
記念に背景を黒にすることにしました！

逢海寛人 7月10日 午前00時27分 渡良瀬市 私立律明学園

僕らはヘタレと化した雅人を担いで、学園の敷地内へと足を踏み入れた。

学園内はそこまで荒らされた様子もなく、感染者は見当たらない。

「どうやら安全みたいだな。これで一安心だ」

怜汰が一言呟き、近くのベンチに腰を下ろした。僕も雅人を地面に置いて、休憩した。そしてもう一度、辺りを見回す。

「後は生存者がいるかどうかだな。居るといいけど……」

「おいおい、生存者が居たとしても、俺たちを受け入れてくれるかどうか分からないんだぜ。あまり樂觀するなよ」

寛人は頂垂れた。

怜汰の言う事はもつともだったからだ。鈴木も怜汰の意見に賛同している。優香子だけが僕と同じ様に生存者の存在を希望だと思っている。

「第一、この状況で生存者を気にする奴は自分の力で生き残れない奴だ。人に頼っていたら、これから先、生きていけねえよ」

怜汰の一言が僕の胸に突き刺さった。

「僕は人に頼っていたのかな？」

「そうよ。私だって頼ってる。でもこんな時だからこそ、私達は頼

りあわなくちゃいけないんじゃないの？」

「……そうだな。みんなで協力して生き残ろうぜ」

「もちろんよ！」

優香子の返事に僕らも続いて頷いた。

僕は生き残る。

目の前で死んでいった人たちのためにも、生きなくてはいけない。

「よし、早く行こう。今日は疲れた。風呂にでも入って寝たいよ」

僕は部活から帰って来た子供のようなことを口走った。

怜汰も頷いて、力強く歩いていく。

「ねえ、アレも一応、持って行かないと……」

優香子が指差した先には雅人が伸びていた。

そろそろ目覚めるのだろうか、それまで待つつもりはない。

「仕方ねえ、持っていくか。寛人、手伝え」

「ああ」

僕と怜汰で雅人を担ぐ。

僕達は校舎へと足を踏み入れた。

校舎内の状況は僕らの予想を大きく上回っていた。

理由は生存者だった。

まず生徒玄関に入った時点で、三人程の高校生が座り込んで話していた。

「お前等も生存者かよ」

一人の金髪のヤンキーらしき男がこちらにやって来る。怜汰が雅人を下ろし、バットで身構えた。

「待て待て、俺はお前らと喧嘩するつもりはねえよ。俺は松下^{まつした}洋一^{よういち}、
洋一と呼んでくれ。ちなみにこの学校の生徒だ。こっちのチビは下^{もやれん}谷^{たけうち}蓮^{れん}、こっちの地味な奴は竹内亮輔^{たけうちりょうすけ}だ」

蓮と呼ばれた小柄な男が笑顔で僕らに手を差し伸べてきた。怜汰がその手を握り返す。次にもう一人のシャツを出した茶髪の色男がこちらを見た。

「おい、リヨウ。どうしたんだ？」

「うるせえ。どうせ俺等は死ぬんだからよお、今更挨拶なんて意味ねえよ」

「まだそんなこと言ってやがったのか？ いいから来いよ」

しかし亮輔は近づこうとしない。

洋一が溜息をついた。

「あいつ、彼女と逃げてきたんだけどよ、その彼女が死んじまっ
た。それからずっとああいう感じだ。あんま、気にすんなよ」

僕は僕で安堵の溜息をついた。

「僕も貴方方がいい方々で安心しました。僕は逢海寛人。よろしく
お願いしますね」

「俺は堺怜汰だ。怜汰と呼んでくれ」

「私は今野優香子。こっちは佐倉鈴です」

僕は最後に気絶している雅人を指差した。

「こいつは三笠雅人、ヘタレですけどあんまり苛めないでやってください」

「おう、よろしくな」

僕らは顔を互いに見合わせた。

やはり人は見かけで判断出来ない。この人たち、口は悪いけどいい人だ。僕はそう思い、顔を綻ばせた。

「言っとくけどな、中の状況はあんまり良くないぜ。俺たちも教室に嫌気が差してここで屯っていたんだからな」

「何かあるんですか？」

僕が質問すると、後ろにいた蓮が思い出したように肩を震わせた。

「着いて来いよ。いいもん見せてやるぜ」

洋一が蓮に呼びかけ、教室に向かって歩き出した。僕らもその後

に着いて行くことにした。

一体、いいものとは何なのだろうか？

逢海寛人 7月10日 午前00時27分 渡良瀬市 私立律明学園（後書き）

ご意見・ご感想などお願いします。

あと、誤字脱字などありましたらご報告お願いします。

逢海寛人 7月10日 午前00時51分 渡良瀬市 私立律明学園

僕らは気絶した雅人を亮輔に任せ、六人で教室へと向かった。

途中、次第に教室に近づくにつれて怒号や呻き声が聞こえてきた。

「何だ？まさか上は奴らだらけとか言っなよ？」

「ちょっと違うな。まあ見れば分かる」

怜汰の呟きに洋一が笑いを含んだ声で答えた。僕は不安を感じながらも、何も言わずに歩き続けた。

ふと洋一が一つの教室の前で立ち止まった。入れ、と軽く会釈する。

「僕が先に入る。怜汰が次だ。鈴と優香子は安全が分かるまで入ってくるな」

僕は指示を出し、扉を開けた。

そこには阿鼻叫喚の地獄があった。

まず目に入ったのは、椅子や柱に縛り付けられもがいている生徒だった奴らだった。それを必死に生きている生徒が押さえつけている。

「目を覚まして！弘子ってば！」

「止める！」

生きている生徒がそれぞれ奴らと化した生徒に話し掛けている。僕らはその光景を呆然と見つめていた。

洋一と蓮が後ろから僕の肩を叩いた。

「な、これで俺たちが嫌気差したのも分かるだろ？ やってられねえよ」

「ど、どうして殺さないんですか？ 奴らに理性なんて無い。殺すのが一番です。本人のためにも」

「そう思うだろ？ でもな、昨日まで親友だった奴を殺せるか？ 俺は出来るが、他は無理だろう」

優香子がふらふらと床に座り込んだ。鈴が支えながら教室を出て行く。

洋一が教室の光景を見ながら呟いた。

「こんなんじゃ、ここも長く持たないだろうよ。俺たちはここを抜けようかって話をしてたんだ」

「でも、固まっているのが安全ですよ」

「同感だな」

怜汰も頷く。

この状況で外に出たら死は免れないだろう。だとしたらここが安全という事になる。しかしこの教室は見るに耐えない光景だった。洋一が廊下の他の教室を指差した。

「あそこの部屋は化け物になった奴らを閉じ込めている部屋だ。それと向こうは怪我人がある。上の階には小学生共が寝ているんだ」

「ここの責任者は誰なんですか？」

僕の質問には蓮が答えた。

「ここの責任者は女教頭です。後は教師が三人程。ここには警官や自衛隊が存在しないから、生き残った大人が指揮を執っている訳ですよ」

蓮は不良の割には敬語で喋る。恐らく向いていないのだろう。

洋一は見る限り画体も良く、喧嘩も強いだろう。味方になってくれた事に感謝すべきだ。

「貴方方、新入りかしら？」

背後から女性の声が聞こえた。

僕と怜汰が振り返ると、そこには美しいという言葉以外に表現できない少女がいた。その隣にはキツめの顔をした女性がいる。これが女教頭だろう。僕は直感でそう思った。

「何だ。生徒会長さんと糞ババアかよ」

洋一に糞ババアと呼ばれた女教頭は一瞬、顔を顰めたが、無視して僕の顔を見た。

「貴方方、お名前は？」

「はい。僕は逢海寛人です。こっちは堺怜汰。後ろの二人は今野優香子さんと佐倉鈴です」

「佐倉鈴？ああ、第三中学校の生徒会長さんね。よろしく。私はこ

この生徒会長を務めている阿久津風禰あくつ かざねです。こちらの方は教頭先生かりたに しがこの刈谷洪子先生」

刈谷という名の教頭は静かにお辞儀した。僕もそれに笑顔で返す。

「では貴方方も私達の指揮下に入って貰います。宜しいですよね？」

刈谷教頭が僕らを見て言った。この状況で一介の教師の指揮下に入ることに不安を感じるが、僕らに教師を見返せるほどのいい案はない。

「はい。そうするしか無さそうですね。お願いします」

「ええ、こちらこそ」

風禰が僕に手を差し出した。その笑顔は眩しかった。

「あ、ああ、よろしく」

僕もぎこちない笑みで返した。怜汰も女教頭は気に入らないらしいが、風禰は気に入ったようだ。

洋一はそんな僕らの様子を素知らぬ顔で眺めている。洋一も同じく女教頭が気に入らないらしい。

「せ、先生！外に兵士がいます！」

廊下の反対側から一人の男性教師が走ってきた。胸の名札には大野と書いてある。

刈谷教頭が振り向いて、大野という教師に指示を出した。

「急いで生徒を避難させなさい。私達で話し合いを行います」

刈谷教頭の指示で大野は上の階にすっ飛んでいった。刈谷教頭は
厳しい表情のまま生徒会長とともに生徒玄関へ向けて歩き始めた。
兵士とは誰なのだろうか？

逢海寛人 7月10日 午前00時51分 渡良瀬市 私立律明学園（後書き）

ご意見・ご感想をお願いします。

あと、誤字脱字などありましたらご報告お願いします。

橘響夜 7月10日 午前1時08分 渡良瀬市 私立律明学園（前書き）

漸く全員が合流です。

橘響夜 7月10日 午前1時08分 渡良瀬市 私立律明学園

俺はバスから降り、目の前の学園を見つめた。
学園自体の規模も相当なものだが、それよりもこの塀の高さでは
奴らも入れないだろう。俺は素直にそう思った。

「白鳥、山縣。この門を開ける。手伝ってくれ」

「はい」

白鳥と隊員の山縣省吾^{やまがたしやうご}が門に手を掛けて、上り始めた。向こう側に下り、門の鍵を針金で開ける。

その後は三人で何とか門を開けることに成功した。バスを中に入
れ、今度はもう一度門を閉めるといふ作業を行う。正直言っ
ても疲れた。

「よし、生存者を探す。俺と準一で先行する。白鳥と村上も着いて
来い。後はここで待機しろ」

俺は銃を構え、校舎へと歩みを進めた。

校舎に入ると直ぐに二人の子供が目に入った。一人は気絶してい
るようだが、もう一人は俯いている。

「おい。生存者か？」

俯いていた少年はゆっくりと顔を上げた。その目は酷く虚ろなも
のだ。

「ああ……あんたら、軍人？」

「そうだ。生存者が他にもいるのなら、会いたいんだ」

「ここには腐るほど生存者がいるぜ……でも関係ない。もう俺たちはここで死ぬんだからよ……」

俺は頷き、準一を呼んだ。

準一は少年を怪訝そうな表情見つめている。薬でもやってるんじゃないか？恐らくそう思っているんだろう。

「少年よ。代表と話がしたい。どこに居る？」

「代表？上に行けば会えるぜ……だからもう俺に話し掛けるな」

「……そうか。ありがとう」

俺は少年を置いて、中に入った。もちろん土足でだ。というよりこの状況で靴を脱ぐ奴がいるとも思えないが……。

廊下に目をやると、数人の人影が目に入った。先頭は女性らしい。

「貴方方ですか？外にいた兵士達というのは」

「ああ。お前が代表か？」

「そうです。私はここで教頭を務めさせて頂いている、刈谷洪子と申します」

「そうか。俺は対特殊災害派遣先行部隊、「翡翠隊」隊長、橘響夜だ。早速だが話がある」

刈谷という女教頭は仕草でこちらに來い、と言った。

俺と準一は素直にそれについて行く。刈谷は俺と準一を連れ、二階へと向かった。

二階の廊下には少年たちが十人ほど屯っている。そして呻き声がかき鳴らしてきいてきた。

「まさか、感染者がいるのか？」

「ええ。化け物化した生徒たちは椅子や柱に縛り付けています。定期的に食事を与え、水なども与えておりますので、ご心配なく」

俺は刈谷を睨み、何も言わずに教室のドアを開けた。

突然入ってきた俺の姿を見て、生徒たちは驚いていたが、そんな視線に構わず俺は教室を見回した。感染者が確かに椅子や柱に縛り付けられている。

「退け。邪魔だ」

俺はドアの前に立っていた生徒を押し分け、黙って腰からH&A mp;K2000を引き抜き、一番近くにいた感染者の額を打ち抜いた。続いて教室内の感染者を順番に撃つていった。

直ぐに教室内の感染者は一掃された。準一が後から入ってきて、他の生徒が感染していないかを確認する。

刈谷が銃声に驚いて、室内に入ってきた。教室内の光景を見て、叫ぶ。

「貴方、撃つたんですね！この人殺し！」

「弘子が！どうして……」

教室内で我に返った生徒たちが、死んだ（正しくはもう死んでいる訳だが……）友人に涙を流している。

「人殺し！」

教室内でも叫び声が巻き起こった。

俺は黙らせるように天井に向かって、威嚇射撃を行った。教室は直ぐに静まる。

「俺が今、撃った奴らはもう人間じゃない。殺されなくなったら、殺せ」

「貴方は生徒を撃ちました。これはれっきとした殺人です」

「いいか、刈谷さんとやら。殺人というのは人を殺した場合に適用される。そして奴らはもう人間じゃない。よく聞け、奴らに噛まれた人間は奴らの仲間になる。それは嫌だろう？」

生徒たちはお互いに顔を見合わせ、騒ぎ始めた。
あちこちから死にたくない、などの声が上がっている。

「分かったか？死にたくない奴は俺に従え。俺たちには武器もある。お前たちを守ってやる。だから……」

「響夜……」

準一が静かな声で俺を呼んだ。俺は話を区切り、準一がしゃがんでいるところまで行った。

準一は二人の女子高生の内、背が小さい方の傍らにしゃがみ、深刻な顔をしていた。

「どうした？」

俺は準一の横にしゃがんだ。

準一が少女の腕を持ち上げる。そこには噛み傷があった。

「感染者か。全員から隔離しろ」

準一が少女の腕を掴み、立ち上がらせた。そして教室の端に連れて行く。少女はじたばたともがきながら、叫んだ。

「嘘！！私は感染してないわ！これはガラスで切ったのよ！」

少女は傍にいた友人を見て懇願した。

「ねえ、助けてよ！私は噛まれて無いわよね？」

しかし別の少女は答えなかった。じりじりと後ろに下がっていく。他の生徒も少女から遠ざかる。

別の少女は小さい声で呟いた。

「貴方も化け物になるのよね？私は見たくないわ……」

「そうだ！」

「殺せ！」

生徒たちは口々に叫び始めた。少女は目を見開いて、生徒たちを見つめた。そして準一を振り払い、生徒たちの方へ走っていく。

「嫌！見捨てないで！」

生徒たちは悲鳴を上げ、迫ってくる少女から逃げようとした。刈谷と男性教師は何も言わなかった。

俺は迷わず、H & a m p ; K 2 0 0 0 で少女の足を撃ち抜いた。

少女がバランスを崩して転ぶ。

少女は足を撃たれたことによる痛みと恐怖で、必死にもがいている。俺はH & a m p ; K 2 0 0 0 を構えたまま、ゆっくりと少女に近寄った。

「悪く思うな。これも皆が生き残るためだ」

「や……撃たないで……死ぬのは嫌……」

俺は躊躇わず、引き金を引いた。少女の頭の一部が吹き飛んで、少女の体は地面に倒れた。

俺がこの町に来て、初めて”人間”を殺した瞬間だった。

橘響夜 7月10日 午前1時08分 渡良瀬市 私立律明学園（後書き）

ご意見・ご感想をお願いします。

あと、誤字脱字などありましたら、ご報告お願いします。

橘響夜 7月10日 午前1時15分 渡良瀬市 私立律明学園

俺が撃った少女は頭の一部を失い、悲惨な姿で床に倒れていた。しばらくの沈黙が教室を支配した後、死んだ少女の親友である少女が叫んで泣き崩れた。

「嫌！嫌！嘘よ！」

他の生徒も目の前の現実が受け入れられずに、ただ呆然と立ち尽くすことしか出来ないようだった。刈谷が生徒と俺の間に入り込んだ。

「貴方は生徒を、まだ発症していない人間を殺害しました。貴方のような危険な人間に生徒をこれ以上近づけるわけにはいきません」

「俺は間違ったことをしていない。この少女はまだ発症していないが、間違いなく感染していた。発症するのを待っていたら、他の民間人にも被害が出ていたかも知れない」

俺の言い分はもつともだと思う。

しかし俺だつて殺したくは無かった。

俺が人を殺したのは初めてではない。それ以前から他の任務で大勢の命を奪ってきている。しかしそれは武器を持った相手のみだ。無抵抗の人間を、それも命乞いをした人間を殺したのはこれが最初だ。

しかし俺に罪悪感などを感じる心は既に無かった。

あの日、麻里が死んでからは……。

俺はあの日以降、涙を流していない。そしてこれからも涙を流す事はない。人は俺を悪魔と呼ぶかも知れない。それでも構わない。

「俺はこの少女を殺したことについて、罪悪感などはない。感染者は全て処分せよ、というのが司令部の命令だ。それに俺が人を殺したのはこれが初めてじゃない。俺の部隊は元々、敵地への先行部隊だ。主に強襲を担当するポジションだ。人なら幾らでも殺している。今更神に許しを乞うつもりはない」

「貴方は最悪の人間です」

刈谷は俺に冷たく言った。

「貴方の言うとおり、俺は最悪の人間だ。悪魔だ。しかしな、この状況で生き残るのは悪魔と天使、どちらだと思っ？」

「悪魔だな……」

俺の背後から声が聞こえた。それは金髪の少年だった。

「俺は松下洋一だ。あんたのいう事は何一つ間違っちゃいねえ。俺も何時、ここに居る奴らを殺そうかと思っただ。お陰で助かったぜ。幾ら俺でもバットで一人一人頭を潰していくのはキツイからな」

その声に生徒たちからは怒りの声が上がった。しかし同時に俺に賛同する者が現れた。

これが窮地に陥った時の人間なのだろう。

「俺は生き残りたい。是非ともな。お前たちはどうだ？」

洋一という少年が他の生徒に問い掛ける。一人の男子生徒が洋一に賛同し、何人かがそれに続く。

俺はその様子を見て、再び刈谷に向き直った。

「他の生徒は生への執着が強いようだ。で、ここで話し合いたいのだが」

「……分かりました。話だけは聞きましょう。こちらへ」

俺は刈谷と共に別室へと向かった。準一も後に続く。白鳥と村上
は他の部屋の感染者を処分しに出かけた。

俺と準一が案内されたのは、生徒会室だった。生徒会室は三階に
あり、他の部屋に比べて、随分と小奇麗だった。

俺と準一の他には刈谷と男性教師三人、生徒会長を含む生徒会役
員だ。

このような事態になっても、実質的に学校を運営するのは生徒会
らしく、話し合いは生徒会長の司会の下、行われた。

俺たちが出した条件は三つ。

一つはこの指揮権を俺と学校側で平等にすること。二つ目は学
校内に武器などを搬入するのを許可すること。三つ目は俺たちに警
備室、放送室などの校内への情報伝達に役立つ部屋を明渡す事だ。

学校側はこれを仕方なく認めたが、一つ条件を出してきた。

それは学校内での生徒関係の問題の処置は生徒会に委任すること。
俺もそれを認め、話し合いは穏便に終った。

俺はもう一つ、頼りになる生徒には武器を持たせるということに
ついて俺は許可をとった

理由は俺たちだけでは生徒全員を守りきれるかどうかは分からな
いからだ。ならば武器を扱えるものには俺たちの手が離せない時に
警備を任せれば、いいのではないかというのが俺の考えだ。

「では、この旨を生徒に報告するのが今日の早朝で宜しいですか？」

生徒会長である阿久津風禰が俺に尋ねた。

「ああ、そうする。今日は皆を寝かせてやろう」

俺は呟き、椅子に座ったままの状態で背伸びした。それと同時にドアが勢い良く開いて、一人の少年が入ってきた。俺は驚いて椅子から転げ落ちそうになっていた。

「すみません！これを聞いてください！」

少年の手には小型のラジオが握られていた。

「分かった。君の名前は？」

「は、はい。逢海寛人です。それで……」

俺は黙って、寛人という少年の手にあるラジオの音量を上げた。そこからは衛星放送らしいニュースが流れていた。その内容は俺たちの予想を超えるものだった。

「国民の皆さんへ、只今起きている暴動についての政府からの重大発表があります。まずWHOによりこの暴動の原因になっているウイルスの警戒レベルがフェーズ6に引きあげられました。

日本でもこのウイルスは感染爆発を引き起こしており、各地で大きな被害を出しております。特に被害の大きい地域では7月10午前八時までに駐屯している全兵力を退却させるとの声明を政府首脳は発表しております。該当する地域は関東全域、関西全域、岡山、鳥取、広島、中部地方のほぼ全域となっております。尚、東北地方は未だ感染者が少数のため、兵力の駐屯は継続されます。

該当地域の皆さんは午前八時までに最寄の避難所か、最寄の健在

している自衛隊基地、警察署まで行き、脱出用のヘリで該当地域より避難してください。午前八時以降のヘリの運行はありませんので、乗り遅れた皆さんは自力で脱出していただくことになります。

尚、東北地方はあくまでも一時的な避難場所であり、避難民が増えることにより、感染者が増加した場合は放棄されます。現在、陸奥半島、津軽半島からのフェリー便の他、青函トンネルが北海道へ渡る手段となっております。四国、九州も同じように感染者が増大した場合は放棄されます。

国民の皆さんが一人でも多く無事に避難出来るように最善を尽くすと、総理大臣はコメントしております。決して最後まで希望を捨てずに避難してください。

尚、これは録音放送です。お問い合わせなどは一切受け付けておりません」

放送を聞き終えた俺たちの間では沈黙が漂っていた。
初めに口を開いたのは準一だった。

「どうするんだ？ここに立て籠もるか？それとも活路を見出すか？」

「そうだな……俺としては今すぐにでもここからおさらばしたいが、ここに生徒を見捨てるわけにはいかない」

「なら、生徒を連れて行けばいいのでは？」

風襦が俺に尋ねた。

「確かに。しかしこの人数を連れて、避難場所まで行くのは難しい。市街には奴らが溢れてるだろうし、最寄の駐屯地までは歩いて一時間かかる。警察署は既に壊滅だ」

一同は黙り込んだ。

俺はここで今、思いついた提案を試みることにした。

「俺たちなら駐屯地まで行く事が出来る。それからこの場所を教え、ヘリでここに来て貰うというのはどうだ？」

「それしかないな……」

「でも、もし拒まれたら？」

今度は寛人が俺に尋ねた。

「その時はその時だ。自力で脱出するしかない。とにかく今は行動あるのみだ」

その場にいた全員が頷いた。刈谷もこれには賛成した。

「駐屯地までは少数で行く。これから選抜するメンバーも連れて行く」

こうして俺たちは行動することになった。

俺たちは生き延びられるのだろうか？

橘響夜 7月10日 午前1時15分 渡良瀬市 私立律明学園（後書き）

ご意見・ご感想をお願いします。

あと、誤字脱字などありましたらご報告お願いします。

橘響夜 7月10日 午前2時05分 渡良瀬市 市街地（前書き）

橘響夜 7月10日 午前2時05分 渡良瀬市 市街地

「響夜、前をしてみる。ここからが大変だぞ」

準一の声で俺は前方を見つめた。

ここは駐屯地に向かう国道で、避難民が放棄した車両が大量にある。その量は国道を余裕に埋め尽くしていた。炎が燻っている車両もあり、下手をするとガソリンに引火する可能性もあった。

「よし、俺と準一で先行する。車両の下、中、間にも気を配れ。火器の使用は極力控えろよ」

俺は車のボンネットに乗り、辺りを警戒した。後ろからは一定の間隔で仲間がついてくる。

俺の部隊のほかに、警官三人の中で一番画体が良かった矢島健と中々決断力のある逢海寛人という中学生も同行することになった。

「静かです。不気味になってきました」

「そうだな。油断するな。特に白鳥、お前は早く家に帰って、嫁に顔を見せてやれ」

「そうですね。でも嫁は無事ですかね？」

「信じる。それしか今は出来ない」

皆は真剣な顔で頷いた。

俺は白鳥に今の言葉を言ったつもりだが、皆も共感する部分があったのか、唇を噛み締めている。皆も大事な家族や友人、恋人がい

るのだろ。それを守りたいのかも知れない。

失うものが無いのは俺だけか……。

俺は心の中で呟いた。

他の皆は守りたいものがあるから、生き残りたいから戦っているのかも知れない。

でも俺は違う。只、目の前にあるものを殺していくだけだ。必要性があれば助けるが、必要が無ければ助けない。人間として失格なのかも知れない。

「隊長、聞こえますか？」

俺は松山の声で耳を澄ませた。そう遠くないところから、人の声が聞こえている。生存者が駐屯地に殺到している証拠だ。

同時に感染者も集まる可能性がある、という事だ。

「急ごう。この数だと相当数がいるぞ」

俺たちは駐屯地へと足を速めた。

「参りましたね……」

村上が曇った顔で呟く。

それもそのはず、目の前では生存者が溢れかえっていた。駐屯地までは後、一キロほどあるというのに既に生存者は路上を埋め尽くしていた。これから一キロもこの人の波が続くのかと思うと、流石に足が止まった。

「そうだな。とにかく、通信出来るところまで行こう。本部と通信

が取れば、ヘリを学園にまわしてくれるかも知れない」

俺は銃を構えなおし、人並みの中に入っていった。なるべく離れない様にお互いの姿を確認しながら進まなくてはいけない。

しかしそう上手くはいかなかった。

俺たちの姿を見た民間人は、俺たちを囲んで口々に助けて、だのと叫んでいた。俺は全てを無視し、先を急いだ。残念ながら全員を乗せられる分のヘリはないだろう。

それよりも俺が気になるのはこれだけの民間人がいれば、感染者も紛れ込んでいるのでは？ということだった。この人ごみで感染者が発症すれば、大惨事は免れない。感染者が健康な人間を襲い、襲われた人間も感染する。そして逃げ場の無い民間人は混乱し、順番に死んでいくだろう。

「全員、止まれ。これ以上は危険だ」

俺が身振りで全員に伝えた。

これより先はさらに民間人の数も増え、固まっていくというのは難しい状況だ。

俺は手持ちの通信機を使い、本部へと連絡を取る事にした。電波状況がよければ繋がるのだが。

「……こちら渡良瀬市陸上自衛隊本部」

「よし、繋がった。俺は対特殊災害先行部隊、「翡翠隊」隊長、橘響夜だ。至急、渡良瀬市律明学園にヘリを飛ばしてもらいたいのだが」

しばらくの間を空けて、別の男の声が聞こえた。

「すみませんが、この町から出る脱出便はこれが最後です。感染者の大群がこちらに向かってきていますので、予定より六時間ほど早いです。兵力は撤退することになりました」

「待て、ここにいる民間人はどうする？」

「自力で脱出して貰うしか、方法はありません。後、五分で兵力は完全撤退します。それまでにここまでたどり着けますか？」

「無理そうだ。俺たちには構わず、撤退しろ」

「貴方方もお気をつけて……健闘を祈ります」

それで通信は切れた。

俺は唇を噛み締め、次の方法を模索した。

「響夜！感染者だ！」

自分から五メートルほど離れた自販機の上で89式小銃を構えていた準一が叫んだ。

俺も振り返ると、背後の国道をこちらに向かって歩いてくる大量の感染者たちが見えた。

「ヤバイな。このままだと感染者と生存者がぶつかる。俺たちで出来る限り防ぐぞ！」

俺は国道を人の流れに逆らいながら歩いた。

途中、何度も民間人とぶつかったが、何とか最後尾までたどり着く事が出来た。

感染者と生存者の距離はすでに百メートルほどで、感染者は着実

に迫ってきているのに対し、生存者たちは数が多すぎて詰まっているようだった。

「白鳥！村上！右を頼む！松山と狼森は左だ！俺と準一で正面、山縣と朝比奈で援護してくれ！矢島と寛人は生存者を早く避難させる！」

俺は全員に叫び、発砲を開始した。後ろでは山縣と朝比奈が対物ライフルで奴らを狙撃していく。左翼、右翼ともに弾幕を展開していたのだが、如何せん感染者の数が多すぎた。俺たちは徐々に下がるしかなく、次第に感染者と生存者の距離も狭くなっていく。

俺が六回目のリロードを行った時、今度は生存者側から悲鳴が上がった。

「うわぁ！止める！」

「化け物だ！」

どうやら前方でも感染者が現れたらしい。

俺は後ろに控えていた山縣と朝比奈に民間人を襲っている感染者の始末を任せた。俺たち六人で正面の敵を撃っていく。

しかし幾ら撃つても奴らは減らなかった。所詮は焼け石に水で、小銃で幾ら始末しようと、奴らは幾らでもいるのだった。

必死の抵抗も空しく、遂に距離は十メートルまでに縮まった。

俺たちは絶体絶命の状況に追い込まれていた。

橘響夜 7月10日 午前2時05分 渡良瀬市 市街地（後書き）

ご意見・ご感想をお願いします。ご質問なども受け付けております。
あと、誤字脱字などありましたらご報告お願いします。

逢海寛人 7月10日 午前2時19分 渡良瀬市 市街地（前書き）

投稿が少し遅れました。すみません。

逢海寛人 7月10日 午前2時19分 渡良瀬市 市街地

僕の目の前で響夜さん達が発砲を始めた。

僕も出来ることなら戦いたかったが、僕は響夜さんから生存者の避難を任せられていたので、戦闘には参加出来なかった。

「皆さん！落ち着いて！早く逃げてください！」

僕は逃げ惑っている人々に叫んだ。しかし前と後ろを感染者に挟まれた生存者は只、混乱するしかなかった。

響夜さんは迫り来る感染者相手にたった八人で立ち向かっている。矢島さんは僕とは反対の方で敵を迎え撃っている最中だ。

「もう……どうして皆聞いてくれないんだろう……」

逃げ惑う生存者は僕のいう事なんて聞いてくれそうにない。皆が自分が生きることだけを考えているからだ。それは僕も同じことだけど……。

「寛人！聞こえてるか？」

遠くで響夜さんが叫んでいる。僕は人ごみからやっとの思いで顔を出し、叫び返した。

「聞こえてます！何ですか！」

「受け取れ！」

その声と同時に一丁の拳銃が飛んできた。僕はそれを見事にキャ

ツチする。9mm拳銃だ。

「これを使えってことなのか？」

しかしこの状況では使い方など聞いていられない。自分で考え、行動する。それが生き残るための手段だ。

「聞け！」

僕は宙に向けて発砲した。生存者は静まり、こちらを見る。

「皆、落ち着いて逃げろ！後ろに奴らが迫っているぞ！」

僕が指差した方向を皆が見て、どよめきが広がる。

感染者は後、三十メートルの所まで近づいていた。このままでは生存者と衝突するだろう。

「生きたかったら、落ち着いて逃げろ！」

僕は何処かの独裁者の演説のように叫んだ。

生存者たちは先ほどとは打って変わり、静かに避難を始めた。

「やるじゃないか！少年！」

両脇の欄干から感染者を狙撃している朝比奈さんが僕を褒めた。

その間も朝比奈さんは次々と感染者の頭を撃ち抜いていく。しかし響夜さんたちが次第に追い詰められていくのは目に見えていた。

感染者たちの数の多さには、小銃程度では歯が立たないような気がするが、それでも響夜さんたちは撃ち続けていた。

「響夜さん！あそこ！」

僕は朝比奈さんと山縣さんが狙撃を行っている両脇の欄干を指差した。あそこに上れば、奴らは追って来れないはずだ。しかし既に距離は十メートルまでに近づいている。

「分かった！右翼と左翼が先に上れ！」

響夜さんの声で、白鳥さんと村上さんが欄干に上りはじめた。同じく狼森さんと松山さんも反対の欄干に手を掛け、上りはじめた。響夜さんと準一さんはまだ中心で戦闘を行っている。

「響夜！そろそろ限界だ！」

「よし！じゃ、アレ使うぞ」

準一さんが頷き、胸ポケットから丸い球体を取り出した。響夜さんもそれに続いて、同じ物をポケットから取り出し、一斉に奴らに投げつけた。

それはフラッシュバン、別名スタングレナードだった。

二つのフラッシュバンは奴らの前に落ち、光と爆音を出して炸裂した。

寛人が恐る恐る目を開けると、そこには気絶していたり、地面をのた打ち回る奴らの姿があった。その隙を逃さずに響夜さんと準一さんはそれぞれの方向へと走り出した。

「急いで！」

僕は叫んで、同じように人ごみを掻き分けて欄干へと向かった。僕が向かっている方の欄干では既に矢島さんが上りきっていた。

後は僕と響夜さん、準一さんが上れば全員無事に逃げる事が出来る。

僕は足に力を込め、人ごみを掻き分けて、何とか塀までたどり着いた。響夜さんが僕を持ち上げ、先に上らせる。

「隊長！早く！」

狼森さんが叫んで、響夜さんを引きあげた。向こう側では無事準一さんも欄干に上っていた。

全員が上つたのと同時に、駐屯地の方角からヘリがやって来るのを確認できた。そのヘリには対地ミサイルが装備されている。

「気をつける！対地ヘリだ！」

響夜さんの叫びで僕は身を屈めた。

ヘリからミサイルが発射され、感染者と生存者を吹き飛ばした。凶悪なミサイル弾頭は感染者と生存者に平等な死を与えていく。

あっという間に国道は死体や体のパーツで埋め尽くされ、見るに耐えない光景が生まれた。

グロテスクとかそう言うレベルでは表現できない、見ていると吐き気がこみ上げてくるような光景だった。更にその死体を後から来た感染者が貪り始めた。

「……松山、ロープで下に下りるぞ」

国道は橋のようになっていて、ロープを使えば下の安全な場所に下りることが出来た。

先ほどのヘリに続くようにして駐屯地の方角からは何機ものヘリが飛んできた。その内の一機の進路は、この国道の脇を通るようだ。響夜さんがそれを見て、松山さんにロープを手渡した。

「松山、ちょっとロープを頼んだ」

松山さんは響夜さんからロープを受け取った。

響夜さんはヘリがやって来るのを待っているようだ。でも一体、何をするつもりだろう。

ヘリが国道の脇を通る瞬間、響夜さんはあり得ない行動に出た。

そう、五メートルの距離をヘリまで飛び移った。

普通の人間ならあり得ない。僕はおいおい、と突っ込みたくなかったが、その気持ちを飲み込んだ。

「ちょ、隊長！」

響夜さんは見事にヘリに掴まり、そのまま飛んでいった。

「待っている！直ぐに戻る！先に学園に戻ってろ！」

そう言い残し、あり得ない人、橘響夜は飛んでいってしまった。僕らはそれを見送ることしか出来なかった。

逢海寛人 7月10日 午前2時19分 渡良瀬市 市街地（後書き）

ご意見・ご感想をお願いします。

あと、誤字脱字などのご報告もお願いします。

鷹見真一 7月10日 午前2時13分 渡良瀬市 私立律明学園（前書き）

大分、間を空けたくせに短めです。

先ほど出会った響夜たちが駐屯地へ向かってから、小一時間が経過した。

俺は今もバスから荷物を警備室に運び込むという作業を続けていた。

「佐伯、尾上、後はこのでっかいポリタンクを運んどけ。それで終わりだ」

「あいよ」

尾上は気だるそうにポリタンクを校舎内に運んでいった。俺は最後の仕上げにバスで待機している和泉を校舎内に運ぶ事にした。

バスの一番、後ろの席で和泉は大人しく座っていた。流石に女優ということもあって、とても可愛らしい。しかし俺は別に年下が好き、だとかそういう趣味はないので、別に意識することも無かった。

「和泉さん、少し失礼します」

俺は和泉を軽く抱きかかえ、バスから下ろした。

和泉は恥ずかしいのか、頬を紅潮させている。もしかして俺に惚れてる？ などとは思わない。惚れるとした先ほどの隊長さんやらだろう。

俺は抱きかかえたまま、真っ直ぐに生存者がいる教室に向かった。俺がドアを開けると、中では中学生や高校生が緊張感もなく、雑談に花を咲かせていた。

中でも窓際に座っている一人の女性に中高生、おもに男子が固まっている。俺はその女性に見覚えがあった。和泉を驚いたように声

を上げた。

「瑞穂さん！無事だったんですね！」

和泉の声に、瑞穂という女性はこちらを見た。その顔が輝く。

「和泉さん？良かった！無事だったのね！」

その人物は、渡良瀬市の人間なら誰でも知っているご当地女優、長谷川瑞穂だった。同じ女優ということもあって、和泉とも知り合いのようだ。

「先ほどは御免なさい。私、貴方を見捨てたみたいで……」

「いえ、気になさらないで下さい。私だって貴方の立場だったら、逃げていますよ」

「そう？ありがとうございます……」

二人の会話が一通り終わると、再び男子生徒がサインやら、質問の回答を求めて瑞穂の周りに集まってきた。俺は気まじくなり、和泉をその部屋に残して警備室へと向かった。

警備室では佐伯が一人で機器をいじっていた。

中には専門的な知識がないと動かす事が出来ないようなものもあるが、大抵は勘で動かす事が出来るものだ。

「これ見てください。プレイステーションですよ。何で警備室にあるんでしょうかね？」

「さあな。警備員も暇なのかもな」

俺は心の中で給料泥棒め、と呟きながら、警備室のモニターのスイッチを入れた。

モニターに学校の敷地内に設置されたカメラからの映像が写し出された。どのカメラにも奴らの姿は確認出来ない。まだ学園内に侵入している奴はいないようだ。

俺は一通りモニターを監視し、不振な物が見当たらないことを確認し、視線を佐伯に移した。

「もう少し余裕が出来たら、一緒にゲームでもするか？」

「ええ、いいですね。でも僕達、生きて帰れるんでしょうか？」

「信じる。絶対に自分は生きて帰ると信じる」

俺はそう言って、佐伯の肩を叩いた。俺はそのまま警備室を後にし、校内の巡回に向かった。

とても暇な仕事だが、何もしないよりはマシなので、タバコでも吸いながら巡回することにした。いざ、タバコを吸うと、何時も吸うものなのに、何故か美味く感じた。こんな事態になっているからだろうか。

俺は煙を吐き出して、溜息を吐いた。

「てめえ！どこに目えつけて歩いてんだ！？」

「う、御免なさい！」

嫌な会話のやり取りが聞こえた気がした。いや、気のせいではないだろう。

それは人間が一番、関わりたくない会話だ。恐らく、肩をぶつけられた不良生徒の魂の叫びだろう。ぶつかられたらキレルべし、というのが不良のモットーらしい。

俺は面倒だが、止めることにした。一応、警官だからな。二人の高校生の間に入り、制止する。

「君達、今の状況を考えてくれ。喧嘩するより、することがあるんじゃないのか？」

「うるせえな！税金泥棒は黙ってる！」

俺はその言葉にカチンと来たので、静かな声で不良に言った。

「その税金を払っていない君には言われたくないな。せめて、払ってから言ってくれ」

不良は尚も恨めしそうな表情で、俺を睨んだ。怒鳴られていた高校生は既に何処かに逃げてしまったようだ。不良も、絡む相手が居なくなつたせいか、唾を吐くと、立ち去っていった。

俺はその後姿を見つめ、高校時代の自分を思い浮かべていた。

昔、俺にもああいった時代があった。世の中に不満ばかり抱いて、教師や親、友達に八つ当たりばかりしていた。それでも、俺には友達が居なくなる事はなかった。今でも、恵まれていたと思う。

俺が警官になったのは、友達から薦められたからだ。

俺の反抗期が終つた頃、俺は正義感が強くなっていた。不良時代に鍛えた喧嘩の腕で、他の不良を殴つては、他の生徒から感謝されていた。

高校を卒業しても、大学には行かず、直ぐに警官になった。それで今に至るわけだ。

「今思えば、もう俺が不満を抱いていた社会も崩壊しちまったわけか。こんな状況じゃ、もう世界も終わりかもな」

そう思うと、俺は何処か寂しく感じた。大事な物を失ったような気もする。

俺の友達、同僚は無事なのだろうか？そしてこの事態は何故、起こってしまったのだろうか？そのうち、突き止めようと俺は思った。

「そろそろ戻るか。暇になってきた」

俺は呟き、警備室に戻ろうと、身を翻した。そこに丁度、佐伯が走ってくるのが見えた。

「鷹見さん！鷹見さん！皆が戻ってきました！」

皆というのは、例のイケメン隊長率いる特殊部隊のことだろう。それが戻ってきたという事は、脱出手段が見つかったという事が、それとも最悪の事態、置いて行かれたかのどちらかだろう。

俺は頷き、佐伯とともに前庭へと向かった。

鷹見真一 7月10日 午前2時13分 渡良瀬市 私立律明学園（後書き）

ご意見・ご感想、お願いします。

あと、誤字脱字などのご報告もどうぞ。

逢海寛人 7月10日 午前2時58分 渡良瀬市 私立律明学園（前書き）

キャラがまあ大体揃った感じなので、キャラ紹介を作ります。

逢海寛人 7月10日 午前2時58分 渡良瀬市 私立律明学園

僕は疲れ果てて、学園まで戻ってきた。

結局、自衛隊には置いていかれてしまったし、響夜さんはヘリで何処かに行ってしまった。一体、何のために基地まで行ったのか。

僕は本日、三十八回目の溜息を吐いた。

「はあ……もう疲れた……」

「学園はもう目の前だぞ。頑張るんだ」

警官の矢島さんが僕を励ました。僕は愛想笑いを浮かべたが、心は少しも笑っていなかった。

僕はふと、道路脇を見た。そこには奴らに喰い散らかされた無残な死体があった。顔からして、男性だったのだろうが、今はよく見ないと分からないほどの惨状を喫している。

僕はそんな死体を平然と見ている自分に嫌悪感を感じた。

「何だか、もう死体も見慣れましたね」

僕の呟きに、傍を歩いていた準一さんが頷いた。

「確かに。私も今まで沢山の死体を見てきたが、今回の死体は特別にグロテスクだな。喰い散らかされて、原型をとどめていないものが多い」

「そうですね。こんなもの見て、慣れたらもう普通の生活に戻れないような気がします」

「普通の生活、ね。私も妻がいるが、今は無事なのかすら分からない。君の家族は無事なのかね？」

「……家族のことなんてすっかり忘れてました。自分が生き残る事で精一杯ですよ」

僕はそう言い、再び前を見て歩き出した。

出たときと同じように門は閉じていたが、直ぐに開けられるように鍵は掛かっていなかった。準一さんと朝比奈さんと村上さんがその門に手を掛け、横にスライドするように引いた。その間に僕らが門の内側に入る。

全員が入った後で、門を開けた三人が中に入り、反対側から門を閉めた。きちんと鍵も掛ける。

「これでよし、と。響夜は多分へりで来るだろう。それにここから来たとしても、あいつなら門くらい超えられる」

「じゃ、早く行きましょうよ。まだご飯も食べてないですよ」

「俺も腹が減りました」

隊員も口々に喋り始めた。

臨時で指揮を執っている準一さんが全員の様子を見て、言った。

「よし、校内に戻るぞ。飯が待ち遠しい」

全員がそれに賛同した。

僕らは校舎の昇降口に向かい、歩き始めた。昇降口には既に人影が見える。どうやら目を覚ました雅人や鈴、警官の鷹見さんたちがいる。あの女教頭も一緒だ。

「寛人、脱出手段は見つかったのかしら？」

開口一番に鈴が尋ねた。僕は首を横に振る。

「いや、ダメだった。向こうも奴らの数に耐え切れなくなったみたいで、退却していったよ」

「……まあ、予想はしてたわ。それで、数が足りないような気がするの、私の気のせい？」

「気のせいじゃないよ。響夜さんが今、別行動を取っているんだ」

鈴は何も言わずに、頷いた。

雅人は何故か、黙り込んでいる。不安げな表情が読み取れた。

「どうしたんだ？暗い顔して」

「いや、少し考えているんだ。何故、奴らが現れたのかってことを」

「さあな。偶然か、事故か、それとも……」

鈴が続きを呟いた。

「作為的なものか、ね」

「うん。少なくとも、ウィルスである事は間違いないと思う。噛まれたらアウトだよ。特にヘタレは」

雅人が恥ずかしそうに俯いた。僕はそんな雅人を尻目に、先ほど

から聞こえているローター音に気付いた。空の向こうからヘリがー機、向かってきている。

「あれ、響夜さんかな？」

僕は呟いた。他のメンバーもヘリを見る。

一番目がいい準一さんが、ヘリを睨んで呟いた。

「おお、響夜みたいだな。場所を空けるぞ」

準一さんの声で、他の隊員も前庭を空けた。ヘリは大型の軍用ヘリで、両側にミサイルが装備されている。そしてヘリの窓から響夜さんの姿が見えた。

ヘリはゆっくりと着地場所を選び、着陸を開始した。風圧で何人かが転んだのが確認出来る。

ヘリは鼓膜を破るようなローター音とともに、前庭に着陸した。ヘリの扉から響夜さんが出て来た。続いて出て来たのは見知らぬ女性だった。

黒髪が綺麗で、顔立ちがとても整っているその女性は、腰に拳銃を差していた。服はその拳銃に似合わず、青いスカートを着ている。響夜さんが僕らの方に歩いてきた。

「全員、無事に帰還出来たみたいだな。嬉しい知らせと悪い知らせがあるが、どちらから聞きたい？」

「悪い方から頼む」

準一さんが短く言った。響夜さんが話しはじめる。

「まず、脱出手段が断たれた。ここにいる人間を乗せる余裕は向こ

うに無いらしい。当分はここで生活だな」

その言葉に場の全員が頂垂れた。

響夜さんがそんな全員の反応を見て、言った。

「次に嬉しい知らせだ。補給物資がある。このへりに積んである荷物には食料、日用品、武器弾薬、全てが揃っている。これで生活は保障された」

一同の空気が少し和んだ。響夜さんがそんな一同を押すように、付け足した。

「大人の本、もあるみたいだぞ」

その言葉に一同、主に成人男性陣が歓声に沸いた。それとは対比的に女性陣の軽蔑の眼差しが男性陣を見つめていた。

僕もちろんその男性陣の中の一人だったが、手放しには喜べなかった。僕はその大人の本よりも、響夜さんの後ろに居る女性が気になった。どうしてかは分からない。虫の知らせなのか、何となく直感的に気になるのだった。

僕は響夜さんに勇気を振り絞って確かめることにした。

「あの、響夜さん。その後ろの女性は？」

響夜さんは女性の肩に手を乗せ、全員に紹介するように前に押し出した。

「彼女の名前は浅代華恋^{あさしろ かれん}。彼女は御園製薬^{みその}からの派遣員だ」

「御園製薬！？あの有名製薬会社の？」

「そうだ。今回の事態を收拾するためにボランティアとして派遣されたんだ。こう見えても訓練を積んでいて、特殊部隊として働いていた事もあるらしい。これからは我々と行動を共にすることになった」

響夜さんの紹介を受けて、女性が笑顔で自己紹介を始めた。

「浅代です。よろしくお願いします」

その自己紹介ではほとんどの人間が笑顔で迎えたが、響夜さんは後ろで神妙な顔をしていた。もちろん僕もその一人だ。

どうもこの女には裏がある。そう思えて仕方なかった。

神妙な顔をしていた響夜さんだったが、やはり疲れたのか、首を二、三度回して、全員に向けて叫んだ。

「今日はもう寝るぞ！見張りは俺たちが交代でやる。今後の事は明日詳しく説明する！」

前庭に集まっていた生徒や教師はのんびりとした足取りで帰っていった。僕も疲れていたもので、さっさと教室で寝る事にした。

逢海寛人 7月10日 午前2時58分 渡良瀬市 私立律明学園（後書き）

ご意見、ご感想お願いします。

あと、誤字脱字などのご報告もどうぞ。

橘響夜 7月10日 午前7時30分 渡良瀬市 私立律明学園（前書き）

短くてすいません。反省します。

橘響夜 7月10日 午前7時30分 渡良瀬市 私立律明学園

翌朝。

俺は律明学園の高等部の体育館にいた。この学校の体育館は異様に設備が整っていて、公立校の体育館とは比べ物にならなかった。特に備品が豊富で、種目を問わず競技用品が収納されていた。

調子のいい白鳥はバスケットボールでシュート練習をしている。学生時代はバスケット部だったらしく、中々の命中率を誇っている。

俺はそんな白鳥を尻目に、準一と一緒に体育館に生徒を含む生存者全員を集める準備をしていた。

「それにしても何でこんなに金を掛けるかね？」

「そりゃあ、名門私立だからだろ？こんなところに通ってるお坊ちゃまお嬢様の世話をこれからしないといけないんだから、覚悟しておけ」

準一は恨めしそうに、体育館全体を見つめた。

俺は体育館のステージ裏に設けられている放送設備の電源を入れた。試しに基本的な声、あーと発音してみる。中々いい具合だった。

「よし、白鳥！バスケの時間は終わりだ！生徒集める準備しとけ！」

俺は白鳥に向かって叫び、マイクに向き直った。マイクに向かって声優の如く、はきはきと発音する。

「全校生徒、今から高等部体育館にお集まりください。大事な話と、今後のことについてのお知らせがあります」

時間的に生徒全員が起きている確証は無いが、俺たちの基準で言えばもう起きていて当たり前前の時間だ。

生徒たちはそろそろと体育館に入ってきた。寝起きで目を擦っている者や、元気に雑談を交わしている者もいる。やはり何処の学校にも不良系統の生徒はいるらしく髪を染めている青年や耳にピアスをした女子生徒が目につく。

大体の生徒が集まった頃合を見て、俺はマイクを片手にステージに上がった。

「全校生徒の皆さん。今から大切な事項をお知らせします。よく聞いて下さい。まず救助の件ですが、それは絶望的になりました」

生徒たちが頂垂れる。不良生徒は怒鳴り散らし始めた。

「ふざけんなよ！俺たちを救助するのがお前らの役目だろ！？」

俺はその生徒を殴りつけたくなったが、抑えた。

あくまでも俺たちの任務は暴徒の鎮圧と要所の確保であって、民間人の救助ではない。それに今、怒鳴り散らしている不良生徒を助けるためにヘリをわざわざ飛ばすのも馬鹿らしい。

俺も大人なので、その生徒を無視して続けた。

「我々はしばらくの間、この市を出ることが出来ません。少なくとも奴らが動き回っている間は。幸い、ここは防犯システムも整っていて物資も十分にあります。我々はここを拠点とし皆さんを出来る限り保護します。何か質問がありますか？」

生徒たちは隣同士、ざわざわと話し始める。
その内に一人の男子生徒が手を挙げた。

「はい。その君」

「えーっと、救助は絶対に来ないんですか？」

「現状ではそうです。この状況が少しでも改善されれば、望みはあります。現状では救助の望みは残念ながらゼロです」

生徒から落胆の声上がる。

「だから皆さん。出来るだけ、我々にご協力ください。全員が生きて安全地帯にたどり着けるようにこちらでも全力でサポートします。これからは全員で共同生活を送ることになります」

橘響夜 7月10日 午前7時30分 渡良瀬市 私立律明学園（後書き）

ご意見・ご感想をお願いします。

あと、誤字脱字などのご報告もどうぞ。

橘響夜 7月10日 午前8時05分 渡良瀬市 私立律明学園（前書き）

20000アクセスを突破していました！
これも読者の皆様のお陰、感謝感激です！

橘響夜 7月10日 午前8時05分 渡良瀬市 私立律明学園

集会の後、俺たちは生徒に朝食を与えるため、体育館からそう離れていない武道館を食堂に選んだ。理由は広いことと、近くの器具庫にパイプ椅子、折りたたみテーブルがあったこと。そしてもう一つ、家庭科室が近かったからだ。

まず俺たちで食堂に必要なテーブル、椅子を配置し、生徒を座らせた。料理を作るのは俺たちと数人の女子生徒だ。

まず俺は女子生徒の料理の腕に驚かされた。いい意味ではなく、悪い意味でだ。味噌汁を作らせていた訳だが、まず味噌の加減が滅茶苦茶で異様なしよっぱさが俺の口に広がった。

「げっ！！これは……」

準一が性格に合わない声で嗚咽を漏らした。白鳥や狼森達も苦笑いを浮かべている。俺はなるべく少女たちを傷つけない様に、

「まあ、失敗は誰にでもある。お前たちは食器を武道館に運んでくれ。いいな？」

と言った。

女子生徒はプラス思考なのか、笑顔で俺の与えた仕事に従事した。それで結局、料理は俺たちの仕事になったのだった。

「やれやれ、料理なんて久しぶりだな……」

俺は料理器具を前に呟いた。

手料理を作るのは、本当に久しぶりだった。俺が手料理を作るような相手は今まで、妹の麻里くらいだった。いや、麻里にしか作っ

たことが無かった。

「どうした？相手が妹じゃないとやる気が出ないか？」

準一が俺の心情を見透かしたような質問を投げかける。

俺は麻里の顔を思い出し、笑みを浮かべた。

「隊長、笑みが変態チックです……皆にひかれますよ」

俺は松山の冷静な突っ込みで素に戻った。俺の麻里を思い出している時の笑顔はどうしても緩みがちで、変態と誤解されやすい。

俺は場を仕切りなおすように鍋を手にした。

「さあ、飯作るぞ。俺も腹が減った」

「はい」

全員が声を揃えて、返事を返す。

「まあ、日本人らしく和食でいこう。白米と味噌汁、魚でいいんじゃないのか？」

「それはどうかな？」と準一。

「最近の子供は洋食派が絶賛、和食派を追い抜いているらしい。特にこのインテリは洋食の方が好みじゃないのか？」

「まあな。でもな……俺は和食の方が好みなんだ」

俺はあくまで自分の意見を通した。

自分の趣味を人に押し付けるのはどうかと思うが、実際日本人は和食の方が健康にいいと思うので、和食にすることを選んだ。

調理分担は、俺と準一で魚（ちなみに鰯）を焼き、松山、狼森が白米を炊いた。味噌汁は自称味噌汁達人の白鳥が担当することになった。

どうやら結婚するにあたって勉強したらしい。

「それにしても……」

俺は焼いた鰯に醤油をかけ、味付けしながら呟いた。

「男だけの調理場は何故かむさ苦しいな。やはりこういうのは女の仕事だ」

「隊長、今は男女共同参画社会です。家事が出来ない男はダメですよ」

白鳥が新婚らしい発言をする。俺は複雑な顔で鰯に顔を戻した。

俺も麻里が居た頃は家事を率先してやっていた。麻里はあまり身体の強いほうではなかった。だから学校も休みがちで、俺が料理を作る機会も多かった。

でも今は……もう……。

「ああ……隊長……すいません。俺、何かマズいことを……」

白鳥がすまなそうに頭を下げた。俺は笑顔に戻り、

「気にするな。何でもない」

と言って、白鳥に味噌汁から目を離すなよ、と目で伝えた。

俺は真顔で鰯に目を戻した。何故か脳裏に浮かんでくる昔の思い出を思い返していた。

「あらあら、随分とむさ苦しい厨房ですね。こっちまで気が思いやられます」

背後から悪戯っぽい女性の声が響いた。

俺と準一が振り返ると、そこにはセクシーに太腿を露出させたドレスに、エプロンを身に付けた浅代の姿があった。

「ええと、御園製菓の……朝倉さん？」

「浅代です」

浅代は短く訂正し、俺の隣に立った。いやでもはっきりとした胸元の谷間が目飛び込んでくる。

俺は鈍感なので別に氣にとめることもなく浅代の次の行動を見るべく、鰯に味付けをしていた手を引っ込めた。

浅代は調理された食品を見て、若干呆れ気味に首を振った。

「貴方方、育ち盛りの生徒達にこの質素な食事はないでしょう？せめてもう一品くらい欲しいところですね。どれ、私が目玉焼きでも作りますかね」

浅代はフライパンを手にとり、卵を割って調理を開始した。

俺達はそれを呆然と見つめる。浅代は手際よく目玉焼きを作っていくのだった。

「どうしました？眺めているのだったら、手伝ってください」

「お、おお」

俺は間抜けな返事をして、もう一つのフライパンを手にとり同じく調理を開始した。

俺も浅代に負けず劣らず手際よく焼き上げていく。

「あら、中々お上手ですね」

「まあ。俺も昔は作ってやる相手がいたんだよ」

「……妹さん？」

「何故、そう言いきれる？」

浅代はまた悪戯っぽく笑う。

「女の勘ですかね。ま、私はそんな人いません。居ただけマシじゃないですか？」

「……俺、お前とは気が合いそうな気がするよ」

俺も小さい笑みをこぼした。

「新婚みたいですネ。羨ましいですよ」

後ろから松山が率直な感想を漏らしていた。

俺はそれを聞き、顔を紅潮させた。

「お前ら、出来たのを運んでおけ。ここは俺がやっておく」

「はい。隊長命令とあらば」

松山は白鳥を引っ張って、出て行った。

「冷やかしゃがって……」

俺は舌を打ち、呟いた。

俺が別の卵を取って、割ろうとしたときだった。

突然、悲鳴が響いた。食堂にした武道館の方からだ。ただ事ではないような悲鳴に聞こえる。

「準一！」

俺は銃を引っ掴んで、食堂に向かって走っていった。

一体、何が起こったのだろうか。面倒なことじゃないがな……。

橘響夜 7月10日 午前8時05分 渡良瀬市 私立律明学園（後書き）

ご意見・ご感想などお願いします。

あと、誤字脱字などもご報告どうぞ。

逢海寛人 7月10日 午前8時19分 渡良瀬市 私立律明学園

僕は今、食堂で朝食を待ち侘びていた。

僕の隣には寝不足の雅人が覚醒しないまま、呆けた表情で箸を持つている。昨日、夜通しパソコンで情報を集めていたらしい。

鈴は体育会系で早めの就寝を心がけているらしく、何時ものような顔で僕の右隣に座っていた。

僕も昨日は疲れが溜まっていたので、早く寝てしまった。今、思えば見張りくらいは手伝えたのでは、と思う。

「なあ、雅人。いい情報は集まったのか？」

「……何か言ったか？」

「何でもない。後で構わないよ」

僕は雅人の様子を察して、質問を切り上げた。

朝食は何だろう。

僕はそれ位しか考える事が無かった。こんな異常事態だというのは、緊張感がないのが自分でも不思議に思う。段々、一般人から遠ざかってきているという錯覚も覚える。

「おい、寛人。元気ねえな」

そう呼びかけてきたのは怜汰だった。今、起きたらしく、頭には豪快な寝癖がついている。

「お前、さっきの集会に来なかっただろ？」

「ああ、寝過ごした。ま、大体の状況は把握出来てるつもりだぜ」

僕はふうん、といった感じに会釈した。

そこで気付いた事だが、何か向かいのテーブルでもめているようだった。

一人の高校生が気弱そうな眼鏡の恐らく中学生に絡んでいる。理由は知る由もないが、あまり関わりたいことではない。

「おい！テメエ、謝れよ！」

「そ、そんな！貴方が勝手にこぼしたんじゃないですか！？」

どうやら高校生の不良が飲み物をこぼされたらしい。くだらない喧嘩だ。

「ねえ、止めなくていいの？」

鈴が僕の耳元で囁いた。

「まあ、喧嘩になっても勝てないでしょ。手出ししないほうが……」

ガタン、とテーブルが揺れる音が響いた。続いて、食器が床に落ちる音。不良がテーブルをひっくり返したらしい。

僕らが見ると、不良がその中学生を殴っているところだった。女子生徒からは悲鳴が上がる。

「おい！高野！いい加減にしろ！」

そう叫んで、洋一が割って入った。

金髪の不良少年にも見えるが、根は善人なので放っておけないの

だろう。喧嘩っ早い怜汰もそれに参戦するべく、洋一の横に立った。二対一と不利な状況に立たされた高野康平たかのこうへいという不良生徒はポケットからナイフを取り出す。再び生徒からも悲鳴が上がった。

「テメエ、退けよ！怪我すんぞ！」

「ナイフかよ。卑怯な野郎だぜ」

洋一が悪態を吐いた。

僕は状況の重大さを漸く理解した。教師陣は校長室で話し合い中だ。警官たちは校内の巡回中。響夜さん達は家庭科室で調理中で、大人が一人も居ない状況だった。生憎、生徒会長も不在だ。しかし運良く助け舟が入った。

「君達、どうしたんだ？」

武道館の扉から声が聞こえた。

振り向くと響夜さんと準一さんが入ってくるところだった。

「悲鳴が聞こえたから来てみれば……何事だ？」

準一さんが顔を顰めて、様子を窺う。

とりあえず、響夜さんが二組の間に入り、仲裁しようとする。高野はナイフで洋一と怜汰に襲い掛かろうとするが、響夜さんが拳銃を突きつけたのでナイフを下ろした。その間に準一さんが中学生から事情を聞く。

僕も中学生の傍で事情を聞く事にした。

「何があつたんだ？」

準一さんが中学生に尋ねる。

中学生は必死に弁解していた。

「ぼ、僕は何もしてませんよ！向こうが勝手に騒いで、水をこぼして、それでこっちのせいにしたんです！」

「テメエ！余計なこと言うんじゃないよ！」

再び高野がナイフを振り上げる。

響夜さんは高野の足下に発砲した。その銃声で生徒たちは皆、一斉に下がった。流石の高野もこれにはビビったようで、ナイフを取り落とした。

響夜さんは険しい表情で高野の頭に拳銃を突きつけた。

「この中学生の話を聞けば、君が一方的に悪いと思うんだが？」

「だ、黙れよ！」

高野は精一杯の虚勢を張り、ナイフを拾おうとした。響夜さんが拳銃の引き金に手を掛ける。

「両腕を頭上に挙げる。言っておくが、二発目は外すなんて慈愛の心は俺にはないぞ」

静かな声だが、十分な脅しになっていた。高野は悔しそうに歯軋りする。

「それにこれから食事の時間なんだ。この食卓をお前の汚い血で汚したくはないんだが……」

高野はこれでもかという程、顔を歪ませた。そして捨て台詞を吐き出す。

「畜生！覚えてろよ！」

高野はナイフを拾い上げ、武道館から出て行った。

響夜さんは拳銃をホルスターにしまい、何食わぬ顔で両手を二、三度叩いた。

「さあ、飯だ。早く食っちまえよ。今日はやることが山積みだ」

僕はこの時、響夜さんを男としてかつこいいと思った。冷たい態度だが、何処か温かみがある行動を見せる時は、女性なら一目惚れすると思う。

そう思うのは人生の先輩としてであって、別に僕はホモではない。至って普通のノーマルだ。

僕は自分の席に戻り、事態の收拾と同時に運ばれてきた朝食を口に運んだ。これからの生活、僕はどう生きていけばいいのだろうか。

逢海寛人 7月10日 午前8時19分 渡良瀬市 私立律明学園（後書き）

ご意見・ご感想をお願いします。

あと、誤字脱字などのご報告もどうぞ。

橘響夜 7月10日 午前9時00分 渡良瀬市 市街地

俺は今、渡良瀬市の駅前の商店街にいる。

来た理由はもちろん食料などの調達だ。しかし俺はそのことを忘れるほど、不思議な光景を目の当たりにしている。

「どういうことでしょうね？」

「……さあな」

俺は松山の質問に味気なく返した。

昨日、商店街に溢れかえっていた奴らは一匹も居なくなっていた。見事に、神隠しのように消えてしまった。あるのは昨晚、ここで戦っていた警官、自衛隊の死体ばかりだ。何故か、民間人の死体は無かった。恐らく、喰われたのだろう。

「まあ、居ないほうが都合がいい。まずはそのコンビニから始めるかね」

俺は駅前の商店街で、何時も立ち読み客やホームレスが屯うコンビニから食料を拝借するつもりだった。ショーウィンドウが割れている店内は昼間なのに薄暗い。

俺がコンビニに入ろうとすると、後ろから肩を叩かれた。

「どうした？」

俺が振り返ると、準一がコンビニの前に打ち捨てられていた車の陰を指差した。

そこには昨日、散々暴れまわっていた奴らの内の一匹が車のタイ

ヤに持たれかかるようにして座り込んでいた。

「どうやら、居なくなったという訳ではないみたいだな」

「死んでるんですかね」

松山が89式小銃を構えたまま、そいつに近づいた。松山が銃口をそいつの額にぶつけてみた。するとそいつは目を見開き、松山に飛び掛った。

俺は間髪いれずにそいつの頭を撃ち抜く。そいつは地面に仰向けに倒れこんだ。死んだらしい。

「……ビビりました。死んではいないんですね」

「寝てたのか？」

「おいおい響夜。ゾンビって寝るのか？」

準一のもつともな質問に俺は首を傾げて見せた。

「奴らだって一応、脳は活動しているんだ。寝ても不思議じゃない。それに俺はこいつ等の生態を知っているわけじゃないからな」

「この原因はウィルスなんだよな？」

「恐らく、噛まれるとウィルスが血管から体内に入って、感染するんだろう。ウィルスは奴らの唾液の中に含まれているんじゃないかな？」

「まるでゲームだな。もう、バイ ハード見て笑ってられないぞ」

俺は準一の性に合わない冗談に苦笑した。

「俺も昔、バリアン見て笑ってたな」

「隊長、趣味が古すぎますよ」

松山の冷静な突っ込みで、俺は真顔に戻った。

俺は入り口のガラスを割って、店内に入った。入り口が閉まっていたにも関わらず、店内には三匹程のゾンビが蹲っていたり、棚に持たれ掛かっていた。

「準一、奴らを始末してくれ。俺は他にも居ないか、確認してくる」

俺はそう言っ、入り口から雑誌などが置いてある窓際に沿って歩いた。飲料品コーナーには特に異常はない。

昨晚、トイレにも居た事を思い出し、確認したが幸いなことに居なかった。

「クリア。物資を持ち出すぞ。松山はバスをこのコンビニの前まで持ってきてくれ」

俺は入り口で待機していた松山に指示を出し、飲料品を手当たり次第にダンボールに詰め込んだ。雑誌も一応、積んでおく。この状況でコンビニ弁当やおにぎり、パンといった食品は直ぐに傷んでしまっ、て実用性がないので、放置しておいた。もう腐ってしまっ、てるのも多かった。

インスタント食品などは残さず詰め込んだ。日持ちがいいし、何よりも軽くて調理が楽だ。その他にも日持ちが良さそうな食品は全て積み込んだ。

日用品としてはやはり乾電池だ。これもある分は全て回収することにした。

これらをバスに積み込んだ俺達は更に何軒かの雑貨品店を見て回った。大抵の日用品は必需物資などで回収する。しかし生憎、この市には猟銃店などの類は無かった。

「なんか、バスが一杯になりましたね」

松山がバスに詰め込まれた品物を見て、呟いた。

「そうだな。律明学園に戻ろう。もう午後だしな、それにやることはまだ残っている」

俺はバスのアクセルを踏んで、出発した。

人気の無くなった商店街は不思議なほど不気味だった。世界の終わりはこんなものなのかな、俺はそう思いながら、ハンドルを握る手に力をこめた。

橘響夜 7月10日 午前9時00分 渡良瀬市 市街地（後書き）

ご意見・ご感想お願いします。

誤字脱字のご報告もどうぞ。

アイデア、出して欲しいキャラなどありましたらどうぞ。

小室京輔 7月9日 午後8時09分 横浜市 横浜港本牧埠頭（前書き）

総アクセス数28000突破しました！ありがとうございます！！
今回は前日の話です。

小室京輔 7月9日 午後8時09分 横浜市 横浜港本牧埠頭

「P-1からP-20まで、直ちに指定地域まで移動せよ」

本部からの指令を受け、俺達の所属する港湾警備局、第三警護中隊は埠頭の検問へと移動を始めた。

ここ本牧埠頭では現在、避難民の脱出と政府やその近辺の人間の避難が行われている。俺達の任務は外務大臣を警護し、埠頭で待機中の巡視船まで送り届けることだ。

今日の午前から始まったウィルスにより発生した暴徒による暴動は、午後から激しさを増し、日没ごろには警察、自衛隊の投入が始まった。しかし対処が遅れたためか、各地で暴動は激化。收拾がつかなくなり、結果的に殆どの政府関係者は民間人、警察関係者、自衛隊を置き去りにし、安全地帯に避難するという最悪の事態に陥っていた。

一時間程前にはそんな政府首脳を批判するテレビ番組がどの放送局でも流されていた。しかし今は暴徒によって占領されたのか、番組はもう放送されていない。

「小室！巻田！検問だ！要人を保護しろ！！」

中隊長の長瀬平祐警備主任^{ながせへいすけ}長が俺と同僚の巻田徹^{まきたてつ}に向かい叫んだ。検問には多くの民間人が押し寄せており、中にはフェンスを乗り越えてでもこちら側には侵入しようとする者もいた。

「P-10からP-20は民間人を抑えろ！他の奴等は検問を手伝え！」

長瀬警備主任長がそう叫び、率先して民間人の検疫を手伝い始めた。俺達も検問所に立ち、検疫を通過した民間人を誘導に取り掛かった。

検問所では白衣を着た数名の男性が検疫を行っていた。

その検疫方法は皮膚を検査するものだ。感染している人間の皮膚は赤く腫れていることが判明している。他にも風邪のような症状が出ていたり、皮膚の痒み、吐き気を訴える民間人は強制的に観察所に連れて行かれる。

連れて行かれた人間の運命は考えたくもない。

俺は検問所を通ろうとしている二人の親子を呼びとめ、子供の皮膚を検査した。異常はない。続いて母親、こちらも異常はなかった。

「小室、俺達も相当危険なところに居ると思うんだが……」

隣で検疫を手伝う巻田が89式小銃を片手に呟いた。

「ああ、何時民間人が暴徒化するかわからないからな。銃器は手放さないようにしろよ」

「了解。さっさと終らせようぜ」

俺は次々と検問を通る民間人をチェックしていった。

幸いな事に感染者はいない。運が良かったのかも知れない。俺が聞いた噂では他の避難所は感染者が溢れていて、収拾がつかなくなっているらしい。

俺がそんなことを考えていると、直ぐ傍の監視塔にいた警備員が叫んだ。

「来たぞ！外務大臣の車だ！」

俺はフェンスによじ登り、人波の向こうを見た。確かに黒い乗用車がこちらに進んできているのを確認出来た。

「確認した。今から私達で大臣を保護する」

長瀬警備主任長が数人の俺の同僚を連れ、検問所の向こうにフェンスを越えて行った。

「よし、俺達で援護するぞ」

俺は巻田にそう告げ、監視塔に登った。巻田は反対側の監視塔に登り、人波を掻き分けて進んでいく隊長たちを見守った。

外務大臣の乗る黒いリムジンは人波のせいで思うように進めないようで、立ち往生している。それを隊長たち数人が保護している状況が目に入る。

「感染者だ!!」

遠くから悲鳴が上がった。

見ると、リムジンの前方二十メートルほどのところで、一人の男性が細身の女性に喉笛を噛み切られていた。男性が倒れた後、その女性の感染者は数人に噛み付いた。

「しまった！小室、撃て！」

俺はスコープを覗いて、照準をその感染者の頭部に合わせた。そして引き金を引く。鋭い銃声と同時に女の感染者は額に穴が開き、倒れた。

しかし、その女性に噛み殺された男性も直ぐに立ち上がり、暴徒と化した。

「隊長！急いでください！」

俺は叫んで、発砲した。

隊長は外務大臣を警護しながら、混乱の極みの人波を掻き分けてこちらに戻るうとする。突然の感染者の出現に混乱した民間人はあちこちでぶつかり、踏みつけられて負傷している。

遂に一人の高校生らしき男がな長瀬警備主任長の左にいた警備員に襲い掛かった。殴り倒され、銃を奪い取られる。

「隊長！」

巻田が叫んで、民間人に発砲した。しかし長瀬警備主任長は人波に飲み込まれ、見えなくなった。

俺は監視塔を降り、検問の脇の指揮所に走った。既に検疫の警備員は任務を放棄し、撤退を始めていた。フェンスをよじ登る民間人が多数確認出来る。

「巻田！降りろ！撤退するぞ！」

俺はそう叫んで、残っている同僚を掻き集めた。

フェンスを越えようとする民間人に発砲しつつ、船が待機している埠頭まで退却する。

「おい、小室！外務大臣は！？」

「知るかよ！そんなこと言ってる暇、ないだろ！」

「クソッ！任務放棄かよ。役に立たねえ奴等だぜ」

巻田が悪態を吐きつつ、手持ちのスタングレネードを構えた。フエンスと検問を破壊してこちらに来ようとする民間人に向かって投げつける。

「耳塞げ！」

俺達は目を瞑り、耳を指で塞いだ。

強烈な光と同時に爆音が轟き、民間人がフェンスから転げ落ちた。前の方にいた民間人ものた打ち回る。俺は民間人たちを見捨てて逃げ出した。

生き残った隊員は二十人中、十人。後の十人はフェンスの向こうに落ちたり、暴徒に襲われ、行方不明になっている。恐らく生きては居ないだろう。

コンテナの間を待機場所に向かって歩く俺は胸ポケットの通信機を掴んだ。

「こちら、港湾警備局、第三警護中隊、臨時隊長小室京輔です。長瀬隊長が行方不明になり、隊員も半分失いました。撤退許可をお願いします」

「こちら本部、了解した。第二本牧埠頭に最後のフェリー便がある。それに乗って、海上自衛隊と合流しろ。これより貴下の部隊の指揮権は港湾警備局から、海上自衛隊に移される。では健闘を祈る」

俺は通信を切り、再び歩き出した。

遠くからは民間人の悲鳴や、喧騒が聞こえる。現在、関東圏の交通網は全てダウンしている。日没と同時に電車、バスは乗り捨てられたので、民間人の避難は徒歩のみになる。

やはり自衛隊の投入が遅すぎた。あと三時間早く、対処していればこれほどの混乱は免れたかもしれない。過去のことをどうのこう

の言ってもしょうがないが、やはり気になるのは暴動の真っ只中に送り込まれた友人たちだ。俺は自衛隊の経歴があるから、内部に友人がいる。そいつらのことが心配だった。

「……響夜のやつ、渡良瀬市に派遣されたって言ってたけど、大丈夫なのか？」

俺は二年前に出会った友人、橘響夜の姿を思い浮かべた。

イケメンのあいつは何時でも何処でも人気があった。俺とあいつが知り合い、親しくなったのは趣味が共通してトレーディングカードだったからだ。

秋葉原で会って、それから親しくなったのは他の友人には秘密だ。今の俺はとにかくあいつが生きていることを祈るだけだった。

「小室、早く行こうぜ。あいつら、意外と早いぜ」

確かに喧騒の声が近くなっていた。

最後のフェリー便はもう視界に入っている。普段、乗用車を積むところには装甲車と戦車が積まれている。乗っている人間もほとんどが自衛隊、警察関係者だ。

俺はフェリーの搭乗口にいる自衛隊員に身分証明書を見せた。

「確認した。搭乗を許可する」

俺は巻田に会釈し、船に乗り込んだ。

デッキから見る横浜市街はあちこちから火の手が上がっていた。埠頭の倉庫街には既に民間人が押し寄せてきている。

俺達が乗り込んだのと同時に、フェリーの格納庫が閉まり、二人の隊員が乗り込んだ。フェリーのエンジンがかかり、進み始める。

「……地獄ともおさらばだな。助かったぜ」

俺は呟き、生者と死者が群れる地獄を睨んだ。
フェリーは静かに東京湾へと進んでいった。

小室京輔 7月9日 午後8時09分 横浜市 横浜港本牧埠頭（後書き）

ご意見・ご感想をお願いします。
誤字脱字などのご報告もどうぞ。

橘響夜 7月10日 午前11時48分 渡良瀬市 私立律明学園（前書き）

遅めの、あけましておめでとございます。
今年もよろしくお願いします。

橘響夜 7月10日 午前11時48分 渡良瀬市 私立律明学園

物資の調達を終え、学園に帰還した俺は早速、この学園を要塞化
するべく行動を開始した。隊員と生徒の手を借りれば、三日もあれ
ば終ることだろう。

それよりも問題は子供の世話だった。高校生、中学生だけなら良
かったが、小学生も少なからずいるわけだし、それと対比して大人
の人数が圧倒的に少ない。

一応、高校生中学生はそこそこの労働力になるのでいいが、小学生
は正直なところ完全にお荷物状態だった。

見張りも無理だろうし、力仕事も家事手伝いも不可能。雑用程度
しかこなせないためほとんど労働力にはならない。

俺は学園のグラウンドに集められた資材を確認していた。

殆どはホームセンターなどから取って来たもので、一部はこの学
園内の物置などにあった資材だ。俺は鉄板を拾い上げて呟いた。

「これは裏口を塞ぐのに使えるな。後は扉やバリケードの補強か」

学園内は安全だが、未だこの周辺には奴らが溢れている。生存者
を追って行って、居なくなってくれるなどの善意はないようだった。
バリケードを設置する場所は三箇所。まずは大きなこの学校の校
門。二つ目はこの学校では目立たない場所にある裏口。そして最後
の一つはいざという時に避難場所にする体育館の入り口。体育館は
何時避難しても受け入れられるように空けておくことにした。普段
は資材や物資を置くのに使う。食堂は武道館。調理場はもちろん家
庭科室。そして寝るための部屋は各教室を使用することにした。基
本的にどの部屋で寝てもOKになっている。悪く言えば女と寝ても
なんら問題はないという事だ。

もちろん俺はそんなことをする気はないが……。

俺は安全な寝場所を確保するため、まずは校門の補強を行う事にした。手伝いを募ったら、十人ほどの中高生が集まってくれた。協力的なのはいいことだ。

俺はそいつらに資材を持たせて、自分は大きな工具を持ち運んだ。少年たちは重い鉄板や材木を持つと直ぐにへばったが準一や村上のサポートで持ち直すことが出来た。

「ほら、頑張れ。もう少しだぞ」

俺も後ろにいた寛人を応援した。

「そんなこと言っただって……重いものは重いんですよ」

「なら交換してみるか？」

俺は背負っていた大型の工具を寛人に持たせて、自分は寛人の持っていた材木を背負った。普段からキツイ訓練を受けていた俺にとっては軽いもんだった。寛人は案の定、持った途端に尻餅をつく。

「うおっ！！ 何だこれ……僕の背負っていた奴より遥かに重いじゃ……ないか……」

「そりゃそうだ。俺の部隊ではこれを背負って走らされるんだ。お前もやってみるか？」

「遠慮します」

寛人は素直に自分の意見を述べ、材木と工具を交換した。

校門の外には少なからず、奴らがいた。どうやら全員が寝てくれているわけではないようだ。

俺はそんな奴らに唾を吐きかけて、校門に鉄板を打ち付ける作業を開始した。こうして強度を高める。後は学園の塀に材木で見張り台を作って、夜の見張りを楽にする。流石に一晚、細い塀の上はキツイだろう。

作業は夕方までには終る見込みが立っていた。何事も起きなければだが……。

しかし午後一時を回った時、事件は起きた。

事の発端は、俺が三つある見張り台の内の完成した一つに上って、偵察を行った時に起きた。

俺は何時もとは違い、バレットM90を装備していた。

バレットM90は対物狙撃銃。

バレット社が開発したアンチ・マテリアル・ライフルだ。これと同系列のバレットM82がセミオートなのに対し、こちらはボルトアクション式へと変更されている。多くの特殊部隊が使用する幅広い対物狙撃銃で、狙撃が得意な山縣のお気に入り武器となっている。

俺はそれを担いで、見張り台に上ったわけだが、偵察を兼ねて望遠鏡を覗いた。

そこで発見したのが、数百メートルほど先の民家の庭で奴らに追い詰められている女の子だった。腕に武器らしき物はなく、一方的に追い詰められている状態だった。

助け舟を出さなくては確実に死ぬ。それだけは明確だった。

俺は下で残りの見張り台を組み立てている準一と山縣に素早く指

示を出した。

「準一、山縣！生存者だ！俺が救助しに行く、お前らで援護しろ！後、寛人！着いてこい！」

俺は短く叫んで、山縣にバレットM90を投げ渡した。山縣はにやりと笑みを浮かべて、見張り台に上った。準一と寛人は俺と一緒に門から外に飛び出す。

昨日からの経験で分かったのだが、寛人という中学生はかなり有能だった。銃もそこそこ扱え、リーダーシップも持ち合わせている。俺は校門の前の道路を見渡した。奴らは十数匹居る。俺は手持ちの拳銃で手近に居た一匹の頭を撃ち抜いた。準一も89式小銃で三匹を倒した。寛人は昨日、俺が渡した拳銃は使わずに、金属バットで奴らと戦っている。見たところ、近接戦闘でも使えそうだ。

「響夜、俺が殿を務める。お前とその少年であの娘こを助けてくれ。退路は任せる！」

そう言い、準一は発砲を始めた。

俺は頷き、寛人を連れて女の子がいる民家へと走る。途中の奴らは俺達の敵ではなかった。俺は拳銃で前の敵を始末しつつ、寛人が俺の撃ち漏らしを金属バットで始末する。

見事な連係プレーで俺達二人は民家の庭へと向かった。中にいた数匹の奴らが山縣の狙撃で壁際まで吹っ飛んだ。

「よし、俺が援護する。寛人はそいつを連れて行け」

俺は民家へ侵入しようとする奴らを撃ちつつ、寛人に告げた。

黒いロングヘアーの少女は寛人に抱きかかえられて、安心したようだった。

「君は？」

寛人が質問した。その少女は怯えた顔で、

「私、道祖本^{さいもと}絢音^{あやね}。パパとママは何処？はぐれちゃったの……」

少女、絢音はどうやら家族とはぐれてしまったようだ。

家族が生きているというのは考えにくいが、危険な目に遭っている少女を助けられないわけには行かない。俺は子供には弱いのだった。

「寛人、早いところ行くぞ。どうやらあいつらは引き下がってくれる気がないみたいだ」

確かに奴らの数は増えていた。

俺達が入ってきた民家の入り口からの脱出は既に不可能に近い。ならば裏口か、塀を利用するかの一択となる。

「ねえ、お兄ちゃん。あれ、あれ」

「ん？」

少女が指差した先にはかなり大型の梯子があった。それを見た俺はある名案を思いついた。

「そうだ。寛人、その子を下ろして梯子を持て。梯子を隣の家の屋根まで掛けるんだ」

「え？どうしてそんな事を……」

「考えてみる。入り口からは出られない。裏口も安全だという確証はない。そして塀を使うのは危険すぎる。ならば梯子で隣の家の屋根に登って、伝っていくしかないだろう」

「なるほど。でもそれも危険じゃないんですか？」

「確かに。でも、今一番確実なのはそれだ。幾ら準一でもこの数を一人で片付けて、退路を作るのは不可能だろう」

寛人は納得したように頷き、梯子を隣の家に掛けるために絢音を下ろした。そして梯子を伸ばし、隣の家の屋根に慎重に掛ける。

これで後は上って、学園まで戻るだけだ。

「寛人、先に行け。俺はこの子を背負っていくから」

「分かりました。気をつけて」

寛人は梯子を急ぎ足で上り、隣の家の屋根に上がる。俺は絢音を背負い、慎重に上っていった。下では奴らが溢れ返っている。こちらを喰おうとしているのか、しきりに手を伸ばしているが確認できた。

「畜生！喰われてたまるか！」

俺は誰に向かってでもなく叫び、梯子を渡りきった。

渡りきってから絢音を下ろし、屋根に座り込む。学園のほうでは準一と山縣が手を振っているのが、確認出来る。

「帰るまでが遠足って言うだろ。これも同じで、助けた人間を安全地帯まで連れて行くまでが救助だ」

俺は学園に合図を返す寛人にそう告げた。

「そうですね。僕たち、自分だけで精一杯のはずなのに、人助けばっかしてますね」

「仕方ないだろ。そういう性分なんだから」

俺は笑い、すっかり気絶している絢音を横目で見た。

さっさと帰って、見張り台を完成させよう。

俺はそう思い、再び絢音を背負って、学校までの帰還ルートを通っていった。

それにしてもこの子、どうして武器もなしでここまで生きていたんだ？

素朴な疑問が俺の頭の中に残った。

橘響夜 7月10日 午前11時48分 渡良瀬市 私立律明学園（後書き）

ご意見・ご感想をお願いします。
誤字脱字などのご報告もどうぞ。

橘響夜 7月10日 午後5時57分 渡良瀬市 私立律明学園（前書き）

物語内の時間経過が、某執事コメディー並に遅い事に気付きました。
そろそろ時間を先に進めるつもりです。

橘響夜 7月10日 午後5時57分 渡良瀬市 私立律明学園

「やっと作業、終わったのか」

俺は校門とその塀に組み立てられた三つを見つめて、呟いた。

あの少女を助けたはいいのだが、そのお陰で皆の関心が可愛らしい少女にいつてしまい、作業の能率がガクンと下がってしまったのだった。

俺は暮れ行く夕陽が照らすグラウンドを見つめた。

家庭科室では今ごろ、コックである尾上を筆頭とした調理チームが夕飯の支度をしている頃だろう。

今晩は洋食らしい。先ほど松山から聞いた話では、ハンバーグとシチューらしい。たしかにシチューは日持ちするのでいいチョイスだろう。ハンバーグは働いた分のエネルギーをきちんと補充することが出来る。流石はプロのコックの腕前だった。

「俺も早く行って、飯でも食うかな？」

今日の見張りに備えて、早めに夕飯を食い終えようというのが俺の考えだった。

ちなみに見張りには三回交代することになっている。

初めの見張りは全員の就寝から午前一時まで。二回目は一時から四時まで、最後は朝までだ。一応、今日は俺が初めに見張りを行い、次に準一。最後は朝比奈となっている。

今は白鳥か誰かが適当に見張っているだろう。

「さて、食堂に行くか」

俺は踵を返し、武道館へと向かった。

食堂である武道館は避難してきた小中高生で溢れかえっている。その中には、今日修羅場をくぐり抜けてきた寛人の姿も見える。どうやら一緒に避難してきた四人の仲間と雑談を楽しんでいる様だった。ギャルっぽい女子高校生は仲間内でぎゃあぎゃあ騒いでいる。もちろん、左手には携帯電話を忘れていない。大人しく長いすに座って漫画を読んでいる女子生徒は俗に言う腐女子なのだろうか。

俺は空いている席に腰掛けた。ここは大人の席らしく、子供は座っていない。俺の隣の席が一つ空いているので、誰かが座るのだろうか。

そんなことを考えていると、

「あの、橘さん……ですよね？」

若干、幼い声が俺の耳に届いた。声の主は、俺がワクチンを打って感染を防いだ少女、島原和泉だった。

「ああ、そうだが。何か用か？」

俺はいきなりのことだったので、素っ気無く返事を返した。

「ええと、まだ助けてもらったお礼をちゃんとしてないと思うので

……、改めてお礼をしたいなあって」

「いいんだよ。そんなこと。俺は当然のことをしたまでだ」

「でも、貴方に会っていなかったら……今、私はここにいません」

俺は健気に、そして真剣な瞳でそう訴えかけてくる少女を見て、ますます麻里と重ね合わせてしまった。明るい所で見れば、より麻里に似て見える。正直に言えば、生き写しだ。

「まあ、次からは噛まれないようにしろよ。何度もワクチンは使えないからな」

「はい。気をつけます」

そう言って和泉は笑った。

俺も笑顔で返し、そこである事実気付く。食堂の一部の男子の視線が明らかに自分に集まっている。そして明らかな殺意が籠っていた。

俺は軽く咳払いし、和泉を食事の席へと促した。和泉は大して気分を害した風もなく、自分の席へと戻っていった。

思春期の男子が多いここでは、ああいったことは控えたほうがいいのだろう。面倒な事態だけは避けたい。別に俺は教師でも何でもないので、ここの男女の間で不純異性交遊があったとしても、別に何とも思わないが教師は色々と五月蠅いのではないだろうか。何よりも十八歳未満は犯罪だし。

「面倒になったねえ。俺の学生時代はそこまで厳しくはなかったん

だがなあ」

独り言がつい、口から漏れる。

そんなことを考えているうちに、給仕と思わしき女子生徒がハンバーグとシチューを俺の前に置いてくれた。俺は少女に笑顔で礼を述べた。

何故かその少女は急に顔を赤らめ、走っていつてしまった。なにかまずい事でもしただろうか。

「ま、そんな事よりも飯だな。さっさと食って、さっさと見張りでもするか」

俺は箸を手に持ち、ハンバーグを口に運んだ。

「あら、お一人ですか？」

不意に女性の声が響く。

俺が横を向くと、空いていた隣の席に浅代が座った。美しい笑みを浮かべ、俺のことを興味深げに見ている。

「ああ、浅代か。どうした？お前こそ一人か？」

「ふふ、私はあまり異性と接しませんので。私は橘さんのような紳士的な方とゆっくりとお話するのが、一番の趣味なんですよ」

俺も自然と笑みがこぼれる。

「俺を紳士的と言つか。いいか、男は皆、羊の皮を被った狼なんだから。覚えとけ。まあ、俺は違うかな」

冷静に、冗談を交えて言葉を返す。

不謹慎かも知れないが、こういった状況での穏やかな会話は結構、楽しかった。状況が状況だから、誰かと雑談をすると気が楽だというのもある。

なんか楽しんでるじゃねえか。

俺は心の中で呟いた。

確かに俺たちは明日死ぬ可能性もある。それでもこんなに笑えるのは、ある意味一種の才能かも知れない。或いは、本当に気が狂ったかだ。

しかしまだ俺はマトモだ。

「ねえ、ワクチンを見せてくださる？」

心の中で葛藤をしていた俺は、浅代の質問で脳の思考を中断された。

「ワクチン？ああ、まだ三個残ってるが……、何故だ？」

「実は本社から、ワクチンの研究を命じられているのです。それでサンプルを一つ頂きたいのですが……」

そう言った浅代の顔には意味ありげな笑みが浮かんでいる。

「まあ、一つくらいならいいか。くれてやる。ただ、無駄遣いはするなよ」

「努力しますね」

俺は冗談交じりの浅代の言葉を聞き流しながら、ワクチンを渡した。そして最後のハンバーグの欠片を口へと運んだ。そして立ち上がる。

「じゃ、俺は見張りに行く。出来たら頼みことがあるのだが……」

「構いませんが、どうぞ」

「ああ、和泉とかは男子生徒から離して寝かせてくれ。一応、トラブルは避けたいからな。俺は男女のドロドロした問題は御免だ」

「分かりました。そのように皆に伝えておきます」

「頼んだ」

俺は89式小銃を掴み、屋上へと向かった。

屋上では白鳥が暗視スコープ片手に見張り番をしていた。

俺は近づき、話し掛ける。

「よお、白鳥。どうだ？」

白鳥は首を横に振った。

「特に以上はありませんよ。奴らは町中を徘徊しています。昨日と違って、獲物が少ないみたいですけどね」

「そうか。生存者は？」

「まだ明かりが灯っている建物がいくつかありますが、外に出てこないんで、生きてるかどうかは分かりませんよ」

そこで白鳥は思い出したように、話し始めた。

「そうでした。実はここから一キロほどの地点にある警察署なんです、どうやら軍用のハンビーがあるんですよ」

「マジか？それは大発見だぞ」

「ええ。だから明日にでも取りに行ったほうがいいんじゃないですかね？」

俺は無言で頷き、暗視スコープを白鳥から受け取った。

「さあ、見張りは交代だ。飯でも食って来い。さっさと寝ちまえよ」

「お言葉に甘えて」

白鳥はそそくさと校舎内に入っていった。

俺は夜だというに蒸し暑い風を受けて、服の襟を広げた。こんな状況だというに、星は綺麗だった。

橘響夜 7月10日 午後5時57分 渡良瀬市 私立律明学園（後書き）

ご意見・ご感想をお願いします。
誤字脱字などのご報告もどうぞ。

逢海寛人 7月11日 午前10時32分 渡良瀬市 私立律明学園（前書き）

次回からは少し時間が進みます。
何時までもゆっくりやってると、グダグダになるので。

逢海寛人 7月11日 午前10時32分 渡良瀬市 私立律明学園

翌日になって、僕と雅人と洋一は響夜さんの許可を取ってから市街地へと向かった。もちろん、護衛として響夜さんは着いて来てくれることになったが、昨日と比べて大分奴らの数も減っていたために気分は楽だった。かと言って、油断も出来ないのだが……。

僕らが市街地に行く理由は、着替えの調達だ。

二日間、同じ学生服を着ているだけあって、今の僕らは相当汗臭い。自分では中々気付かないものだが、今日の朝食時に鈴に指摘され、気にするようになった。着替えを調達出来たら、学生服は洗うつもりだ。本当だったら、クリーニングにでも出すところだが、生憎この状況では不可能だ。

僕は懷に一昨日、響夜さんから貰った拳銃をしまいこみ、リュックを背負った。ちなみにリュックはこの学園の備品を拝借させてもらった。雅人はリュック以外は何も持たず、洋一は鉄パイプを所持している。洋一は近接武器の方が使いやすいらしい。まあ、僕はどちらでもいいけど。

「準備出来たんなら、行くぞ」

洋一が僕の背中に声を掛けた。

「ああ、行こう。いい服が見つかるといいな」

「まあな。それよりも俺はノートパソコンを手に入れたいんだけどな」

雅人が呟いた。

律明学園のパソコンも使えるのだが、やはり雅人にはノートパソコンのほうがあっているらしい。デスクトップは不便だそうだ。

現在、テレビでの放送は既に途切れている。

初日で、首都圏の放送局は全て壊滅したらしく、衛星放送によるラジオか、時々外国のニュース番組が写る。電力については、責任感溢れる警官や従業員が発電所を拠点にしているらしく、供給が続いている。しかし何時まで持つかは分からないので、響夜さんは電力を貯蓄することを考えている。

地獄のような状況ではあるが、生活面ではそこまで苦労していないのが現状だった。まだ今は……。

僕らが門を出ると、響夜さんが既に89式小銃を背負って待っていた。

「響夜さんも用事があるんですか？」

僕が尋ねると、響夜さんは頷いた。

「ああ。渡良瀬市警に乗り捨てられた軍用車両があるんだ。ハンビっていつんだけど、お前らは知らないよな？」

「名前を聞いた事はありません。それがあれば、何か利点が生まれる

んですか？」

「まあ、物資の輸送や、多少のゾンビどもを蹴散らすことくらいは出来るな。それに一昨日、受け取った物資の中にはとんでもない代物もあつた……」

「とんでもない代物？なんだそれ」

洋一が興味が無さそうな表情で聞き返した。

響夜さんは穏やかな笑みを浮かべて、その代物の名前を口にした。

「ミニガンだよ。分かるだろ？」

「ミニガン！？それって……」

「ああ、その気になれば奴らを一掃出来るかもしれない武器、いや兵器だ」

僕はその言葉を噛み締めた。

今はまだ、奴らに殺される心配はない。安全と言えるのかは分からないが、少なくとも死とは直面しない場所で寝起きをしている。武器も食料も仲間も居て、寂しい事や苦しいこともない。

ただそれが何時まで続くか、その保障は何処にもないのだった。何時かはこの地獄に飲み込まれるか、それとも安全地帯に逃げおおせるか、二つに一つだ。でも安全地帯が安全だという保障も何処にもない。安全地帯にも奴らが押し寄せてくるかもしれない。

それとも、奴らを殲滅するか。もしくはさっさと死ぬかだ。

僕は改めて、現状の厳しさを思い知ったのだった。

僕はまず、手近な衣料品店、ユニ　ロに向かった。

昨日と一昨日の混乱で生き残っていた人も、市街地で物資の回収を始めているらしく、数人の人影を見つけた。もちろんこちらには響夜さんがいて、武器を持っているので近づいてくることはなかった。

物資を強奪される可能性もあるので、人間とはいえ、油断できないのだった。

幸いなことに、店内はあまり荒らされておらず、自分の好みの衣料品を選べそうだった。

「これなんか、どうだろうか？」

僕は地味なトレーナーを拝借している雅人に自分の好みの服を見せた。

「いいセンスだ。けどな、この状況を考えようぜ」

僕の選んだ服は、今から彼女とラブラブデートに行く気か！？と突っ込みたくなるほどの流行のファッションだった。白いワイシャツに、黒の革ジャン、黒いジーンズを履いて腰からチエーンを下げている僕のファッションは、似合う似合わないの問題以前に状況を読めていなかった。

生きるか死ぬかのサバイバルをしている人間が、世界の終りに直面している中でファッションを気にするのは中々のKYにしか出来ないだろう。

雅人の目はそう語っていた。

「まあ、いいんじゃない。人の好みってことで」

中々の不良ファッションをチョイスした洋一が言った。

「お前、ホントに見た感じは不良だな。外見で人を判断しちゃ駄目ってのはマジみたいだな」

雅人の失礼な感想に、洋一はふて腐れた表情で返した。

「俺は不良じゃねえよ。ただ、世の中に不満を抱いてるだけだ。それにだっせえ格好してたら、女にモテねえし。お前、女に惚れられたことねえだろ？」

「もちろん！俺の彼女は、二次元限定！画面の向こうにしかないんだ！世界が終っても、この考えだけは曲げない！」

雅人は堂々とキモオタ宣言をした。

正直、僕もかなりひいた瞬間だ。

コイツはオタクだが、まさかそこまで決意が固いとは思っていなかった。

「　　　そういや、響夜さんは？」

僕は一人で熱くなっている雅人を軽い気持ちでスルーし、洋一に尋ねた。

「ああ、ハンビー取って来てから、迎えに来るって」

「そうなんだ。じゃあ、そろそろ出るかな」

「なあ、聞いてくれよ。俺の心に愛があれば、ゾンビだって萌やし尽くせるぜ！だって俺は……」

僕は雅人を殴りつけた。それも拳銃の銃床でだ。もちろん死なない程度だが、雅人は床に伸びた。

「こいつ、病院に連れて行ったほうがいいんじゃない？楽しい病院に」

「ああ、出来たらそうしたいよ。この事態が終息したら、病院に即連行するつもりだ」

僕は雅人を背負い、店を出ることにした。

店から出ると、爽やかな午前太陽が僕の顔を照らした。道路の向こうから、ハンビーが走ってくるが見えた。何時も賑やかな商店街は奇妙な沈黙に支配され、街自体が死んでいた。

「当分、ここで暮らすことになりそうだな」

僕は決意した。

絶対に生き残ることを。そして鈴や皆を守り抜く事を。

逢海寛人 7月11日 午前10時32分 渡良瀬市 私立律明学園（後書き）

ご意見・ご感想をお願いします。
誤字脱字などのご報告もどうぞ。

橘響夜 8月13日 午前10時44分 渡良瀬市 私立律明学園（前書き）

本当は活動休止中なのですが、奇跡的に時間が余ったので無事更新です。

久しぶりということで、何時もよりもボリュームは多めですので、お楽しみください。恐らく次の更新は三月中旬ごろになるとと思いますが、もしかしたら奇跡が起こり、更新できる可能性も無きにしも非ずです。

橘響夜 8月13日 午前10時44分 渡良瀬市 私立律明学園

「それで、結果を報告してくれ」

俺は今、冷房の効いた警備室で週刊雑誌（発刊日は一月前）を暇つぶし程度に読んでいた。そこに白鳥と松山が俺が頼んだ仕事の結果の報告をしに来たのが今の現状だ。

「単刀直入に言わせて貰います。生ものは、ほぼ全滅でした」

「それは想定範囲内だ。ご苦労様だったな」

俺は軽い笑顔で、真夏の重労働をこなした二人を労った。

この二人に任せた仕事は、この学校に蓄えられている食糧や水の残数確認だ。食糧庫は学園の食堂の厨房に定めてあり、大型の冷蔵庫も十個ほどあるので、最適だったのだ。

「……まあ、それに関しては対策を打たないと拙い。ああ、非常に拙い」

俺は舌を打ち、床に雑誌を乱暴に投げた。

もちろん、こうなったのには訳がある。

昨日、久しぶりに雨が降ったのだった。これでもかというほどに暴風と雷雨が吹き荒れたのだった。補強中の見張り台が壊れただけでも一大事だというのに、一発の雷が校舎に直撃して、一晚中停電になった時には思わず、「不幸だー！」と叫びそうになっていた。

まあしかし、幾ら自分の不運を呪っても失った食糧は返らないの

で、俺は嘆くことを早々に止めていた。

「しかし、久々に雨が降ったと思ったらロクなことにならないな。しかも翌日はこの晴れ様だ。湿度も気温も高けりゃ、腐るのも無理ないだろう」

俺は椅子から立ち上がり、呟いた。

昔、理科の授業で露点やら水蒸気の授業を受けたことがあるが、実感したのは初めてだった。腐った食糧はというと、この時期の食中毒は怖いとっていた近所のオバさんの意見を尊重し、全部朝の内に焼却してしまった。

「で、どうします？食糧の調達は最優先事項だと思うんですが？」

松山が額から汗を垂らしながら、聞いてくる。

「ああ、まったく。というか、簡単に言っな。この状況にこの時期だ、どうやって食糧を集めるんだ？」

「それは隊長の考えることでは？俺たちは隊長の命令に従うだけですから」

「……っ！そうかそうか、ならお前たちは俺が死ねと言ったら死ぬんだな？自分で考えるということはないんだな？」

「隊長、例えば大げさ過ぎです。このままだと、とても幼稚な会話になると思うんですが？」

うわーっ、と俺は頭を掻き毟る。

暑いのも苛々するし、食糧が少なくて俺達の朝飯が無かった事も、

部下に簡単に自分の意見をあしらわれたことも苛々する。

「ちょっと待て。さっきからここの気温が上がってきていないか？」

「ん？ああ、はい。電力の節約ということで、五分前から冷房を切って貰ってます」

俺はもう喋る気力も無くし、もう一度椅子に座り込んだ。

（普通、このクソ暑い日に冷房を切る馬鹿がどこの世界にいるんだ？ あ、ここにいたか）

俺はノリツツコミのコントを心の中で行い、とりあえず現状を立て直すための行動に移ることにした。ここでうだうだしても、きつと状況は変わらない。動かなくては。

俺はもう一度、気を入れなおして椅子から立ち上がった。

「会議を行うぞ。代表を集める、三十分以内だ」

現在、この学園の生徒会室が俺たちの活動の中心になっている。

幾らなんでも俺達だけで学園の避難民全員を統率することは無理なので、元職員やリーダーシップのある中学生や高校生には下っ端の方を任せることにしている。

俺達と渡良瀬市警の三人は主に見張りや偵察、物資調達の護衛を担当し、学園の生徒会メンバーには校内の自警などをやらせている。食事に関しては、自称一流のコック（腕は本当にいい）、尾上がいるので質では困っていない。むしろ量の方が最近は問題になりつつ

ある。小学生は正直に言えばお荷物だが、捨てる事もできない（人道的に）ので、学園内の一角に専用のスペースを作り、今までと大差ない生活を送らせている。高校生、中学生は以外と勤勉で、校内の補強や食糧調達の手伝いをしてくれることが多い。それでも不良や粋がったギャルは一切働かないのだが、今の所は邪魔をしてこないで放置している。もちろん、問題を起こしたら即刻、射殺か、奴らの餌にするつもりだ。昨日の停電が原因で食糧の七割が死滅したので、そろそろ働いたものだけ（小学生は除く）に食事券なるものを与える配給制を導入しようかと検討している。まあそんな事をしたら、あの絶対人権主義者の女教頭が黙っていないと思うが。

そして今、この生徒会室には俺と準一、中学生を仕切らせている寛人とその友人らしき眼鏡の少年と、高校生の代表、生徒会長の阿久津さんと女教頭、後は市警の鷹見と矢島が集合している。

これから話し合う議題は一つ。

現在、この学園の水面下で起きている深刻な食糧問題についてだ。この問題は一般の生徒には知らされていない。恐らく、今回の会議で初めて耳にする人間もいるだろう。それに、このことを公表しない理由はあくまでパニックを防ぐためなので、このことを知った人間には絶対に他言しないことを義務付けている。

俺は集まった首脳の面々を見回して、心の中で思った。

（これじゃあ、まるで戦時中の情報操作をしていた軍部と変わらないよな）

現在、生徒から食糧の在庫などの情報公開は求められていないので心配無用だが、もし不良が”知る権利”を行使してきてくだらないことをほざき始めたらどうするかな、とくだらないことを考えながら会議を始めるために暑さで思い口を開いた。

「集まってくれてありがとう。現在、出席していない者はいるか？」

俺の問いかけに、阿久津さんが、

「はい。現在、洋一君が食糧庫の警備をしているため、出席していません。あとは全員いるかと」

「そうか。なら問題はないな。これから君たちに伝えることは非常に大事で、広がると収拾が不可能になるような原子爆弾級の情報だ。くれぐれも一般生徒には漏らさないように、特に不良とかな」

「え？一体、何なんですか？そこまで危険なことが起こったんですか？」

寛人が不安の色を顔に浮かべながら、俺に尋ねる。

「ああ、学園に備蓄してある食糧の七割が死滅してしまったんだ、うん」

「ああ、そうなんですか　　って、ええっ!？」

素っ頓狂な声を上げて寛人が机を勢いよく叩く。あまりの勢いに、その事実を聞いた寛人よりも周りのメンバーの方が驚いてしまっていた。

「詳しく説明するとだな、昨晚の嵐の落雷を覚えているか？あれで学園の蓄電器とその他諸々の機材が焦げて、使い物にならなくなってしまったんだ。それに今日の快晴が重なり、湿度は急上昇。生ものは完全に腐敗した生ごみと化してしまった」

「腐ってても無いよりマシじゃねえの？」

矢島が警棒で背中を掻きながら、俺に尋ねる。

「いや。食中毒は避けたいんだ。病院も何もないこの状況で集団食中毒は御免だからな。この中で、病人のゲロの始末を請け負ってでも食いたい奴はいるか？」

「ぼ、僕は遠慮します」

「……俺も」

口々に皆はそれを拒否した。

俺だって、そんな汚れ仕事は御免だった。食中毒で死にかけた病人の面倒を見るのは、何処かの無免許で継ぎ接ぎの名医がやればいい事だろう。

「じゃあ、どうします？」

阿久津さんが俺に尋ねてきた。書類仕事が得意そうで万能に見える彼女も、流石に食糧の調達をどうするのか？ なんていう知識はないらしい。

「俺の意見としては、この近くにまだ食糧が残っていて尚且つ運搬が容易な場所からの調達が望ましいんだ。そういう場所がこの市にあればいいんだが……」

「そんなに切羽詰っているんですか？」

「そうだ。ここにいる全員の食糧を賄ったとして、あと一週間が限界だ」

その言葉に、動揺が一同に広がった。

無理も無い。この炎天下の季節に、食糧が尽きるという事は死人が出るということも覚悟しなくてはいけない。

俺は追い討ちを掛けるように、悲観的な事実をもう一つ告げた。

「それと。水も停電で浄水機能が停止したから、限りがあるんだ。冷蔵庫と浄水器の復旧には停電した箇所を修復する事が必要だ。だから俺はここでチームを二つに分けたい。校内の復旧チームと、物資の調達チームだ」

もちろん俺は食糧調達チームだ。精密機器の取り扱いが俺の部下の方が上手い。

復旧チームは機械の取り扱いが上手いらしい寛人の友人の雅人という少年を筆頭に白鳥や松山が得意なので、任命された。女教頭も校内で仕切りたらしく、居残りチームを選んだ。食糧調達チームには俺と準一、寛人に阿久津さんと矢島が参加する事になった。あくまで最初の目的は、調達できる場所を探してそこに食糧がある事を確認することであって、大規模な輸送部隊を編成する必要はない。チーム編成の後、復旧チームは俺達と別れて蓄電器の修理に向かった。俺は他の四人と一緒に残り、調達場所をリストアップすることにした。

まず、阿久津さんが地図を見て、平凡な意見を出した。

「この近くのデパートはどうですか？まだ食糧も残っているかもしれません」

「そうだな。でも、人が居なくなつたデパートは冷蔵機能が生きている保障はない。それに大きい建物は人目につきやすいから、もう持ち運ばれている可能性もある。それと……」

俺は間を空けて、一番不安だつたことを話した。

「デパートには他のグループが居座っている可能性もある。俺達のように普通の人間だつたらいいが、もし危険な人間が集団でそこを根城にしていた場合は、特に君みたいな可愛い女の子が危険かも知れない」

「ふえっ！？そ、そんな可愛いなんて！」

「あ、すまない。気に障つたか？」

俺は阿久津さんが顔を真っ赤にして、変な声を出したので、何か気に障ることを言ってしまったのかと思い、素直に詫びた。

「え？そんなことじゃないですよ！うん、ホントに！」

「……？ならいいんだが」

俺は阿久津さんの様子を少し不信に思ったが、なにやら触れてはいけない気もしたので、スルーした。しかし俺とは対照的に、他の三人は俺を道端で酔っ払って寝ている中年オヤジを見るかのような軽蔑の眼差しを向けていた。

「な、何だ？俺は何か拙いことでも言つたのか？」

「響夜、少し鈍感だぞ？」

「俺も同意」

「僕もです」

「……？意味が分からないんだが……」

俺は周りの視線がどんどん冷たくなっていくのを感じ、避雷針の如く話題を切り出した。

「それでだ、デパートは危険だと思うんだがどうだ？」

四人は頷いた。

矢島はならず者が屯うデパートを想像したのか、机をガンガンと叩いた。

「チクショウ。もし友好的じゃない奴らが居た場合、強硬手段を使わないと駄目になるのか。となると、何処かの兵器会社の社長が開発したような、無敵で空も飛べるパワードスーツが必要だな」

「アイ ンマンか。ま、そういうことになるだろう」

結局、俺の意見が尊重されたのか、デパートという案は廃案になった。

同時に会議の流れもストップした。この街は小さい訳ではないのだが、大きなデパートがそう多い訳ではない。俺が知る限りでは、廃案になったデパートと町外れのショッピングモールしか思いつかない。

しかしショッピングモールは地理的に厳しい。まず距離がかなり、学園から離れているので、食糧があったとしても、運ぶのにリスク

が大きい。そもそも、ショッピングモールまでの道程を大型のバスやハンビーが通れるとも限らない。打ち捨てられた車に塞がれている可能性大だ。となると考えられる場所はやはりデパートしかないのだが……。

「うーん、いい案は無いものだな。俺よ準一はこの街の住人じゃないから、知識も乏しいし……」

「俺も市警に務めていたけどよ、思いつかねえわ」

「私も実家は市外ですから、あまり詳しくは……」

当然、四人の視線は唯一のここの住人、逢海寛人に集まる。

「ええ？僕ですか？いきなり言われても少し困るっていうか……
…っ！」

寛人は突然、何か思いついたように身体を硬直させた。
俺は突然の豹変に、首を傾げながら尋ねてみる。

「どうした？何か思いついたか？」

寛人は不安そうな表情で、

「いえ……、商業施設じゃなくてもいいなら、一つ心当たりがあるんですけど……」

「言ってみなさい。どんな些細なことでも構わないよ」

準一が寛人を諭す。寛人はゆっくりと頷き、椅子から立ち上がった

た。そして窓際に移動する。

生徒会室がある東校舎は一番端なので、窓からは渡良瀬市の内陸側にある小さな山が見える。正しくは天然の山を開発して、団地にしようとした計画の名残なのだが。

今、生徒会室の窓から見える山には、中腹に大きな屋敷が見える。見た目だけで何処かの成金の精一杯の見栄だ、と分かってしまうような一品が存在していた。

「で、あの山がどうかしたのか？」

「はい。正確には山じゃなくて、屋敷の方が重要なんですけどね」

寛人は四人に言い聞かせるように注釈し、もう一度山の方に視線を移した。

「えーと、それですね。あの屋敷は僕の学校の生徒の家なんです。それにお金持ちだし、食糧とかもきつとあると思いますよ」

ふん、と俺は頷いた。

確かにデパートよりも安全だし、距離的にも安全的にも悪くはない。

「よし、その案を採用する」

「あー、やっぱり駄目ですか……って、ええ！マジですか!？」

「ああ。お前の単純な思考が俺達の盲点を突いたんだ。お手柄だぞ」

「褒めてるんだか、貶してるんだか分かりません」

「もちろん、褒め言葉だ。胸を張れ」

俺は自分の発言のフォロをしつつ、立ち上がった。それから全員に伝えるように声を張り上げる。

「出発は明日の朝からだ！全員、準備を整えろ！」

四人が頷いたのを確認し、俺はその場を後にしようとした。しかしそれと同時に、ガチャリと生徒会室の扉が開かれた。まるで見計らったかのように。なにやらエプロン姿で、お盆を抱えて入ってきたのは和泉だった。

「ん？どうした？」

俺は突然の来訪者に戸惑いながらも、落ち着いた声で尋ねた。和泉は恥ずかしそうに、自分の持っていたお盆を差し出す。

「あ、ああ、あの！これ、さっき作ったんですけど、良かったら食べてください！」

お盆の上には五人分に切り分けられた卵の厚焼きが盛られている。見た目は一流シェフの料理のようだ。

「お、気を利かすね、お嬢ちゃん」

矢島が下卑ているが、感じのいい笑みを浮かべて褒めた。俺は笑顔でそれを受け取り、

「ありがとう。美味しく頂くよ」

「は、はい！良かったら、後で感想をお願いします！」

そう言って、和泉は部屋を後にした。

俺は卵の厚焼きを手に、もう一度椅子に座った。テーブルの上に置いたそれはとても美味しそうな雰囲気醸し出している。

「じゃ、冷めないうちに有難く頂こう」

俺は手で厚焼きを掴み取った。四人もそれに習い、手に取る。

俺は結構、期待しながら口へ放り込んだ。和泉が麻里に似ているという事もあり、かなり嬉しかった。口にする前から、蕩けるような味は容易に想像できる。そしてそれは現実になる、

と思っていた。

厚焼きを口に放り込んで、一噛みした瞬間。言葉では形容しがたい味が口一杯に広がった。

目の前が激しくゆれ、平衡感覚を失う。これが脳震盪なのか？という錯覚まで覚えた程だ。失礼かもしれないが、これは卵の厚焼きではなかった。

（俺、死ぬのか？）

最後に心の中で呟き、

俺はこの罰ゲームじばいぐからログアウトした。

橘響夜 8月13日 午前10時44分 渡良瀬市 私立律明学園（後書き）

ご意見・ご感想をお待ちしております。
誤字・脱字などのご報告もどうぞ。

逢海寛人 8月14日 午前8時01分 渡良瀬市 私立律明学園（前書き）

お待たせいたしました、約一ヶ月ぶりの更新です。

最近はどう忙しすぎるので、学園都市に妹達シスターズじゃなくて、弟達ブラザーズの生産でも頼みたいくらいです。

逢海寛人 8月14日 午前8時01分 渡良瀬市 私立律明学園

「うう……、頭が割れそうなんですけど……」

僕は背中にリュックを背負い、律明学園の校門の傍に立っていた。周りでは響夜さんや準一さん、阿久津さんと矢島さんが僕と同じように、銃や荷物を持って、出発の準備をしている。僕らはこれから、僕の友人の屋敷に向かうのだった。でも、全員が頭痛に悩まされている。

理由はというと、もちろん昨日食した卵の厚焼きが原因である。

あの後、生徒会室で卒倒している僕ら五人を発見し、保健室まで運んでくれたのは浅代さんや雅人たちだった。原因は熱中症や脱水症状など、色々と挙げられたがのだが、和泉さんの名誉を傷つけないと響夜さんが言ったので、敢えて本当の原因は伏せて、熱中症ということにしていた。まあ、それでも五人が同時に熱中症になるというのは変な話だが……。

それでも何とか回復することが出来たので僕は今、ここに居る。

今回ばかりは自分の自己修復能力の高さと、鋼鉄の胃袋に感謝すべきだろう。でも、多分次は無い。だから、今度からはあの和泉^{ロモ}さんの料理だけは絶対に口にしないようにしよう。

出発前の僕らの傍には、見送りとして雅人や鈴、実質的に留守を任される女教頭の刈谷さんが居た。

雅人が眠そうに欠伸をする僕の腰にある拳銃を見て、予想通りの台詞を吐いた。

「おい、寛人。そんな装備で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない、と言いたいところだが、一番イイのを頼む」

その返事が聞けて満足したのか、雅人は満面の笑みを浮かべた。この二コ厨はもう駄目だと思うが、そこは敢えてツツコミを入れたいのが大人というものだ。

僕は笑顔で立ち去っていった雅人を横目で見送り、響夜さんを見た。今、響夜さんは、肩に掛けていた小銃の最終チェックをしていた。なにやら同じ部屋で寝泊りしている高校生があ的小銃を見て興奮していた記憶があるが、僕自身は軍オタと呼ばれる属性ではないので意味は分からなかった。

（まあ、昨日見せたこの拳銃ですら大興奮だったもんな。しつこく撃たせてくれて強請^{ねだ}ってきたのも

正直ウザかったんだよな。やっぱ、あの種類の人間は分からないよ）

心の中で呟いてみる。

僕は背負っていたリュックを背負いなおし、ピシピシと自分の頬を叩いて気を引き締めた。

「よし、出発するぞ」

響夜さんが僕らを見て、眠そうに出発を宣言する。

今回の調査には途中までハンビーを使用することになっている。目的地の屋敷までは坂道を登らなくてはいけないのだが、もし屋敷に奴らが大量に巢食っていた場合、車ではエンジン音で誘き寄せてしまう恐れがある。それを避けるためにも車での移動は途中まで、

ということにしている。

まあ、正直に言わせてもらえば、僕は坂道を自分の足で登るのは好きじゃない。僕が今朝、それを響夜さんに言ったら、

「そうかそうか。なら、車で行って、奴らに囲まれてみるという貴重な人生経験を積んでみるか？」

と若干、ふざけた反応が返ってきたので、笑って誤魔化した。でも僕は瞬時に理解した。響夜さんは本気でやりかねない。

ハンビーの運転は免許を持っている準一さんがすることになった。助手席には響夜さんが乗り、後ろには僕と阿久津さんと矢島さんが乗ることになった。

「俺、初めて軍用車両に乗ったんだけどな。意外と乗り心地がいいじゃねえか」

乗って早々、矢島さんが感想を漏らした。

「まあ、普通の軽トラとあんまり変わりませんね。あくまで僕の感性ですけど……」

「いやいや。軽トラよか、シートの座り心地がいいぞ。親父が農家だったから、軽トラはしょっちゅう乗ってたんだ」

「確かに軽トラは長距離走行には向いてませんよね。長距離は大型担当みたいな感じですから。軍用車両は悪路での長距離走行に適し

っているんじゃないですか ってか、阿久津さんも喋ってくだ
さいよ」

僕は会話を打ち切り、何時も鈴や雅人にツッコむような感覚で阿
久津さんの肩を叩いてみる。すると……、

「ひゃっ!」

何だか僕が猥褻行為を仕掛けたのかと誤解されそうな嬌声が返っ
てきた。前の席に座る二人に聞こえなかったことが幸いだ。

「いやいや!そんな反応されても僕が困りますっ!」

僕も勢いで押し切ろうと大声で言ってみる。ちなみにこれは僕の
習性ともいえる行為だ。この僕、逢海寛人という人間は状況が悪く
なるとテンションで乗り切ることがしょっちゅうなのだ。ってか誰
に説明してんだ?

ふと、隣の阿久津さんを見ていれば、僕のテンションに何やらド
ン引きしている模様。

「あ、ああ……ご、御免なさい!今、考えてみれば男の人と話すこ
とがあんまり無かったんで……、ちょっと驚いたっていうか……そ
の、えーっと……」

かなり緊張しているのか、その態度には明らかな動揺が浮かんで
いる。僕ってそんなに女の子に話し掛けると、違和感が沸く存在な
のかなー、と少し不安にもなった。

でも、男は冒険なんだよ!と目を爛々と輝かせて宣言した雅人
を思い出し、諦めずに話し掛けてみることにした。

「えっと、えーっと、阿久津さんは映画とか見ます？」

「へ？わ、私？うーん、そうね。私は恋愛ものが好みかな」

「へえ、そうなんですか！僕はSFが好きなんですよ！」

「そ、それは面白そうね！」

「でしょでしょ！」

とりあえずノリで会話をしてみた。何だか、今の会話を録音して後で聞いたらとても恥ずかしい気がする。それだけ僕は吹っ切れてみた。

しかし……。

「……………」

「……………」

会話は、続かなかった。

お互いが顔を背け合って、会話と呼べるものは成立しない。理由は簡単で、どちらも不器用だからだ。

「何だお前らあー、顔赤くさせて黙り込みやがって。こっちは気まずいんですけど？」

目の前で僕と阿久津さんのやり取りを聞いていた矢島さんが茶々を入れた。

きつと矢島さんなりの会話を和ませるための気遣いだったのだと思う。でも、僕の頭脳はこの状況を打開できるような策を考え出せ

る程磨き上げられてはいなかった。

「そ、そうだ！これから行く所なんですけどね、とってもお金持ちなお嬢様の家なんですよ。それで、それが僕の同級生でしてね。物凄い高飛車な子なんですよ」

僕は何とか話のネタを作り、持ちかけてみる。

「ああ、いるよな、そういう高飛車なご令嬢様が。俺、マジで苦手なタイプだわ」

「それって、私も含まれるんですか？」

突然、阿久津さんは尋ねてきた。

その顔は真剣そのもので、何か途轍もない不安を浮かべている。

「あ、何か気を悪くしてしまいましたか？」

僕は地雷を踏んでしまったのかと、自然に口調が丁寧になる。普段は調子のいい矢島さんも黙り込んでしまっていた。

阿久津さんは冷え切ってしまった空気を気まづく思ったのか、

「あ、あははは！御免なさい！ちょっと嫌なこと、思い出しちゃって！」

でも、僕は真面目だった。

「阿久津さん、無理しなくていいですから、僕たちで良かったら話してくれませんか？」

これで良かったのだろうか？ 少し不安になる。

もしかしたら、人の傷を大きくしてしまうかもしれない言葉のはずだ。でも、聞かずにはいられなかった。僕は普段から、調子のいい人間だと言われる。でも、今は生きているかも分からない親からこつとも言われた。”お前は人の痛みが分かる人間だ”と。だからこそ、と僕は思う。

阿久津さんはこれから僕たちと暮らしていくかも知れない大事な仲間だ。もし何気ない会話で自分の、人に公開したくないような過去の事を思い出させてしまうかも知れない。

だったら、それは解決してあげたい。

人間としての善意だとか、そういうのではなく、”自分勝手な正義感”として。

僕の思いは通じたのか分からない。けれども、阿久津さんは重い口を開いてくれた。

「皆さんに悪いかもしれませんが……、お金持ちの子供って、どう思います？」

「どうって、まあ高飛車な人も多いですね。何というか、成金的な？」

「はい。実は私の実家は結構、有名な家柄だったんです。そのせいか、昔からよく近所の子に虐められたりしてたんです。それで、もしかしたら皆さんにとって不快な言動とかがあるかも知れません……」

阿久津さんは正直に打ち明けてくれた。

「もしかして、それで実家から遠い律明学園に通っているんですか

「？」

「はい」

「何だ、そんな事だったんだね。阿久津さんは全然、普通の人だよ。胸を張って皆と接していても、大丈夫だと思うよ」

「……ありがとうございます。貴方みたいに正直な人にそう言われると、何だか気分が明るくなります」

僕はあまり大きな地雷じゃなかった事に安心して、胸を撫で下ろした。

「ラブコメってるみたいだが、緊急事態発生だ。全員、降りる準備をしろ」

束の間の安心を味わっていた僕の耳に突然、響夜さんの声が響いた。その顔は何時になく真剣だ。

「何かトラブルでも？」

僕は気の抜け切った声で尋ねた。響夜さんは意味ありげな笑顔を浮かべ、上を指差した。上には重機関銃が設置されている。そこから外を覗いて見る、という事らしい。

「……？」

僕は顔に？マークを浮かべながら、顔を出してみる。

「……………」

……ああ」

僕らが進んでいた道は住宅街の中の一本道だったらしい。そしてその一本道を塞ぐかのごとく……、

数百体の奴らがびっしりと道を塞いでいる。しかもエンジン音に誘われて、こちらに近づきつつあるようだ。

コーナーするほど道幅は広くない。つまり……、

「完全に追い詰められてしまいました。どうしましょう？」

僕は更に気の抜けた声を出すことしか出来なかった。

逢海寛人 8月14日 午前8時01分 渡良瀬市 私立律明学園（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。
誤字脱字などのご報告もどうぞ。

橘響夜 8月14日 午前9時17分 渡良瀬市 市街地（前書き）

一本満足バーって一本で満足出来ませんよね？

橘響夜 8月14日 午前9時17分 渡良瀬市 市街地

「響夜、これは拙い状況だと思う」

「俺も同意見だよ」

俺は素っ気無い返事を運転席にいる準一に返した。

現在、住宅街の一本道を大量の奴らが塞いでいる。その数は数百近いだろう。しかもこの道幅では、ユーターンも望めない。

「うわああ！響夜さん！どうするんですか！？」

寛人の奴もパニックっている。キャラなど関係無しに絶叫している。俺は、この状況での絶叫は奴らと呼び寄せるだけだと思うのだが、どうせもう気付かれている訳だし、気にしないことにした。

「あー、突っ切るのは拙いだろうな」

後ろで矢島が呟いた。

俺も頷く。この状況で奴らの中心を突っ走れば、間違いなく車は止まる。数が多いとかそういったことではなく、轢き殺した奴らの肉とかがタイヤに挟まってだ。もちろんハンビーが停車してしまえば、俺達はGAME OVERだ。

恐らく、奴らに引きずり出されて、身体を食い尽くされる。それだけは避けたいものだ。

「選択肢としては、バックで戻る事だな。だがしかし、ここまで来て戻るというのも惜しい。どうするか？」

俺は腰を浮かせ、ハンビーのドアを開けて、外に出た。

「おい、何処に行くつもりだ？」

準一が俺に尋ねてきたが、俺は答えなかった。

俺は奴らが後、十五メートル程まで迫っている中、気にせず後ろに視線を移した。目当ての場所は……、あった。

ハンビーの十メートル程後ろの民家にはシャッター付きのガレージがある。そして、ガレージのシャッターは開いている状態だ。

俺はよし、と笑みを浮かべて、急いで助手席まで戻った。時間はあまり無い。

「準一！後ろにガレージ見えるだろ。あそこにバックで停めろ。あ、もちろん中にだぞ」

「任せろ」

準一が短く呟いて、アクセルを踏んだ。

ハンビーはエンジンを吹かせ、後ろに走り始めようとする。

「それと寛人。顔を引っ込めないと、晒し首状態になるぞ」

要するに、首が切断されるという事である。

寛人は身震いし、直ぐに身体を引っ込めた。それに続いて、ハンビー内に衝撃が走る。ハンビーがギアをバックに変更して、アクセルを全開にしたせいだ。

「しっかり掴まってる！」

俺は後ろの三人にむかって叫んだ。

それとほぼ同時にハンビーは準一の華麗な運転テクニックにより、車庫へと一直線に向かう。もちろんバックのまま。

このまま順調に行けば良かったのだがしかし……、

ハンビーは何故か車庫の三メートルほど前で急停車してしまった。

「あ？クソッ！ヤバイぞ！」

エンストらしい。準一さんが必死にキーを回すが、エンジンがかかる様子はない。

しかも、盛大にエンジンの音を響かせたせいで、奴らは確実にこちらに向かってくるスピードをあげている。

「準一！動かせそうか？」

「……っ！分からない！」

俺は必死に準一がキーを回す様子を見ていたが、まったく動き出

す気配がしない。生き残れたら、修理する必要があるそうだ。

しかし修理の前に、何とかこの窮地から抜け出さなくてはいい。

そのための手段は、一つ思い浮かんだ。

「よし。俺が車庫までコイツを押していく」

「……は？」

全員が口を揃えて声を出した。

「いやいや、それは幾らなんでも冗談ですよね？」

「いや、結構本気だが何か？」

俺はそれだけ言い、外に飛び出した。後ろから誰かが叫んでいた気がしたが、無視する。時間はあまり残されてはいない。

俺は急いでハンビーの前方に向かい、手を車体に掛けた。

「ようし。行くぞおおおおおおお！！」

ハンビーは掛け声と共に、後ろに動き始めた。中にいる他の四人が目丸くしているが気にしない。そのまま、俺は数メートルの距離を一気に詰め、ガレージにハンビーを押し込んだ。

完全にハンビーがガレージに入ったところで、俺はシャッターを思い切り閉めた。それとほぼ同時に、外の奴らがシャッターに押し

寄せたらしく、ガンガンとシャッターを叩く音が薄暗いガレージ内に響いた。

「……ふう、間一髪ってトコだな」

俺は車内で呆然としている四人を見て、親指で合図する。その合図で我に返った準一が後ろの三人を促す。後ろの三人もハンビーから降り、これで全員がハンビーから降りた。

「さて。全員無事だったし、どうやってここからあの屋敷まで向かうかを考えようか」

「あ、さっきの力技は敢えてスルーの方向なんですね」

「もちろんだ。何も驚く事はないからな」

かなりの疑問を顔に浮かべている寛人だったが、事態が事態なのでこれ以上質問してくることは無かった。まあ、確かに腰が少々痛い。

それよりも、問題はこれからどうするかだ。

「まず、状況としては最悪だ。外の数からして、あいつ等を何とかしないとここを出ようにも出れない。で、今からそのための策を考えるわけだが……」

俺はハンビーの横で、極度の緊張で疲れきった表情を浮かべている面々にさり気無く話題を振ってみる。

「ああー、助けを呼ぶ？」

矢島がやる気のない声で案を出してきた。

「それは無理っぽい。無線機使って、仲間を呼べば余計に被害が出るかもしれない。だから基本的に俺達だけで何とかしよう」

「じゃあ、あいつ等の注意を誰かが引き寄せて、その隙にハンビーで出発っていうのはどうですか？」

「相変わらず寛人の考えはストレートだな。じゃあ、逆に質問だ。引き寄せる役は誰がやるんだ？ソイツはどうやって逃げる？」

「は、ハンビーで逃げるんじゃないですか？」

「馬鹿。ハンビーはもう出発した後だろ。ハンビーで行くなら、引き寄せる役は俺達の目指しているのとは逆方向に奴らを引き寄せないと駄目だ。すると自然に囹役の奴は取り残される」

「あ、あの、なら徒歩で行くのはどうでしょうか？」

「それが一番いい考えだが、この人数を連れてしかもこの面子で行くのは不安だな。阿久津さんの案になった場合、恐らく堀の上を歩く事になる。この中で絶対に落ちないという自信がある奴はいるか？」

「俺はいけるぜ。体育会系だしな」

「ぼ、僕も多分」

「私は少し不安かも……、平均台とか苦手ですし」

「一人でも不安な奴が居るなら、この案は無理だ。不安は緊張を生むし、何より落ちたら助けられない。かといって、ここに阿久津さんだけ残していくも不安だ。たとえ準一が阿久津さんのお守として残るとしても、ここで二つに分かれることには賛成しかねるな」

俺は個々の意見を冷静に分析した。

その結果がこれだ。何一つ、打開策といえるものは見つからない。もしこのまま打開策が見つからなければ、籠城という最低の選択肢しかなくなる。持ってきた食糧も二日分しかないし、長期戦には耐えられない。かといって、学園のメンバーを動かせば犠牲が出る可能性が大だ。

「うわあ。もしかして万策尽きたって感じですかね？」

「困りましたね。私もいい案は思い浮かびません」

「俺もだ。すまない、響夜」

「チクシヨウ。こんなことになるんなら、腹いっぱい飯を食っとくんだっただぜ。くそー、焼肉食いてー」

俺も溜息しか吐けない。

この場での最善策は皆で焼肉をやることなのかもしれない。そうすれば、多分元気が出る。

「でもな、肉がないと焼肉には……っ！ー！」

俺は言葉を切った。

焼肉。この単語が頭に引つ掛かったからだ。焼肉には肉が必要だ。そして火。この二つの材料と、今の状況を照らし合わせてみる。

（そうだ。いい事思いついた。もっと早く気がつくべきだったか？）

俺は顔に笑みを浮かべ、四人の顔を見た。全員が、この状況で笑っている俺を化け物でも見るかのような目で睨んでいる。

「矢島、焼肉やりたいか？」

「ああ。もちろんだぜ」

「じゃ、始めよう。特大の焼肉パーティだ。矢島と準一で、この家の灯油持つて来い。全部だ、全部。阿久津さんと寛人はガレージの前で騒いでる奴等を集めておけ」

「は、はいっ！」

四人は俺の妙に気合の入った声に乗せられて、力強い返事を返した。

まず、矢島と準一は灯油を求め、ガレージから出て行った。目的地は家の裏のタンクだ。阿久津さんと寛人もガレージ内に置いてあった梯子を持って、ガレージの屋根に上がっていった。恐らく、屋根でも叩いて大きな音を出す作戦だろう。

出て行く間際、寛人が振り向いて尋ねてきた。

「あの、響夜さん。どうして奴らを集めるんですか？」

「何故って。パーティってのは、人が大勢居た方が楽しいだろうよ？」

途轍もなく可笑しな答えだが、寛人は首を傾げながらもガレージを後にした。

一人になった俺はこっそりエロ本を出したり……、では無く、パーティの下準備に取り掛かった。

二十分程で、もう一度全員がガレージ内に集合した。

全員が準一達の後ろには赤いポリタンクが五個ほど置いてある。随分とこの家には灯油があったようだ。阿久津さんと寛人も一度、奴らを引き寄せる作業を中断して戻ってきた。

全員揃ったのを確認してから、俺は口を開いた。

「ご苦労さん。それで、これからパーティを始めたいと思う。ゲストは外の皆さんだ。詳細については、屋根に上がってから説明しようか」

俺は満面の笑みでそう告げ、四人をガレージの外へと促した。

ガレージは道路側だけではなく、もちろん家の庭にも通じている。俺達はまず、庭に出てから梯子を使って屋根へと移動することになる。順番は、俺が最後尾に行く、と言ったら阿久津さんが顔を真っ

赤にして反対したので、没になった。何故だ？ と理由を聞いたら何故だか三人から白い目で見られる羽目になった。女心というものはいくぶん分らない。

結局、順番は俺が先頭で次に準一、寛人、矢島、阿久津さんになった。もう一度言うが、俺は阿久津さんが最後尾というのは危ないと思う。

登るうえで、一番の苦行だったのは灯油のポリタンクだ。五個を持って登るのは不可能なので、ロープで結んで、上から引っ張りあげることになった。

何とか屋根まで登りきった俺達は、道路に面した場所から下を見下ろした。それに気付いたのか、奴らもこちらを喰らおうと手を伸ばしてきている。今更ながら、鳥肌が立った。

俺は唾を吐いて、

「胸糞悪い光景だな。さつさと終らせよう。準一、ポリタンクの中の灯油をさつき拾ったバケツに入れる。あいつ等に満遍なくかけて差し上げる」

準一は黙ってバケツに灯油を注ぎ、それをぶちまけ始めた。

灯油は集まってきた数百匹の奴らにバシャバシャと降り注いだ。ポリタンク五個分の灯油を撒き終えると、俺は止めの最終兵器を懐から取り出した。

「それは何ですか？」

寛人は俺の右手に握られている瓶を見つめている。

「ん？火炎瓶」

俺は微笑んで答えた。そして火炎瓶を構え、盛大に宣言する。

「さあ！焼肉パーティを始めようか。食えないけど、喰われないからマシだろう？」

俺は思い切り、奴らの真ん中に火炎瓶を投げ込んだ。空中でくるくると回転しながら、火炎瓶は真ん中に居たワイシャツを着ている奴の脳天に直撃し、盛大に中身をぶちまけた。そして引火する。

撒いていた灯油のお陰で、炎はあっという間に奴らに燃え移り、焼肉パーティが始まった。

ただし感想は、

「あいつ等って、燃えると臭いんだな……」

だった。

他の四人も目の前で燃えている奴らを見て、言葉を失っている。まあ、元は人間だったのだから仕方がないだろう。

しかし、今は燃焼中の奴らに目を奪われている場合ではない。

「おい、見惚れてないで行くぞ。時間が無い」

俺は四人を急かした。

「あ、ああ。そうだな。すまない、俺も少し目を奪われていたかも知れない。……酷い光景だったからな」

「俺達はこんなことで悲しんでいられない。生き残りたいのならな」

短く会話し、俺達は梯子を降りた。

手早く荷物をまとめ、ハンビーに四人が乗り込む。俺は最後まで車外でシャッターを開ける係になった。

準一が運転席でキーを差し込み、俺が下準備の合間に直しておいたハンビーがエンジンを吹かした。俺はそれを確認して、シャッターを開いた。それと同時に熱気が押し寄せる。ハンビーは耐熱性が備わっているので、この程度なら耐えられる。ハンビーは俺がシャッターを開いている間に、外へと勢いよく飛び出していった。

俺もそれを確認してから、外へと素早く移動した。燃え盛る死体の中を進むのは気が進まなかったが、通らなくては出られないので、燃える死体を踏みながら火の手がないところまで移動した。

俺が炎から抜け出したところで、ハンビーの窓から準一が顔を出した。

「スリル満点だったな。お疲れ様」

「……死体を踏みながら歩くのはもう御免だな」

俺は適当に切り返し、俺達が学園からやって来た方角の道。これから目指すのとは正反対の道を見つめた。

「はあ、ツイてないんだよな」

俺は半ば諦めの溜息を吐いた。

俺の視線の先には、今焼いた奴らの三分の一ほどの奴らが集まってきた。あいつ等はどこまでもついてくるだろう。

「よし。俺が時間を稼ぐから、後で回収してくれ。頼んだぞ！」

俺は準一に向かって叫び、89式小銃を構えた。そして突撃を掛ける。

後ろで何だか準一が叫んでいるが、今の俺の宣言に対しての異存は認めない。ふと、振り返ればハンビーは俺とは反対方向に去っていくところだった。

「相変わらず聞き分けのいい奴だな。ま、だからこそ親友っていうんだろうが」

俺は不敵な笑みを浮かべて、前方の敵を睨んだ。

「虐殺ステージの始まりを宣言させてもらっぞ」

俺は容赦なく、89式小銃を撃ち放った。

橘響夜 8月14日 午前9時17分 渡良瀬市 市街地（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。
誤字・脱字などのご報告もどうぞ。

伊東準一 8月14日 午前10時21分 渡良瀬市 市街地（前書き）

毎度ながらの亀更新です。

今回の主人公の視点を書いたのは初めてですので、誤字などあるかもしれません。

伊東準一 8月14日 午前10時21分 渡良瀬市 市街地

俺は清々しい笑顔を向けてきた響夜に残った奴らの始末を任せ、アクセル全開で突っ走っていた。時々、飛び出してくる奴らはよく小学校でやる交通安全教室とやらの『君』人形のように跳ね飛ばして進む。

ほら、車に轢かれる事故とかを演出してくれるあのマネキンだ。

「あの、準一さん？」

「ん？」

俺は後ろからおずおずと声を掛けてきた寛人君に声だけで会釈した。

「響夜さんは置いていつでも大丈夫だったんですか？」

「うん？ アイツは大丈夫だよ。多分今ごろ、火炎瓶を自分の周りの放置車両に投げつけて燃え盛る炎の中に立って、『演出ゴクロー』とか叫んでるから」

「？ どういう意味ですか？」

「あ。分からないならいいんだ」

やれやれ。俺にもどうやら響夜の趣味が移ってしまったらしい。この前も響夜が貸してくれたラノベとかいうジャンルの本を読んだ

ら、不覚にも面白いと思ってしまった。

「……せめて順子だけには見つからないようにしないと……」

「順子って誰ですか？」

「シークレットだよ」

「途轍もなく気になります！」

俺は無視してハンドルを握る手に力を込めた。

ちなみに順子は俺の嫁の名前だ。……もちろん、この場合の『嫁』
というのは現実での話だ。俺はそこまで腐っていない。

「で、本当に大丈夫ですか？響夜さんが強いってのは分かりますけど、幾らなんでもあの数じゃ……」

「ま、苦戦したとしても生きて還ってくるさ。アイツは、何時でも必ず生還する奴だよ」

「……でも危険なことには変わりないですよ？幾ら最強でも、無敵じゃ無いんですよ。そこに隙が……」

「君、さっきの言葉の意味が分かってたんじゃないか？」

「いえ。今のは雅人の野郎が何時も五月蠅く言ってた事ですよ？」

「あ、そう。とにかく、アイツは還ってくる」

そうですか、と寛人君は座席に座りなおした。

「それにな。アイツは子供が好きだから、君たちの事も守ろうとしたいんだろうと思う」

俺の言葉に今度は阿久津さんが肩をビクッ！と震わせた。

「それはもしかして幼女が大好きで止まないというあの人種ロリコンなんですか？」

「ええ！？それは驚きです！」

「俺も初耳だ。あのイケメンはそういう趣味なのかよ」

どう弁解すればいいのかわからない。

一度生まれた誤解を解くというのは、異世界に飛ばされた伝説の使い魔が元の世界に帰ることくらい難しい事だと思う。

でもここで弁解して誤解を解かないと、後で響夜が（社会的な意味で）死ぬ。

「あ、ああ……えーと、君たち」

三人が俺の声で同時にこちらを見る。

「響夜は幼女なんて目もくれずに、妹を本気で愛していたぞ？」

「うげっ！ロリコンの上にシスコンかよ！」

「それはちょっと……………」

「僕はもうノーコメントでお願いします」

愛しているの意味を間違われた……………のか？

もう、面倒臭くなったので最終兵器を使うことにした。

「詳しくは本人に聞けばいいんじゃないか？」

最終兵器は響夜に丸投げすることだ。

「「そうします（させてもらっぜ）」」

うん。解決した。

俺はハンビーで坂道を登る。

後ろではなにやら雑談が始まっているが、会話自体は全く噛み合っていない。テンションだけで話している感じがする。

俺ももう間近に迫っている屋敷の門を目指し、自然にウォーミングで聞いている歌を口ずさむ。

「Looking ! The blitz loop this
planet to search way Only my
RAILGUN can shoot it 今すぐ」

「あ、その歌知ってます！雅人が何時も口ずさんでました」

「ふーん。多分、ソイツも響夜と同じ人種なのかもな」

「いえ、アイツは巨乳大好きな変態以外の何者でもありませんよ？」

それが正常なのかも知れない。あれを無駄な脂肪だという人間もいるようだが、俺はそうでないと信じ続けたい。

そんな下品でくだらない雑談を交わしている間に、ハンビーは目的地である屋敷の正門の前に到着した。当然、門は閉まっているため、降車してから開ける必要がある。

俺はハンビーから降り、門に手を掛ける。やはり鍵はきちんと掛かっているようだ。俺は想定内だったので、普通に拳銃で鍵ごと破壊させてもらった。銃は便利だな。

開門は流石に一人では出来ない。俺は響夜みたいな化け物じゃあ無いんだ。一番、筋肉モリモリな矢島さんに手伝って貰い、何とか開けることが出来た。

ハンビーで屋敷の敷地内を進むが、やはり人は見当たらない。死体すらも見られないので、恐らく避難した後ではないのだろうか。

屋敷の外周を回ってみて、大方の地理は理解出来た。正門から見えていたのは一番大きな本館で、その裏にもう三棟ある。恐らくここで働いていた人間たちの宿泊棟や事務などを行う棟だろう。

……使用人がいる家って凄いだろ。住んだ事もない俺にでも、この屋敷の暮らしの豪華さは容易に想像できた。

庭に噴水があるし花畑もあることから、日曜の午後にはお茶会で

もしてたんじゃないだろうか。

俺はハンビーを噴水広場に停め、

「よし、着いた。降りる準備をしたほうがいいよ」

後ろの三人に促した。

俺も手持ちの火器、89式小銃を点検し、ハンビーから降りた。俺の今の武装は89式小銃と9mm拳銃、それと手榴弾が二つだ。火炎瓶は響夜が持つていつてしまった。俺達が所属していた部隊は銃器などが統制されていなかったので、好きなやつを配給してもらっていた。たしか響夜はベネリM3など、自衛隊では規格外の物も持つていたと思う。

後部座席から降りてきた三人もそれぞれの武装に身を包んでいる。寛人君は俺と同じ9mm拳銃を腰に差し、矢島さんは警察で正式に採用されているタイプのものを。阿久津さんは角材だ。

阿久津さんは緊張した面持ちで、角材で素振りをしている。矢島さんはボクシングのシャドーをやっていた。奴らにボクシングが通ずるのかどうかは分からないが、彼の腕力があれば並大抵の奴らの頭蓋骨くらい、砕ける気がする。

寛人君はというと……、なぜか屋敷の方を睨んでいる。しかもかなり真剣な顔で。

「どうした？何か気になることでも？」

俺は疑問に思い、尋ねた。寛人君は我に返ったようにこちらを見

て笑顔を見せる。

「あ、いえ。少し気になっただけです」

「何がだい？」

「視線、です。あそこの窓に人影が見えた気がして、ずっと睨んでたら視線を感じたんですよ」

「？ 生存者かな？可能性は高いと思うぞ。この規模の屋敷には自家発電のシステムも備わっているはずだ。食糧を保管する冷蔵庫だけなら一ヶ月くらいもつだろう」

「そうだといいですね。僕の腐れ縁の友人かもしれませんし」

寛人君は昔を思い出しているような口調で言った。

「どんな関係だったんだい？」

俺もつい尋ねてしまう。

「いえ……、言うならば主人と下僕ですかね。まあ、細かい話は後にしませんか？」

「あ、ああ」

なんだか聞いてはいけないような関係の気がした。SM趣味でもあるお嬢様だったのだろうか？ おつといけない、想像してしまった。

俺は脳内に浮かんだ鞭で叩かれる寛人君にし かす こみtainな衣装に身を包んだお嬢様を追い払い、四人で歩調を揃え、屋敷へと歩を進めた。

屋敷内はやっぱり豪華な作りだった。

シャンデリアなどはもう普通で、壁にはゴッホとかいう画家の絵も飾ってあった。どうやら本物らしい。レプリカだが、モナ・リザもあった。描いた人は……誰だか忘れてしまった。

こ はゾ ビですか？魔装少女の変身呪文なら覚えているんだが。

とにかく豪華なので、俺達は美術館でも見学するような感覚で屋敷の本館を探索した。二階まではそれでよかったのだが、三階からは俺と阿久津さんのグループと寛人君と矢島さんのグループに分かれて探索することになった。

この本館は五階建てに見えていたのだが、実際は六階まであることが落ちていた見取り図から判明している。二つに分かれたグループは六階に通じる大階段で合流することになっている。

三階だが、この階は特に際立ったものは無かった。必要性はないのだが、BL漫画が落ちていたのが気になった。阿久津さんは全く気付かなかったのだが、俺は異様に気になった。一体、誰の趣味なのだろう？

四階には初めてともいえるものがあった。

それは損壊していない死体だ。

「ひっ！！」

阿久津さんが驚きのあまり尻餅をついた。俺は顔こそ顰めたが、怯まず近づいた。響夜は顔を顰めもしないのだが。

見たところ、死体は住み込みで働いていたベルボーイだったらしい。死因は自殺だろう。近くに空っぽのコップと薬品らしき空き瓶があった。

理由は明確。奴らが現れ、仲間が喰い殺されたことにより精神的に限界を迎えたのだろう。遺書などはない。衝動的なものか。

俺は依然、腰を抜かしている阿久津さんを起こして告げた。

「行こう。今は供養してやる暇もない」

「は、はい」

かなりショックを受けているようだ。無理も無い。

「でも、一つ分かる事があった」

「？ なんですか？」

「奴らが現れた原因がウイルスだとしたら、もう空気感染はないらしい。そうじゃなかったら、コイツは屋敷の中を徘徊していたはずだ」

俺は分析の結果を阿久津さんに言う。

「それは喜んでいいこと？」

「ああ。もちろんそうだよ」

俺は阿久津さんの腕を取り、五階へと進むことにした。

五階も特に変哲はない。見取り図によれば、この階のど真ん中に六階に通じる大階段があるらしい。しかも六階には一部屋しかない。恐らくこの屋敷の主人の部屋だろう。

ここまで、寛人君がいつていたような視線や気配は感じることが出来なかった。彼の思い過ごしなのかも知れない。長い廊下を阿久津さんを庇う形で歩いていると、向こうから人影が見えた。

「おい、準一さんですかー？」

寛人君の声だ。どうやら合流できたらしい。俺達も速度を上げ、二人の姿を確認する。大きく開けている広間で俺達は合流した。その大広間には上へと続く階段がある。その階段は上った先が直ぐに大きな扉になっている。

「無事で何よりです。そちらは収穫が何かありましたか？」

「特に無いな。ここで働いていた人間の死体なら発見したが……」

「こつちも特になしです。誰も居ませんでした。やっぱ、僕の感じた視線は気のせいだったのかな？」

「そうかもしれない。後は六階を見て、宿泊棟の方を探して終わらだよ」

実はというと、本館の搜索は生存者探しの意味で行っていた。食糧などは恐らく別の棟に保管してあるのだろう。

「よし、じゃあ六階に……」

矢島さんが何時もの調子で声を放った瞬間だった。

それを遮るようにギィー、という扉が開く音が大広間に響き渡った。

俺達の反応は素早い。俺は瞬時に89式小銃の銃口を音がした六階の扉へと向けた。矢島さんも俺に続く。寛人君はというと、阿久津さんを庇う形で拳銃を構えていた。

一秒……二秒……三秒………何も起きない。

攻撃などは一切無いが、代わりに人影が階段の上に現れた。背は低い。

「あらあら？我が西園寺家の本宅に堂々と忍び込む輩が居たのかしら？」

高飛車で威圧的な声。お嬢様といった感じがいかにもする。

少し緊張を解き、俺も問い掛けてみる。

「この屋敷の生き残りか？なら話がしたいんだが」

俺の質問を聞いた少女は、

「ぶふっ！不法侵入の分際で私と対等に交渉するつもり？」

「ここは君の屋敷なのかい？」

「うーん、正確にはお父さんのかなあ？でも今は居ないから私が家主さんなのよ」

「家主さんならお願いします！食糧が無くて困ってるんです！」

寛人君が大声で叫ぶ。その声に少女が僅かに反応した。

「ひ、ろと？まさか逢海寛人なのかしら？」

「……そうです。できれば気付かれなくなかったんですけどね……
こんなところで再開するのも御免だったというか……」

「おい」

ん？いきなり少女の声が低くなったぞ。どうやらこれが寛人君の知り合いらしい。

「貴方、私の下僕だったわよね？」

「昔、ね」

「今もよ！」

「すみません……」

少女は寛人君を一喝し、自分が来た方向へと引き返していった。

「着いていらつしやい」

一言だけ告げた。

どうやらOKらしい。寛人君が居てくれてよかったと思う。本人はゴキブリを踏み潰した後のような顔をしているが。

とにかく少女の後を追うことにした。

六階の部屋は少女の私室らしい。壁にはアイドルのポスターが大量に貼られていて、机の上には如何にも女の子らしい装飾品が飾つてある。高級な貴金属が多いのは、金持ちだからだと言う事は言われなくても分かる。

今、俺達はそんな部屋の真ん中に置かれているソファ^{さいおんじしずく}に腰掛け、少女と向き合っていた。少女の名前は西園寺^{さいおんじしずく}零というらしい。西園寺といえば、有名な自動車会社だ。西園寺モーターズとかいったけ。

「で、貴方方は食糧が欲しいのね」

西園寺零は少し服を着崩していた。自室だということもあり、気を抜いているのだろう。

「俺達は律明学園に多くの避難民と一緒に避難している。今はこの暑さで食糧がやられてしまったんだ。全員の飢え死にを避けるためには大量の食糧の確保が必要なんだ。頼む……協力してくれ！」

俺は頭を下げた。雫は暫く、こちらを無表情な瞳で見つめていたが、

「……いくつか条件があるわ。それを吞んでくれるなら、この屋敷に備蓄してある大量の食糧をあげるわ」

「俺達が出来事なら構わない。どんな条件でも吞もう」

雫はそこで笑みを浮かべた。

「ん、まず一つ目。私の趣味関係の物品を学園内に運ぶ許可を出してくれること。部屋もお願いするわ」

「その程度ならOKだ」

「二つ目ね。そこに居る逢海寛人の所有権を私に譲ること」

「ええ！？それはm「承知した」」

俺は寛人君の言葉を遮って、了承した。寛人君はなにやら悲壮な瞳をこちらに向けているが、涙を吞んで無視する。

「じゃ、交渉成立ね。^{ウチ}家には大型のトラックが数台あるわ。それを使いましょう」

雫は立ち上がり、部屋を出て行った。

俺も安堵の溜息を吐く。

「これで食糧確保だ。何とかなって良かったよ」

しかし寛人君は恨みの籠った視線でこちらを睨んでくる。

俺はある一言で寛人君を納得させることにした。

「ま、皆の命を繋ぐためだ。諦めてくれよ」

さあ、後は学園に食糧を持ち帰るだけだ。

活路が見えてきたんじゃないかな。響夜の回収も忘れずにしないとな……。

俺はこころの中で笑い、ソファから立ち上がった。

伊東準一 8月14日 午前10時21分 渡良瀬市 市街地（後書き）

ご意見・ご感想をお待ちしています。

誤字脱字などのご報告もどうぞ。

次回は一行が学園に戻った後の話になる予定です。

逢海寛人 8月22日 午後13時33分 渡良瀬市 私立律明学園（前書き）

大変お待たせいたしました。

約一ヶ月ぶりの更新で御座います。今後はもうすこしペースアップをしていく予定ですので、応援宜しくお願いいたします。

逢海寛人 8月22日 午後13時33分 渡良瀬市 私立律明学園

僕は未だに目の前の状況が理解出来ていない。

隣には僕と同じように苦笑いを浮かべた響夜さんがいるが、この状況であまり頼りになるとは思えない。それよりも気がかりなのは目の前で仁王立ちをしている女性陣の方々だ。

理由を説明しよう。

僕は数分前まで、廊下を当ても無くぶらぶらと散歩していた。雅人は警備室の機械いじりに夢中だし、鈴や洋一たちもそれぞれの仕事で忙しい。僕は物資調達などに行ったので、あまり校内での仕事はなく、正直に言って平常時はとても暇だった。

この間、西園寺家の屋敷から食糧（+僕の主人？）を回収し、食料問題は解決されていた。校内の治安も、響夜さん達のお陰で不良が沈静化したので大分向上した。今の所、問題もなく平和な生活を遅れている。

でもきつと、その油断が今回の事態を招いたのだろう。

事の発端は僕が散歩の途中で、家庭科室の前を通った事だった。

家庭科室の前はなにやらいい匂いが漂っていたのだった。この匂いは誰かが料理を作っているのだろーと思って、僕は想像を張り巡らしてしまった。

「うん。きっと、誰か可愛い女の子が手料理でもしてるんだろうな。いいね、ご馳走になるのかな？」

僕は愚かにもホイホイと足を踏み入れてしまった。そして

「現在の状況があるんだ」

「誰に説明してんのよっ！！」

僕は頭を鈴に木刀で小突かれた。つーか、何で料理に木刀持ち込んでるんだよ！？

僕は心の中で目の前で木刀を握っている鈴にツッコんで、響夜さんを見た。

「寛人、この方々は一体、俺たちに何をさせたいんだ？」

「僕だって知りませんよ。直接、聞いてみたらどうですか？」

僕は再び目の前の女性陣を見つめた。

現在、この家庭科室に居るのは鈴と優香子、浅代さん、前に僕と響夜さんが助けた道祖本絢音。それに西園寺雫、阿久津さん。そして絶対にここに居てはいけない、我等が秘密兵器「島原和泉」。

そして僕と響夜さんはテーブルの前にこさえられたパイプ椅子に座らせられていた。

「で、俺は何をすればいいんだ？」

「僕も気になります。なんで拘束されてるんですか？」

僕らの質問に鈴が、

「くっふっふっふふ！！よくぞ聞いてくれたわね！これから始めるのは手料理のコンテストよっ！」

嫌な予感しかないが敢えて突っ込まない。

「今回、コンテストに参加する選手はここに居る女性全員。そしてアンタ達は審査員よ！」

勝手に話が進んでいくが、どうやら突っ込んではいけない空気らしい。とりあえず僕は呟いた。

「どうしてこうなった……」

しかし呟いたところで状況は変わらない。

響夜さんはもう諦めているようだ。僕も諦めるとするか。

「ではでは、まずはトップバッター、阿久津風襦ええ！！」

どうしてそんなにテンションが高いんだろう。鈴、何か嬉しい事でもあったのかな？

とりあえず、阿久津さんが頬を紅潮させながらも、僕らの方にや

って来た。手には二人分の料理がある。あれを食べて、批評すればいいのか。

「え、えーと。恥ずかしいんですけど、とりあえず煮込みハンバーグです……」

煮込みハンバーグか……、結構、美味しそうだぞ。

僕は目の前に置かれた湯気を立てている料理を見つめた。見た目はいい。問題は味だが……。

「「頂きます」」

僕と響夜さんは同時にナイフとフォークを取り、ハンバーグを切り分けた。その欠片を口に含む。その味は……、

「普通に美味しいですね」

「美味しくて突っ込むところもないな。凄いじゃないか」

響夜さんもパクパクと口に運んでいく。僕からしても、十分に合格点をあげられるくらい美味しかった。

鈴は僕らが煮込みハンバーグを大体、食べ終わったのを見て、明るい声で叫んだ。

「では、審査員に判定をして頂きましょう！一斉にどうぞ！」

「十点満点で記入するんだよ」

絢音もテンションが高い。ま、小さい子だしね。

僕は手元の紙に十点満点で点数を記入する。

僕は八点。響夜さんも八点だ。阿久津さんは少しだけ顔を輝かせて、嬉しそうに拳を握り締めた。

「おっと、中々の高得点だっ！さて、お次は天下無敵のお嬢様あ！西園寺雫だっ！」

僕は全身に鳥肌が立つのを感じた。ああ、これが蛇に睨まれた蛙の心情か。目の前の雫は僕を明らかに見下している。

「品目は豚キムチよ。とくと味わいなさい」

そう言っで、僕と響夜さんの前に平皿が置かれる。中にはよく定食などで見かける豚キムチが盛られている。見た目はまあまあ、つてとこだ。

繰り返すが問題は味だ。

「頂きます」

僕は静かに呟き、箸で肉を摘んだ。そして口に運ぶ。肉の感触が伝わったと同時に、例えようの無い激痛が口を走った。

「ぼくおあつ！！がっ……はっ！！何だよこれ！辛すぎだろ！！」

「……」

響夜さんは無言で口に運んでいる。辛い料理は好物なのかも知れない。

それよりも問題なのは雫だ。今の僕の反応を見た彼女は、冷たい笑みを浮かべている。目に光は灯っていないのが、また怖い。

「へえ、そうか。寛人は私の料理は食えないって言うんだね。そうかそうか」

そう呪詛のように呟いて、腰につけていたある物を手に持つ。

ちなみに今、学園内では武器の所持が認められている、有能な人間は銃器を持っていて、その他の人間も刃物や鈍器を持ち歩いているのだ。

雫が持っているのは鉈。父親の愛人を殺すのに最適なアレだよ。

僕は当然、謝るしかない。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさい」

うん、どこかで見たことがあるね。

雫は冷たい目を僕に向けたまま、静かに料理を下げた。

やべえ、怒鳴られるより怖えよ。

響夜さんは手元のナプキンで口を拭き、コップに注いである冷水を一気に飲み干している。

「あの、さっきの豚キムチ、よく食べれましたね。もしかして辛い食べ物が好きとか？」

「……さっきのは辛すぎる。口が痛いんだ」

僕の予想は外れていたらしい。別に響夜さんは辛い物が好きな訳ではないようだ。

「でも、平気で食べてましたよね」

「……特殊部隊では対拷問用の訓練もやるんだよ」

なんかキリツと返された。

僕は突っ込もうとしたが、それを遮るように鈴の音が響いた。

「さあて、色々とトラブルはあったものの、コンテストは終わっていない！さあ、判定をお二方にして頂きましょう！」

僕は躊躇せず、一点と紙に書いて放り投げた。響夜さんは何を思ったのか、三点だ。

「合計点数は四点。意外と低い結果みたいね、どう思う響さん？」

後ろで控えていた雫は実に朗らかな笑顔で、

「後で覚悟しておいてね、寛人」

受けて立ってやるさ。僕は奴隷じゃないんだからな。

「では、お次の選手。ご当地アイドル、長谷川瑞穂お！」

鈴の合図で料理を持った瑞穂さんがやってくる。うん、やっぱりアイドルは違うな。可愛すぎるだろ。

「品目はビーフシチューだけど、勘違いしないでねっ！別にアンタたちに食べさせるために作ったんじゃないんだからねっ！」

何、そのツンデレ？　もしかして素？　可愛いからいいけどね。

僕と響夜さんは同時にスプーンを取り、目の前に置かれたビーフシチューを口に運んだ。

口の中にまるやかなコクと風味が広がり、あっというまに僕の脳内は幸福に満たされる。

「美味しい！さては、隠し味にすりおろした玉葱を入れてますね。そして多分、この風味は醤油。まさに洋と和の織り成す傑作です」

「うん。これはかなり下ごしらえがしてあるな。もしかしてこの日のために昨日から寝かしておいたんじゃないのか？」

僕と響夜さんはそれぞれの批評を口に出す。

それほど瑞穂さんのビーフシチューは美味しかった。

（注意、この物語はあくまでもゾンビの蔓延する世界で生き残ろうとする人々の物語です。決して、料理小説ではないのであしからず。）

一通り、食べ終わった僕らを見て、鈴は再びマイクで叫ぶ。

「さあ、様々な好評が飛び交った！果たして判定は？」

僕は何のためらいもなく、九点を出した。響夜さんも同じだ。

「おおっと！？最高得点が出ました！しかし何故か、満点には至らなかったようです」

「もう少しとろみが欲しかった。でも、十分美味しかったぞ」

「僕も同感です」

「ありがとうございます！それでは次の選手です、浅代華恋っ！」

その叫びと同時に浅代さんがお盆を持ってこちらにやって来た。なにやら品目が多いようだ。

「和食のフルコースです。有り合わせなので味は保障出来ませんが、どうぞ召し上がってくださいね」

そう告げ、料理がテーブルに置かれる。

「「うおおおおおー！」「」

思わず同時に感嘆の叫びをあげてしまった。

盆には茶碗蒸やお吸い物、和菓子など様々な和食の楽園が広がっていた。

これで有り合わせとか凄すぎます、浅代さん！

とにかく僕は箸を手に取り、鯛の煮付けを口に入れた。

「お、美味すぎるだろおおおおお！！」

「……これはプロ級の腕前だな。褒める言葉も見つからない」

響夜さんも素直に賞賛している。

それほど浅代さんの料理の腕は凄かった。これは優勝確定だな。

「さあ、得点をどうぞ！」

僕は迷わず十点を記入する。響夜さんも同じく十点だ。

なんやかんやでこのメンバーでいるのは楽しいのかもしれない。確かにこの先、世界がどうなるのかは分からない。でも、僕は確かにこの瞬間を楽しんでいる。

今はこの危なくて、不安定で　　だけでも楽しい生活を守っていききたい。

そしてここに居る皆の笑顔を守っていききたい。

「おい、寛人君？判定聞いてた？」

鈴の声が、完全に自分の世界に入っていた僕の耳に届いた。

「あ？う、うん。聞いてたけど」

もちろん嘘だけど、ここで聞いてなかったと答える理由がない。
まあ、浅代さんの優勝は確定だろうし。

しかし。

僕は最重要人物の存在を忘れていた。そして今、鈴によってその人物の声が高らかに述べられた。

「では、ラストバッター！島原あ、和泉いい！！」

僕は戦慄した。

どうして気付かなかったんだろう。初めに参加者の中にいたじゃないか！？

本人はまったく悪気がないようだから、恥ずかしそうに笑っているが冗談じゃない。アレを喰ったら、死ぬ。

「ちょ、ちょっと待ってください！もうお腹いっぱいですよー！」

「お、俺も満足できた。それに満腹の時に料理を食べても、本当の美味しさは伝わらないと思うぞ？」

僕ら二人は必死に言い訳をする。

でも、世界は自分にだけ優しいわけではない。

和泉さんは悲しそうな顔、それこそ捨てられた子犬のような表情で、

「も、もしかして……前の卵の厚焼きは不味かったんですか……？」

おい、逢海寛人。男にはな、絶対に下がれない時つてのがあるんだぜ？

「う、嘘だッ!!」

僕は絶叫していた。しかしそんな僕に構わず、事態は進行していく。

「ええっと、品目は炒飯チャーハンです。ど、どうぞ」

和泉さんの料理が僕らの目の前に置かれた。

ほくほくと湯気を立てるそれは……、

（あれ？意外と美味しそうだぞ？）

炒飯はまったくもって不味そうには見えない。むしろ、あれだけの品目を食した後だというのに、空腹感が僕の脳髄に走った。

そりゃ、そうだ。和泉さんだって何時も兵器を製造している訳じゃないよな。きっと、この間は何かを間違えたんだ。

「「い、頂きます」」

僕と響夜さんは同時にスプーンを手に取り、それに突き刺した。
そして湯気が上がっているその炒飯を口に運んだ。

パクリ、と。

「……………」

「あ

（逢海寛人と橘響夜がログアウトしました）

逢海寛人 8月22日 午後13時33分 渡良瀬市 私立律明学園（後書き）

ご意見・ご感想お待ちします。

誤字脱字などのご報告もどうぞ。

これから章ごとに分けることにしました。

逢海寛人 8月23日 午前0時11分 渡良瀬市 私立律明学園（前書き）

なんだか、またまた間が大分空いてしまいました。

部活とか忙しすぎ……。

逢海寛人 8月23日 午前0時11分 渡良瀬市 私立律明学園

「…………あ？」

僕はなんだか悪夢を見た気がして、目を覚ました。

周りは既に真っ暗だ。どうやら夜らしい。問題は何故、僕がここで寝ていたのかだ。頭を整理して、今日？ の行動を思い出そうとする。

「あ」

思い出した。

僕は確か女性陣が開催した料理コンテストに響夜さんと一緒に審査員として参加したんだった。そこで途中までは良かったんだけど、最後に和泉さんの料理の料理を安易に口にしてしまったせいで、僕は気絶した……であつてるのか？

僕は軽く頭を左右に振った。

頭痛がする。和泉さんの料理の後遺症だろうか。だったら威力抜群だな。

「ようやくお目覚めかな？」

不意に背後から声が響いた。

僕が咄嗟に振り返ると、窓際に腰掛けた響夜さんがいた。

「あれ？どうしてここにいるんですか？」

僕が尋ねると響夜さんは、

「ああ、見張りだよ。この教室から、裏門が良く見えるんだ」

僕は周りを見回した。

ここは僕が普段、寝起きしている教室だ。隣にはゴツイ男前の怜汰、その向こうに雅人がいる。鈴とか女子たちは別室だ。ちなみにこの教室には高校生もいる。

「まったく、昨日の料理は災難だったな。胃袋に感謝しろよ」

響夜さんは呆れたように首を横に振った。

僕は響夜さんの言葉に違和感を覚える。

「あれ？ということは、僕は丸一日も眠ってたんですか？」

「うんにゃ。正確には零時を回ったから、昨日ってことだ」

そっか。なんだかとても、あれから時間が経った気がする。

そう言えば結局、あの後コンテストはどうなったんだろう？ 和泉さんが傷ついていないかとても気になるし、何よりも雫のあの感情の籠っていない目が怖すぎた。

「和泉なら、平気だぞ。浅代が上手く誤魔化してくれたみたいだ。」

心配してたらしいから、明日、顔を見せてやればいいんじゃないか？」

響夜さんが僕の心を見透かしたかのように答えを言ってしまった。
サイコメトラ読心能力者か何かなのか？

「あはは。そうですね。でも、傷ついてなくて良かったです」

「俺達の胃袋は深刻な傷を負ったけどな。ま、彼女だって悪気は無いんだ。俺達に喜んで欲しくて、作っただと思う。だから、彼女を責めるなよ」

「……響夜さんて、和泉さんに甘いですよ？何ですか？」

「そこはせめて優しいと言った欲しかったんだけどな。甘いというか、態度が柔らかいのは個人的な理由があるだけだ」

「やっぱりロリコンだったんですか……」

「ちょっと待て一体何時誰からそれを聞いたんだオイ」

「お、落ち着いてください！噂ですよ、噂！」

僕は自分の失言の訂正を試みた。

だが響夜さんは指をバキボキと鳴らし、恐ろしく暗い笑みを浮かべている。

「で、真面目な話、どうしてですか！？」

勢いで話の軌道修正をする。通じたのかどうかは定かではないが、どうやら響夜さんはこちらに迫ってくるのをやめてくれた。

響夜さんは少し考え込むように、頭に手を当てた。

「話してもいいが、それを話すと脱線しまくるし、俺の今の現状にも関係してくるから、面倒だと思うぞ？それでも聞くのか？」

「あ、はい。お願いします」

僕は軽く一礼。

響夜さんは一つ一つ思い出して、それを紡いでいくように話し始めた。

「俺が彼女に優しいというか、甘いというか……まあ、それはズバリ、彼女が俺の妹に似てるからだな」

「妹が居るんですか？」

「ん？ああ、居るといっか、居たんだよな」

あれ？もしかして地雷？

僕はそう思ったが、響夜さんは全く気にした様子もなく、話を続けていく。

「正直に言えば、殺されたんだ。強盗に」

僕はもう何もいえない。どうやら冗談では済まされない領域に踏

み込んでしまったようだし、何よりも語る響夜さんの目は、真剣そのものだった。

「俺が高校に入りたての頃だったかな。俺は、友達ん家で盛り上がってて、帰りが遅くなっただ。ま、入学したての学生が親睦を深めるための飲み会みたいなモンかな？もちろん、コーラとかジンジャーエールばっか呑んでたけどな。帰りは二三時位だったと思う。途中、家に連絡を入れたんだけどな、誰も出なかったんだ。その時点で気付くべきだったのかもしれない。」

ここからは簡潔に話すけど、俺もあまり覚えていないから曖昧かもしれない。

まず、玄関に母親が倒れてた。頭を鈍器で殴られてたんだな、きっと。玄関のカーペットは血に濡れてたし、何よりも頭蓋骨の白い部分が見えてた。俺はその時、自分で自分が怖くなるくらい、落ちて着いてたんだ。考えても見ろ。目の前で人が、それも自分の母親が死んでるんだぞ？それでも俺は落ち着いてた。ま、それでもなけりゃ、この仕事なんかやってられないけどな。

俺はリビングに行った。そこには、ソファアの上で胸から血を流してる父親がいた。胸の、丁度、心臓の位置に包丁が刺さってたから、即死だったんだろうな。一階は物色されていた。俺は、麻里が二階に隠れていて、生きていると信じたかったんだ。もう、とつくに犯人は逃げたって。

俺はそう信じて、自分に言い聞かせて、上に向かった。階段は冷たかったよ。それに寒かった。麻里の部屋は階段を登った先の廊下、その一番奥にあった。

麻里の部屋から、物音が聞こえた。なんだか、ごそごそ動くような音がな。俺は走った。きつと麻里はあの部屋で怯えているって思っ
て……、きつと何時ものように、涙でぐしゃぐしゃにした安堵の笑顔で俺を迎えてくれると……………」

響夜さんはそこで、言葉を切った。

「……どうしました？」

「ここから先は誰にも話した事はない。大雑把にならあるんだが、ここまで詳しくは初めてだ」

「……僕はここまで聞いてしまったんです。続きをお願いします」

そうか、と響夜さんは溜息を吐き、また口を開いた。

「強盗は、一人じゃなかった。俺が麻里の部屋のドアを思い切り蹴破って入った時、そいつ等は麻里の机を物色していた。麻里は……、衣服も身体もボロボロにされて、ベッドの上で死んでいた。首を絞められた後、頭を鈍器で殴られ、刃物で全身を滅多刺しにされていた。俺は……っ！」

響夜さんは拳を硬く握り、机を蹴飛ばした。ねじが飛び、机は分解してしまった。

「俺は動けなかった。目の前の光景が理解出来なかったんだな。母親や父親が死んでいるのを見て、俺は冷静で居られた。なのにっ！なのにアイツがあとまで壊され！殺されたのが俺には理解できなかつたんだ！！俺は……、強盗に殴られた。鈍器でこめかみを殴られて、廊下に倒れこんだ。幸運だったのは、悔しさと痛みで気絶しなかったことだな。俺は許せなかった。麻里を壊した奴らを。だから俺は……」

響夜さんはそこで顔を上げた。その顔は恐ろしい程に無表情だった。

「奴らを殺した……」

唇を噛み、息を漏らす。どこか、笑いを噛み殺しているようにも見える。

「俺は手近にあった、金属バットで鈍器を持ったほうの頭を殴った。ソイツは膝をついて、倒れそうになったが、間髪入れずに俺は頭に振り下ろした。実際、頭蓋骨を叩き割る感触は面白い程、爽快だったな。もう一人の方は、歯を全部叩き折った後、指を切り落として、左目を包丁で抉り取った。それから、泣き喚くのを無視して、二階から落とした。即死だったんだろうな。その後のことは覚えていない。麻里達の葬式も、取調べも何も覚えていない」

ふう、と響夜さんは溜息を吐いて、立ち上がった。

「すまない。すこし感情が入りすぎた。見張りも交代したいし、俺はもう寝るよ」

そう言って、教室の出口へと向かっていく。

「ま、待ってください。どうして、そこからこの仕事に就いたんですか？」

響夜さんは最初に言っていた。この話をすれば、自分がどうしてこの仕事に就いたのかの理由にも繋がってくると。

「もしかして、妹さんの復讐ですか？」

「ああ、違う」

響夜さんはあっさりと言った。

「楽しいから、としか言いようが無いな」

え？と僕は間抜けな声を上げていたと思う。

「俺はあの事件以来、人とマトモに付き合えないんだよな。相手は俺を心配してくれているのかも知れないが、俺はそんな奴らに好意を向けられない。だから、高校も中退して、ここに居るんだ。俺の部隊の奴らは皆、訳有りだしな」

響夜さんは笑っていた。僕に軽く手を振りながら、教室のドアを開けて、出て行く。

「寛人。こんな仕事、お前は絶対やるなよ。俺みたいな馬鹿な人生歩んだって、得なんざないからな」

響夜さんはもう一度、はははっ、と笑って、教室を後にした。

僕は何故だか、気分が沈んでいた。なんだろう。人の裏側というものを見てしまった気がする。さっきの響夜さんの言葉から考えれば、あの温厚な準一さんだって、何らかのわけがあって翡翠隊に所属しているらしい。

「お前が背負う必要なんて、ないだろ」

突然、暗闇で一つの声が響いた。

僕が雅人たちが寝ている場所を見ると、怜汰が大きな身体をのっ

そりと持ち上げているところだった。

「れ、怜汰……」

「悪い、聞いちまったよ」

「僕さ、なんか後悔してるみたいだ。聞かなけりゃよかったって」

「別に気にする必要はねえだろ。確かに重くて暗い過去の話だったかも知れないけどな、きつとあの人だって、本当に話したくないなら話さなかったと思うぞ。自分が抱えてる重い物って、人に話すと楽になることがあるだろ？きつと、あの人だって誰かに聞いて、痛みをわかちあって欲しかったんじゃないか？お前が響夜さんじゃら聞いたことは一生、忘れるな。でも、背負わなくていい。その問題は、きつとあの人自身が解決する時が来ると思う」

「そうか……な。そうなのかな……」

「きつとそうだ。明日も早いんだからもう寝ろよ。おやすみ」

「そうするよ。でも、少しだけ涼んでくる」

僕は半ば独り言のように呟き、教室を後にした。

廊下に出て、窓を開ける。夏の夜風が額の汗を流しとっていく。僕は少しだけ、何かを学んだ気がしていた。

逢海寛人 8月23日 午前0時11分 渡良瀬市 私立律明学園（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。
誤字脱字などのご報告もどうぞ。

橘響夜 8月31日 午前10時10分 渡良瀬市 私立律明学園（前書き）

大分、間が空いてしまいましたが大丈夫です。生きていますから。
漸く新章というわけでちょっとストーリーやプロットなどを考えて
いたんです。

橘響夜 8月31日 午前10時10分 渡良瀬市 私立律明学園

2xxx年 八月三一日。

世界中で人を喰い殺す暴徒が初めて確認されてから、二ヶ月近くが経過していた。

今や、世界六十五億人の人口は三分の一の二十二億人にまで減少していた。三分の二は力尽きたか、奴らの仲間になったのだらう。感染が激しい地域では、住民が既に逃亡し、奴らの住処となっている。大都市圏などでも同様、感染が爆発的に起こったので、軍警察も対応仕切れずに、敗走を喫した。民間人の避難誘導を断念し、政府の要人のみを安全地域まで護送。中には、上層部の指揮下から抜けて、分隊規模で各地で略奪行為を行う部隊まで出た。

それでも何とか、統制を維持している軍警察及び政府機関は臨時政府を設け、対応していた。

しかし今、各国は暴徒相手に対する戦闘を断念し始めていた。それよりも、弱体化と混乱を喫している他国を攻撃することに政略の重点を置いた。

もちろん、表立っての侵略行為は認められないため、皆が共通の理由を並べるのだ。『暴徒の侵略に遭っている他国を救う』のワンフレーズを。

そして八月三一日。

この日、遂に初の核攻撃が行われた。

これは新世界の幕開けか、それとも旧世界の終焉か。

「今日はパーティでもやろうか」

俺は唐突に呟いていた。

俺は今日、朝から学園の大会議室に十人ほどのメンバーを集めて、今後の方針について話し合っていた。議題はもちろん今後どうするかだ。

食糧は十分にある。あと、数ヶ月は余裕で持つだろう。水も雨水など加熱し、殺菌することで半永久的に手に入れることが出来る。ただし、雨が降らない日が続くということが弱点だ。

それよりも差し迫った問題は、学園で生活している生徒や子供のメンタル精神面だ。

何時までも奴らに囲まれた学園で過ごす事は、かなりの精神的重圧を与えるものだと思ふ。外に出ることは出来ず、限られた空間でしか行動できない。そして何よりも教師が初日で大勢死亡しているため、充実した授業が行えないことはナンセンスだ。

今のところ、生き残った教師や大人が生徒たちに簡単な授業を行っているが、やはりそれも不足している。時間的な意味でも、人材的な意味でも、内容的にも。

そして生徒たちの間では、救助が来ないことに対して、疑念を抱き始めているものもある。中には、外に出て安全地帯まで逃げようという、過激な発想を漏らしている高校生もいた。

そんな窮屈な環境の中で、俺が思いついたのはその案だった。

「いやいや。唐突にパーティってなんなんですか？」

寛人が、俺の顔を困惑した面持ちで見つめて尋ねた。

会議室に集まっている阿久津さんや松下洋一、準一や鈴など他のメンバーも同じような表情をしている。

「ほら。今日ってアレな日だろ？」

「アレ？」

「アレといったらアレだ。八月三十一日と云えば、世間一般では夏休み最終日じゃないか」

「そっぴゃあ、そうだな」

洋一が口笛を鳴らし、独り言のように呟く。

「で、どうして夏休み最終日だとパーティなんです……か？」

阿久津さんがかなり真剣な顔で尋ねてきた。これは真剣に答えねば。

「お前等、よく去年や一昨年を思い出してみろ。今日という日に口クな思い出があったか？分かりやすい例を出せばな、『やべー夏休みの宿題終ってねー』とか、『うわー夏休み今日で終わりとか悲しいー』とか、『宿題終ってねえのに恋人役？』とか、『なんかいきなりアステカの魔術師が襲ってきたー』とか色々な不幸イベントが起こる日だろうが」

「最初の二つはともかく、最後の二つはおかしいですって!!」

寛人が勢いよくツツコミを入れてくる。

「まあ、あれだ。とにかく皆を元気にするには一番、手っ取り早い方法だろ?」

「否定は出来ませんね」

「肯定もしないのな」

俺は素早く切り返し、立ち上がった。

「というわけで実行だ。料理が出来る奴は今から下ごしらえ始めとけ!。他の奴らは体育館のセッティング。あのわつか作んの忘れるなよ」

「わつか……、ってあれ?」

「あれだよ。パーティで天井とかに吊るすわつかだ」

「ああ、分かりました」

寛人が素直に頷いて、隣の阿久津さんに、学校の備品の中に折り紙が無いかを確認している。他にも料理の打ち合わせを浅代とするとかで、佐倉鈴や阿久津さんを除く女性陣が出て行った。あ、和泉は厨房に立ち入り禁止を伝えないとな。

「てか、皆随分と素直だな。ふざけんなって言われると思ったんだが……」

俺は残ったメンバー、準一と寛人と阿久津さんに向かって呟いた。

阿久津さんは小さい声で笑いながら、

「きつと皆さんもお疲れなんだと思います。ハメ外したい時だつてあるんですよ」

「僕はパーティ、いい考えだと思いますよ」

二人はどうやら俺の計画を一応、推してくれているらしい。

俺自身も、このパーティで皆が元気を取り戻してくれればいいと思う。救助は必ず来るし、無事に生き残る事をただ信じているだけで、心持ちは大分変わってくるものだ。

俺が楽観的な思考に耽っている中、

「おい、響夜さーん。ちょっといいか？」

「あん？」

見れば、先ほど出て行つた松下洋一が居た。なにやら、周りの幼女が居る。まさか……、いや、まさかとは思つがな。

「おいおい。俺を性犯罪者のような目で見るのは、やめろよな。それより重要な話があるんだよ」

「重要な話？」

俺は思わず聞き返してしまった。洋一は彼の周りにいる幼女を促す。

「どうした？その怖いお兄ちゃんが悪戯（性的な意味で）してるのか？」

「テメエ、ぶつ殺すぞ」

「すまない。で、なんだ？」

「どうやら、寝てる時に」

「ムラムラしてくると？」

「やっぱぶち殺す、と鉄パイプを握り締めた洋一を、俺は刹那のスピードで宥めた。

「それで、続きを頼む」

「寝てる時に隣の部屋から妙な物音がしてくるらしい。呻き声というか、人が歩くみたいだな。で、俺は校内にもしかしたら……本当にもしかしたらだが、奴らが侵入してる可能性があるんじゃないかと思っただよ」

「呻き声に足音、か。嫌な予感がビンビンだな。で、その幼女が寝ているのは何処だ？」

「西棟の一階。初等部、一年四組の教室だ。隣の部屋が問題なんだけだな」

「一年四組……隣は、循環室か」

循環室とは、この学校にとって欠くことのできないシステムだ。下水や校内の水道管、空調や換気システムなど、校内における循環システムが集まっている。強いて云うならば、校内で一番重要な部屋だけあって、侵入もちろん容易ではない。特に元々、隣が初等部の教室だということもあり、セキュリティは万全なはずだ。

「確かに、まさかの話だな。あそこに忍び込めるような奴らが居るんだとしたら、俺は素直に賞賛してやる」

「じゃあ、放置って方向か？」

そこは重要な問題だった。確かに可能性は少ないとして、放置しておくのも気が引ける。

「おっし。折角のパーティやるわけなんだし、不安要素は取り除かないとな……準一！」

「どうした響夜」

「一時間で終わらせよう。探査隊を至急、呼んで来い」

準一は黙って頷き、部屋から出て行った。

俺はさっさと終わらせてパーティの会場準備でもしないとなく、ぐらいの認識でベルトからナイフを抜き、磨いた。

急遽、集められた探査隊のメンバーは十五人。ほとんどが中高生

で、大人は俺と松山位のものだ。

実はと言うと、探査隊自体は前々から編成していた。そして、初仕事がこれ、と言うわけだ。探査隊の中には、寛人の友人である堺怜汰やいつぞやの不良に苛められていた眼鏡の少年 たかさきくにひこ 高崎邦彦も居る。

しかし、彼はあの時の彼ではない。

高崎はあれから銃の手ほどきを受け、今では拳銃を扱えるようになった。もう、昔の弱々しさはどこにもなかった。

そして今回、特別に阿久津さんが同行する。理由はこの学園の生徒会長であり、構造については詳しいからだ。

俺は循環室の前に集まった全員を見渡し、告げた。

「よし。お前等、今日は初仕事だ。これからこの循環室内をチエックする。じゃ、阿久津さん、説明を」

俺の言葉を受けて、阿久津さんが一歩前へ出た。

「皆さん、循環室の中はその……、暗いので気をつけてください」

「以上だ」

「「え？」」

みんなが同時に呟くが、俺は軽く無視する。

「中ではお互いの間隔を二メートル以上空けるな。それと、単独行動は慎むように。では突撃」

阿久津さんが俺の言葉が終わったのを見て、循環室のドアを開けようとする　　が、俺はそれより先にドアを蹴り開けた。

「ええっ!？」

驚きの声を上げるが、ドアの向こう側に何がいるか分からない以上、のんびりとドアを開けることが出来ない。本当なら蹴破るところだが、そこは手加減だ。

内部はやはり暗く、状況はちつとも掴めない。

「俺に続け。警戒は怠るな。重火器を持っている奴は前面へ、小火器は少し下がっている。行くぞ、松山」

「了解です」

俺と松山がまず、突入する。ライトを点け、まずは天井、側面などをくまなく観察する。

「異常なし……、入れ」

続いて、ベネリM1を構えた怜汰が突入した。

ベネリM1はどちらかというとマイナーな散弾銃だ。ベネリM3の後継種に劣る点多々あり、最近では市場から姿を消しつつある。しかし未だに日本に対する輸入は行っているので、お目にかかれなわけではない。

その後が続いて、次々と探査隊のメンバーが入ってくる。各々、散開して警戒に当たった。

小さなライトで照らされているだけの範囲を見る限り、横幅はそれほど広くはない。左右に教室があるので、横幅には限りがある。なので奥行きを深くすることでスペースを増やしているようだ。窓がないため、昼間だというのに真っ暗で、湿っている。不気味なのは、あちこちに走っている配管やパイプ、巨大な装置だ。低い音を立てるボイラーは、その音を聞いているだけだ精神を削られていくような感覚を覚える。

隣の松山が呟いた。

「もしかして声の正体って、この音じゃないんですか？」

しかしそれは違うと、俺は断言できる。

「ボイラーは夜には止めてある。つまり声の正体は、ボイラーが停止してから行動すると思った方がいいだろう。つまり夜行性ってわけだ」

二十メートルほど、俺は反対側までたどり着いた。奥には、一際大きな機械が存在していた。どうやら音源はこれのようだ。俺は近づき、ライトで辺りを照らして観察を始める。松山は別の機械の隙間などを調べている。

「これだけデカイと電力凄い食うんだろうな……」

くだらない呟きを漏らした俺はふと気づいた。

俺のすぐそばのパイプに液体が付着している。ライトで照らしたぐらいでは色は分らないが、水ではない気がする。

（この違和感は何だ？）

俺はパイプに近づき、液体を観察した。どうやらそれは、付いているといったより、こびり付いているの方が表現として正しい気がする。

俺はその液体の落ちる先を見た。パイプの切れ目から垂れている様子を見ると、大分粘性があるようだ。昔に見たエイリアンの映画に出てきたエイリアンの卵の液体を想像してしまう。

俺は上を見上げる。

液体は天井のパイプが絡まりあった空間から垂れているようだった。

俺は急に悪寒を感じ、振り返ろうとした 瞬間、

「ああああああああああッ！！！！！！」

大絶叫が暗い閉鎖空間に響き渡った。

俺は咄嗟に89式小銃を構えなおし、

「どつした！？報告しろ！」

叫ぶが、既に隊列は乱れ始めていた。唯一、異変を感じるのは

地面に投げられたライトのみだ。

「全員後退しろ！背後を見せるな！」

俺は叫び、松山に合図を送り、悲鳴があつた場所へと向かう。

そこには茫然自失といった感じで腰を抜かしている一人の中学生が居た。拳銃を床に落とし、ガタガタと震えている。

「何があつた？」

少年はゆっくりと指し示した。その先には蓋が開けられたマンホールのような穴が口を開けていた。

「アイツが……高崎がやられたんだよ！！」

「落ち着け。何があつたんだ？」

「わっかんねえよ！アイツがマンホールを覗き込んだら、突然引きずり込まれたんだよ！よくわかんねえけどやられたんだよ！！」

錯乱している。話を詳しくは聞けなさそうだ。

俺はいつの間にか集まってきた全員を見渡した。

「聞いたとおりだ。高崎が連れ去られた。かといって、見捨てるわけにもいかない」

「どうするんですか？」

松山が俺に尋ねた。

「決まってる。俺が連れ戻してくるんだよ。もし、四十分経って戻ってこなかったなら、俺は死んだと思って、ここから脱出してくれ」

そう言い、俺はマンホールを覗き込んだ。

「阿久津さん、ここは何か分かるか？」

「恐らく下水かと。水は分かりません」

そうか、と俺は頷く。

それを合図にして、漆黒の空間へと飛び込んだ。

橘響夜 8月31日 午前10時10分 渡良瀬市 私立律明学園（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。
誤字脱字などのご報告もどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6295n/>

END OF THE WORLD

2011年8月5日22時43分発行